政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページii

はじめに

私が住む田端の滝野川第一小学校の卒業式では、卒業生が体育館の壇上で卒業証書を受け取る前に、一人ひとりが将来自分は何になりたいかという希望を述べることになっている。毎年その卒業生たちの元気な声を聞くたびに、その夢に引き込まれてしまい、今ではここの卒業式に出席できるのが楽しみである。

近年目立つのは、「ボランティア活動をしたい」、「人の役に立つ仕事をしたい」、「心理カウンセラーになって心に傷のある人を助けたい」、「動物を助けたい」、「科学者になって環境問題を解決したい」、「プロ野球選手になって親に楽をさせたい」、「世界中を見て回りたい」、「漫画家になって人を楽しませたい」、「料理屋になって美味しい食べ物を提供したい」、「Ｊリーグ、ボクシング、バスケット、ヨットなどの選手になりたい」といった具合である。

ほかになりたい職業として、介護士、保母、幼稚園の先生、女医、看護婦、獣医、イルカの調教師、犬のトレーナー、通訳、ゲームデザイナー、バレエの先生、タレント、イラストレーター、小説家、インテリアデザイナー、美容師、などがある。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページiv

驚いたことには、昨今評判の悪い政治家、役人、銀行員などがいないばかりか、サラリーマン、ジャーナリスト、弁護士、農業もゼロ。経済大国を支えてきた自動車、電機、コンピュータなどハードの製造業もゼロ。飲食関係を除くと商店を継ぎたい人もゼロ。社会生活に不可欠な国語教師、刑事、鉄道運転士が一人ずついたのには救われた気がした。

これらのことから、以下の特徴に気がついた。

一、会社などの組織ではなく、一人でできる仕事が多い。

二、社長や首相など、トップになりたい子供は一人もいない。

三、人のために仕事をしたい、という意識が極めて強い。しかも、押し着せでない自然な発想である。

四、ボランティア活動や、NGO（非政府機関）活動が職業として市民権を得た。私のように社会的に認知されていない時代にボランティア活動をしてきた者にとっては感慨無量である。

五、動物や、環境や弱い存在に対して優しい気持ちがあふれ出ている。

小学生たちは、私たち大人が作ってきた社会を本能的に否定し、そのひずみを是正することを潜在意識の中から求めているのではないか、と私は感じる。社会の「おかしなこと」を大人よりも本質的に把握している、これら小学生の感性や洞察を摘まずに、伸ばしてあげることが、社会全体の病を救うことにならないか。

そして、この「おかしなこと」のド真ん中にいるのが政治家であるのは間違いない。この三年間に逮捕された国会議員が七名、辞職した国会議員が九名。辞職した知事が三名にのぼる。すべてが政治とお金に絡むものである。その結果、貸し渋りで零細企業の経営者が泣き、増税や医療費負担率の値上げでサラリーマンが泣き、癒着や脱税、無駄な公共事業で税金が泣いている。しかし、泣いているのは私たちの身のまわりだけではなく、世界中でテロと大国による戦争の狭間で多くの命が泣いている。日本国内でも小さな命が失われたり、小さな子供による犯罪で失われる命も激増している。そして欧州の熱波、地震、集中豪雨、冷夏など地球全体も泣いている。

「おかしなこと」を正すには、政治家に任せるわけにはいかないばかりか、政治家だけが変わってできる状況はとっくに過ぎている。田端の小学生が察知しているように、今の大人社会全体を変えなければ、泣いている地球も、命も、零細企業の経営者も、サラリーマンも、税金も救うことはできない。

大学時代のアルバイト先で、国会議員とそれにたかる選挙民の実態を垣間見た私は、「政治とは汚いもの、はばかるもの、近づくべからざるもの」と感じ、世界中でボランティア活動に従事していた。しかし、皮肉にもアフリカの難民キャンプで政治や行政の「おかしなこ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページvi

と」の現場を見せつけられることになった。

「政治は汚い」と無視することは余計政治を悪くし、結局、悪政や無策のツケが国民を泣かせてしまう。ボランティア活動という良いことをしていると思う自己満足こそ、独善的な無責任だということに気づいた。

小学生たちは、今までの社会と逆のやり方、生き方が「おかしなこと」を直す道だと感じている。これからは今までのやり方で「政治家になりたい人」、「社長になりたい人」、「役人になりたい人」に代わって、今までは縁のなかった人たちが変えていく時代だ。そして、その主役が小学生たちが描く、自由で、しがらみがなく、思いやりの豊かな一般の国民ではないだろうか。

NGO、つまり、自立してどこにも属さない国民が政治を変え、「おかしなこと」を正していく時代である。

本書は、私の生き方を変えてくれた世界の旅と援助の現場と、市民が政治を変えた現場からの報告である。

二〇〇三年九月

藤田　幸久

目次

はじめに　iii

第一章　そんなに簡単に死んでいいものだろうか――3

一、子供を失う親、もぎとられた苦しみ　4

二、いつまで悲しみが続けばいいのか　15

三、戦争をなくせない人類のおろかさ　21

第二章　世界中の家族を覗いた青年時代――25

一、二年間、十四カ国百の家庭でホームステイ　26

二、お互いの違いを知る、そして共通点も知る　41

三、「戦後」という言葉は日本だけにしか通じない　52

四、日本には「難民」や「人権」という言葉がなかった　62

五、戦争をつくる人、なくす人　69

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページviii

第三章　平和を実現する心と心の響きあい――79
一、ナチスへの恨みを氷解させたフランス人女性　80
二、アメリカ議会での日本人による最初の謝罪　88
三、自分を変えることで労使のいがみあいを解消　101
四、日本がリードしたコー日米欧経済人円卓会議　105
五、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」　113
六、宗教間対話と世界宗教者平和会議（WCRP）　121
第四章　地雷でなく花を――127
一、日本がはじめて遭遇した難民　128
二、相馬雪香の怒りと全国行脚　136
三、森進一さんと「じゃがいもの会」　146
四、市民を追いまくる悪魔の武器「対人地雷」　154
第五章　NGOと政治の橋渡し――165
一、鳩山由紀夫さん、菅直人さんと初当選　166
二、「金喰いODA」の現場に憤慨　186
三、超党派の協力による対人地雷禁止活動　191
四、不登校児への通学定期を実現　201
五、自衛官に大喝采を浴びた防衛庁追及　204
六、NGOと国会議員との連携が国を変える　209
七、カルザイ大統領就任後、日本人として初の会見　219
第六章　世界がもし百人の村だったら――225
一、ひげをはやした池田さん　226
二、小学生の夢をかなえるには　228
三、飛鳥山の桜と足立区産のワシントンの桜　231
四、国を支える中小企業を支えるために　235
五、首都高王子線の大気汚染対策を国会で質問　247
第七章　「泣く政治」から「笑う政治」に――251
一、民主主義といのち　252

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページx

二、地球、地域、市民が泣いている 258
三、地球、地域、市民に笑顔を取り戻す政治 261
四、破壊ではなく建設によって作り出す未来 264
あとがき――日本を変えるトップと国民 272

カバーデザイン **マッド・アマノ**

政治家になりたくなかった政治家

NGOが政治を変える

第一章　そんなに簡単に死んでいいものだろうか

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ4

一、子供を失う親、もぎとられた苦しみ

長男幸英の昇天

「なぜ！　なぜなんだ。こんなことがあっていいのか」

深夜東京から水戸市の病院へ向かうタクシーの中で、私の携帯電話が鳴った。病院からの妻、玲子の電話で、

「ああ、幸英が行ってしまう」と押し殺したような声で叫んだ。その言葉から長男の幸英が、危篤状態で、臨終を迎えたことがわかった。一足先に病院に到着していた玲子は、必死になって幸英の身体に意識が戻ることを祈り続けた。頭部を打撲した幸英は、集中治療室で医師たちが、全身全霊を込めて蘇生のための戦いを続けていた。

ニコニコとしたいつもの笑顔で「お父さん、お母さん」と答えてくれることだけを願って祈り続けていた私は、タクシーに同乗していた娘、愛と姉の小室誠子には、玲子からの電話

の内容を告げないまま重苦しいドライブが続いた。

「戻ってきてくれ！早く！」とそれでも祈り続けてたどりついた水戸の国立病院で、玲子から幸英の死を伝えられた私たち三人は抱き合って泣き崩れた。

幸英が近所のビルの四階から転落したと水戸の実家から急報を受けたとき、私たちは次期選挙での小選挙区出馬のため、王子に新しく借りた事務所の準備でおおわらわだった。

幸英は二年と数カ月自宅に近い文京区の中学校に通っていたが、幸英が思い描いていた教育と当時文部省が掲げた「個性を活かした教育」には大きなギャップを感じ、自分に合った学校を探したいと登校拒否を始めた。

インターナショナルスクールへの編入を望み、問い合わせた。毎年海外に行ってはいたが、帰国子女ではないという理由で編入は拒否された。その後、テレビニュースで放映された不登校児のための学校に体験入学するため新潟まで出向いた。しかし、いじめにあったり家庭問題で心に傷を持つ児童を癒すための学校だったため、一週間で帰された。居場所を探せないまま時間ばかりが過ぎていった。親に迷惑もかけられないと北区内の中学校に転入することになったが、二日行っただけの幸英が決断したのは家を出ることだった。救いを求めていった先は、祖母、星ミヤ子と、彼と一回りしか年が違わない叔父、星和希のいる玲子の水戸の実家だった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ6

「カンボジアの白虎隊」を夢見て

幸英にとっての理想は、戦争や貧困がなくなる世界に貢献するために生きることだった。

しかし、そうした理想を話しても学校の友人からは、「真面目」とか「大人ぶっている」と煙たがられるだけだった。友人たちとの通常の会話は遊びや流行品のこと。自分だけが浮かないようにと人の言動に合わせている自分にも不甲斐なさを感じ自信をなくしていた。

叔父の気遣いや祖母の紹介でとても良い教育カウンセラーにめぐり合うことができ、自分の気持ちを正直に話したり、今後の事を相談したりして少しずつ自信を取り戻していた。

亡くなった前夜、「将来は歴史学者になって、国際協力や予防外交の仕事をしたい。できればカンボジアに行きたい。僕なりの勉強をするよ」とすっかりふっきれ、明るい笑顔で話していたとのことだった。

幸英は英国で宿った。そこで英国の英の字をつけることにした。海外に行く機会の多い私たち家族は、海外ではユキと呼ばれている私と区別するために、幸英をユウ（YOU）と呼んでもらっていた。その後生まれた妹の名前が愛なので、海外の友人たちは、ユウ・アンド・アイ（You and I）と楽しそうに呼んでくれ、手紙や電話をいただく場合も「ユウとアイは元気ですか」と、忘れずに声をかけていただいたものだった。

愛をよくかわいがっただけでなく、誰に対しても優しい子だったので、私の実家からも妻

の実家からもひっぱりだこで、学校が休みになると、両方の家から「幸英はいつ来るの？」と楽しみにされていた。

四歳の暮れにテレビで観た長時間時代劇「白虎隊」が、その後の幸英の考え方に大きな影響を及ぼした。忠義のために飯盛山に立てこもる少年兵士たちの純粋な気持ちが、幼い幸英の魂を大きく揺さぶった。四歳の幼児に、明治維新の政治的な背景は理解できなかったに違いない。しかし幸英の心を動かしたのは、圧倒的な力を持った官軍に対して果敢な戦いを挑んだ白虎隊の少年兵士たちの純粋な気持ちであった。同じビデオを何度も見、少年兵士一人ひとりの名前全部を暗記するほどに入れ込んでいた。

毎年夏は、スイスで世界の紛争地域の人々と紛争解決の会議に出たり、参加者のお世話をするのが恒例になっている私は、できる限り家族を連れてお世話をしていた。世界中から集まる仲間たちと夜を徹して話すのは、世界各地で起きている戦禍をどうやって防ぐかという話ばかりだ。

幸英は母親の腕に抱かれて眠りながらも、まわりの大人たちの真剣な話の内容を感じ取っていたようだ。

小学四年生のときにはインド、五年生のときにはカンボジアへ一緒に連れて行った。ポル・ポト派の大量虐殺による骸骨が並ぶキリング・フィールズや受刑場を見た幸英に、「な

ぜ、人は殺し合わなければならないのか?」という大きな問題が立ちはだかった。いまだに貧しいがゆえに戦い、苦しむ人々の姿が目に焼きついた幸英にとって、戦争と平和の問題や、難民の問題が自分の問題となり、そのとき友だちに宛てた葉書には、「いかに教育が大事であるかがわかりました。これからは嫌いな算数も勉強します」と書いていた。

しかし、そうした体験を共有できる友人が幸英のまわりにはいなかった。友だちも教師も、皆目の前にある受験のほうが最大の問題だったのだろう。平和や難民救済を夢見る変人が入り込めそうな場所があろうはずもないのに、そうした追い込まれた気持ちもわからずに、「せっかく転校の段取りをつけてやったのに、また学校に行かないのはどういうことだ」と、死の一週間前、そして直接会った最後の日となった日に、水戸で彼をどなってしまったことが、一生悔やまれる。自宅からは近いが選挙区外にある文京区の中学校から選挙区内の北区の中学校に移ることを、内心喜んでいた自分にも恥じ入るばかりだ。

私たちの必死の祈りもむなしく、幸英は天に召されていった。

妻、玲子は号泣したくなる気持ちを気丈に抑えながら、「人々のために役立ちたいと言っていた息子です。せめて彼の臓器を他の人に役立ててください」と医師に申し出た。身体つきは成人男性より大きくても、十五歳未満というのは、それも許されないということだった。

なんという幼い命だったのだろう。幸英は「他人に貢献する」という思いを抱きながらも、

白虎隊の兵士の一人としてその戦いに加わることもできずに、天に召されてしまったのだ。しかも、幼いという理由で、心拍の止まったその身体を他人に生かしてもらうことすら許されないまま、幸英は逝ってしまった。

すさまじい悲しみが私たちに襲いかかってきた。

その夜は祖母も叔父も帰宅が遅いことになっていた。祖母の計らいで家庭教師が来ることをすっかり忘れていた幸英は、ひそかに覚え始めたウイスキーを飲んでいた。約束を破ることなど嫌いな幸英だ、突然訪ねてきた家庭教師に驚き、「すぐに戻ります」と告げ自転車で慌てて出かけていったそうだ。酔いを冷ましに行ったのだろう、場所は妹、愛とも数カ月前に行った実家がよく見える近くのビル。そのビルの四階踊り場からころげ落ちたのだ。すぐ上の屋上には、途中のコンビニで買って飲んだビタミンドリンクの空き瓶と本が入った愛用のバックが置いてあった。

実家にしばらく滞在することで、気持ちの整理ができ、私たち両親にも話をしたいと言っていた矢先の、突然の事故だった。

幸英が抱えていた悩みは、私にとっても解決の難しい同じ悩みでもあった。

「藤田はいつも国際政治の話ばかりしていてお高くとまっている」

「国会議員なのだから、難民の話や地雷の話よりも、地元の経済のことを考えて欲しい」

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ10

などの声を何度も聞いていた。

私という父親を持った幸英が、私以上にこうした批判にさいなまされていたのではと、容易に想像がつく。幸英は、そうした声を、父親の問題でなく、自分の問題として受け止める優しい子だったのだ。そして、自分が信じる方向に生きてゆくことで、そうした声に反論していきたかったに違いない。

すっかり少年になってしまった幸英なので、抱きしめることを長年にわたって忘れていた。幸英が悩んでいるときに、生きているうちにしっかりと抱きしめなかったことを、すごく後悔した。

「大丈夫だ。お前は正しいんだ」。私は、心の中で、幸英を抱きしめるしかなかった。

幸英の死は、こうした形で多くのことを私たち家族に学ばせてくれた。

さらに幸英は、本人が語っていた言葉とはうらはらに、小学校時代から自分のまわりに確実な友人のネットワークを作っていたのだ。「友だちができない」という悩みは、ある意味では背伸びした悩みでもあったのだろう。幸英が亡くなったあとにすぐ駆けつけてくれた彼の友人たちは、毎年幸英の誕生日になると私たちの家を忘れずに訪ねてくれる。年々成長する幸英の友人たちとの交わりは、私たち夫婦、それに妹の愛の気持ちを本当に慰めてくれる。幸英を通して若い友を得、楽しい思いをすることができるようになったのである。

正月の家族写真

二〇〇三年世界水泳選手権で金メダル二個を獲得した北島康介君は、中学校で幸英と同級であり、彼の活躍ぶりをテレビで見るたびに心から嬉しく思う。

変えることができるものを変える勇気を

事故が起きたのは一九九七年十月二十五日だった。葬儀は、十五歳の誕生日の十一月十九日に北区の滝野川教会で行われた。

菅直人、鳩山由紀夫、鳩山邦夫、羽田孜といった政治家の方々だけでなく、速水優、後の日本銀行総裁、橋本徹富士銀行会長などの経済界の方々、それに幸英の小中学校時代の友人多数が参列してくれ、全部で四百人となった。

幸英の死を知ったアメリカのトニー・ホール下院議員が、事故の直後にメッセージを贈ってくださった。実は前の年に十五歳の息子を白血病で失ってしまったとのことだった。その胸のうちを伝えることで、私たちの心を少しでも慰めようという優しい気持ちからだった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ12

その他国内外から数多くのメッセージを頂戴し、幸英を私たち同様愛して下さっていた方々に驚き、感謝の気持ちで一杯になった。

元東京神学大学学長で現在聖学院理事長を務める大木英夫牧師が司祭を務めてくださった。

私たちは、大木牧師と知り合ったばかりだった。大木牧師は会津出身で、ご自身が太平洋戦争で少年兵として戦った経験から、戦後、牧師への道を歩まれた日本のキリスト教社会の重鎮である。

葬儀の中で大木先生は、次のような特別の言葉をくださった。

「ご子息の死はどんな悲しみであったか、計り知れないものです。ラインホールド・ニーバーの祈りに、『神よ、変えることのできないものは、これを受け入れる静かな心を。変えることのできるものは、それを変える勇気を。そして、変えることのできないものと変えることのできるものとを識別する知恵を与えたまえ』という祈りがあります。人はこの二つの識別ができません。だから祈りとなります。ここにはその変えられない出来事があります」

白虎隊を愛する大木英夫牧師は、アメリカに渡り、著名な神学者、倫理学者ラインホールド・ニーバー（一八九二―一九七一）の愛弟子となった。第二次世界大戦の中で、このニーバーの祈りが書かれたカードが兵士たちに配られ、広く知れわたるようになった。大木牧師が三十五年前にこの祈りを日本に伝え、多くのクリスチャンに勇気を与えることとなった有名な言葉である。

参列していた秋葉忠利衆議院議員（現広島市長）が、葬儀の後で、この言葉をしばしば引用する土井たか子社民党代表に話したところ、土井さんはこの祈りを丁寧に色紙に書いて、秋葉議員を通じて私に届けてくださった。党派を超えて、悲しみと苦しみと、そして勇気を共有してくださるその優しい心遣いあふれる色紙は、今でも大事に私の事務所に飾ってある。

子を亡くした経験を持っているのは、トニー・ホール下院議員だけではなかった。アメリカのジョン・モーア、フィリピンのダンテ・カルマのお二人が、共に息子さんを亡くした経験をお持ちで、遠路はるばる葬儀に参列してくださったのだ。子を亡くした経験を持つ親が、思いのほか多いということに驚かされた。

仲の良かった兄を失いダメージの大きかった当時中学一年生だった娘の愛も、葬儀の頃には落ち着きを取り戻し、兄の埋葬には以下のような手紙を添えてくれた。

「お兄ｃｈａｎへ、

もうさよならだネ！　とうとう短くなった〝かみの毛〟見せられなかったネ。

ゴメンネ。もっと色々とお兄ｃｈａｎの相談にのってあげればよかったね。これからはお兄ｃｈａｎの分もりっぱに生きて、父さんや母さんをささえていきます。

でもね、たった十四年の命だったけど、みんなに好かれて、色々なけいけんができて幸せ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ14

な人生を送れたネ。それに（いとこの）くんchanや、けいchanの優しくてカッコイイお兄さんだったヨ！　もちろん私にとってもネ。
ケンカしたり、いたずらしたり、かいものしたり…いつも一緒にいたよネ。
怒られたり、ほめられたりしてネ。
教えられたり、教えたり、助けられたり、助けたり、すごく楽しかった。
今度は住むところが別々になるけれど、これだけは忘れないで。二人はいつも一緒だよ。
これから生きていくのにたくさんつらい事があると思う。それらをのりこえられる勇気を下さい。そして、いつまでもみんなの事を見守ってね」

二、いつまで悲しみが続けばいいのか

四人の兄と姉

肉親をもぎとられる苦しみは、自分の死よりつらい。
今年の正月、同じようなもうひとつの悲しみが私たちを襲った。
姉の小室誠子が急逝したのだ。
姉は夫を亡くして、未亡人だったにもかかわらず、いつも明るく、七年前に私が急に選挙に出るようになったときは、私の家に住み込み、家事までも含めてあらゆる手伝いをしてくれた。私にとって十六歳年上の姉は、母親のような存在だった。妻玲子の母、星ミヤ子とは高校の同級生で、同じ同級生が私にとっては姉と義母という面白い偶然であった。
特に私が三年前に落選したあとの姉の助力ほど心強かったものはない。
「あきらめないで戦うのよ。幸久がやっていることは決して間違っていない。選挙民の人

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ16

たちも必ずわかってくれるわよ」

と私を励ましながら、独りで暮らしている大船の自宅から往復三時間の距離を、週に三回ほど通って、こまごまとした事務の仕事を手伝ってくれた。健康診断で心臓肥大と高血圧の兆候の傾向があるとわかっていたものの、特に身体に変化があるわけでもなし、特段の心配もしていなかった。

それに、持ち前の底抜けの明るさをまわりにふりまいていたので、身体の内部の不調を見逃していたのかも知れない。

事務所に出入りする若い学生からも人気があり、とても慕われていた。

その姉は、大晦日の除夜の鐘を聞いた直後、ベッドに入って寝につこうとしたときに心筋梗塞を起こし、寝入るように息を引き取ったようだ。

正月なのに電話のひとつも寄こさないことを心配して見に行った次姉の河辺典子が発見したときは、安らかな寝顔だったという。小室誠子、河辺典子のほかに、私には藤田豊久、藤田昭男という二人の兄がいた。この兄二人はともに四十七歳という若さで、くも膜下出血と胃がんでそれぞれ早死にしていた。四人とも腹違いの兄姉で、年が離れていることもあって私は皆に可愛がられた。

姉の納骨は、私の両親の故郷秋田で行われた。

私たちの父は秋田北部の出身で、金沢大学土木学科を卒業後、日立製作所に勤務。高度成長期にさまざまな工場建設を手がけた。がむしゃらに働いたようだ。

母は秋田市の出身、京都の女子大を卒業後、高校教師をしていた。母の先祖は、関ケ原の戦いでどっち付かずだったため、水戸から秋田にお国替えになった佐竹公について秋田に渡った画家とのことである。

姉が亡くなった虚脱感は大きかったが、やさしい秋田の親戚のそばで、ゆっくり休めるのだと思いながら、若い頃の姉の知らない面などを、心のこもった秋田弁で聞かせてもらい、いまさらながらにその温かさに触れる思いがした。

姉は、私が政治を通じて社会に貢献するために、あらゆる時間を割いて応援してくれた。その恩に報いるためには、感傷を振り払って、次の選挙への戦いに出ることだ。そう言い聞かせながら、正月の年始まわりを開始した。五人兄弟のうち、私とともに残された姉河辺典子とその夫川辺勇男は週に二回経理を手伝いに事務所に来てくれる。静かな二人の献身的な助けは、他のスタッフの鏡ともなっている。小椋修平君と、三浦和也君という二十代の若い秘書二人が私を支えてくれているが、二人とも、敢えて落選中の私を当選させるために、薄給をいとわず励んでくれている。当選して彼らを結婚させてあげなければバチが当たると思うほどだ。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ18

めでたい席で、姉の死を伏せざるを得ないのが悲しかったが、姉が望んでいるのは私自身の国政への復帰である。

政治家は、そうした悲しみを抱えながらも、常に前へ前へと進んでいかなければならない立場に置かれている。

光が当たらない世界で苦しんでいる選挙民にとっては、政治家の個人的な悲しみなどは、あずかり知らぬところだ。

「この人だったら、きっと私たちのことを理解してくれる」

という一縷の希望を持って、その一票を投じるのが、選挙民である。

姉は、こうした人々の声に誠実に答えるために、なんとしてでも雪辱をはらすことを望んでいたのである。

悲しみを地上から一掃するために

本の書き始めから、個人的な悲しいことばかり書いてしまった。

しかし、多かれ少なかれ私たち一家と同じような悲しみの体験をお持ちの方も少なくないと思う。

自分の悲しみをじっくりと見つめることで、他人の悲しみをより深く理解できるようになるのは、理性を持った人間だけができるわざである。

息子を亡くし、姉を亡くしたショックは、私自身が両親を亡くしたときよりも、大きいかも知れない。年をとった肉親が亡くなることには、ある程度のあきらめがつくものだが、若い子供が亡くなった場合には、「どうして死んでしまったのだろう」という気持ちが長く尾を引いて、あきらめがつかない。

私自身の体験の中から、私の耳には、そうした悲しみにさいなまれる人々の号泣が聞こえてくるようになった。

そして、この号泣のこだまは、過去の時代からも響いてくる。

太平洋戦争で亡くなった、数え切れない人々の声だ。手塩にかけて育て、やっと成人になり、勇んで出兵した息子を亡くしてしまった親たちの悲しみの声。戦火で命を落とした家族、あるいは原爆でその命をあっという間に奪われてしまった人々。そして戦争の後遺症に長年にわたって苦しめられ続けた人々。

さらに、情報が発達した今日、こうした号泣のこだまは、テレビを通じて海外からも響いてくる。

イラク戦争によって、アメリカ政府の発表とはうらはらに、あちこちで市民が誤爆の巻き添えになった。そして最近はバクダッドの国連代表部が爆弾テロの攻撃を受け、デメロ特別

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ20

代表が死亡したほか、二十人以上が犠牲になった。また、イラク中部のイスラム教シーア派聖地ナジャフのアリ廟で爆弾テロが起き、ハキーム師を含む百人以上が犠牲になった。

悲しみに泣き叫ぶ肉親を亡くしたイラク人たちの顔が、連日テレビで報道されている。

私たち日本人は「戦後」という言葉をずっと使い続け、戦争というものは過去のものだと思い続けてきた。しかし、海の向こうの世界各地で、戦火が絶えず、人々は悲しみにさいなまれ、悲嘆に苦しんでいる。

日本だけが「戦争は二度とやらない」と誓っても、国際社会の緊張のバランスは相変わらず不安定で、いつ戦争が始まるかわからない状態が、あちこちでくすぶっているのである。

三、戦争をなくせない人類のおろかさ

アメリカ人の命と、アフガニスタン人の命

二〇〇一年には、アメリカによるアフガニスタンのタリバンへの空爆が行われ、さらに今年にはイラク攻撃が行われた。人類は過去に学ぶことができずに、あいかわらず戦争を回避できない状態にとどまっている。

一昨年の暮れのことだ。地元の町会の火の用心の夜回りの納会が行われた。地元の警察署長や消防署長から慰問を受けたあと、一同で年末の盃をかわすことになった。その席で地元の町会長が私に次のような素朴な、しかし極めて本質的な思いを語ってくれた。

「アメリカのタリバンに対する攻撃は、最新兵器を敵地に送り込んで攻撃するだけで、兵士は一人も送らない。私の感覚で言わせてもらえれば、戦いというのは同じ土俵で対等に戦うのが筋で、自ら前線に出向いて正々堂々と戦うべきだと思います。アメリカ兵の損害を最

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ22

小に抑えるためと言うが、それならばアフガニスタン人の命はどうでもよいということではないですか！　アメリカ人の一人の命は失えないが、アフガニスタン人の命は何人失われても構わないということではないですか。命の値段に格差があるのです。藤田さん、どう思いますか」

私も、言われてみてまったくその通りだと思った。

町会長と同じような気持ちは、誰しもが持っているに違いない。

「戦争をやりたいのなら、国民を巻き添えにしないでくれ。為政者同士が人里離れた山の中か海の上ででも勝手に戦えばいい」

確かに一瞬にして多くの人々を、しかもニューヨークのど真ん中で失ってしまったアメリカ国民の怒りと悲しみは、十分に理解できる。しかし、それを報復戦争という形に持っていったアメリカの為政者のやり方には、当のアメリカの国民ですら納得がいかないに違いない。

怖いのは、こうした報復が、報復の循環を生み出し、戦禍が少なくなるどころか、家族を奪われた人々をテロリストに追いやる可能性である。

「テロリストをやっつけろ」

という国民の熱狂が、ブッシュ政権に戦争を決断させたという意味で、アメリカ全体がテロリストと同じ思考法のワナにはまってしまったのである。

こうした国民の熱狂の恐ろしさを、私たちは歴史の中で何度も学んだはずである。

そして、このワナにはまったのはアメリカだけでなく、日本もそうだった。テロリズムをなくすという口実が、自衛隊の海外派兵に結びついていったのだ。自衛隊の海外派兵については、国連の平和活動維持と結びついた形でないと、なかなか実行されないという歯止めが当面の間は続くだろう。しかし、国際政治というのは何でもありの世界なので、いったん自衛隊がどこかの国と交戦することになれば、かつて「戦争は絶対にいやだ」と語りつづけていたのが私たち日本国民であるのにもかかわらず、戦争の渦中に投げ込まれる可能性がある。戦争というのは、いつも、あれよあれよという間に始まるものであり、「そのうちなんとかなるだろう」と構えている一般の国民が、「こりゃ大変だ。戦争にならないように手を打たなきゃ」と思いついたときは、手遅れになってしまう。

したがって、戦争が起きないように、戦争に向かう可能性を減らす努力を普段から行う必要がある。力に頼るやり方を選ばずに、戦争をなくそうと努力している人々が世界中にたくさんいる。国を越えて、お互いを理解することで、戦争を回避する具体的行動を起こしているのである。つまり、こうした努力は「心の専守防衛」とも言える努力であり、相手国の国民との理解を深めることで、戦争が起きないような土壌を作ろうという、知的な手段なのである。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ24

政治家たちのエゴイズムが国と国との争いを引き起こし、国民はその争いに翻弄される。人類が培ってきた知恵を生かして、こうした悲しみを地上から一掃するのにはどうしたらいいのだろうか。

この私の問いかけは、大学卒業後世界を一緒に旅したアジアの青年たちとの出逢いに遡る。

第二章　世界中の家族を覗いた青年時代

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ26

一、二年間、十四カ国百の家庭でホームステイ

日立の大争議に生まれ、大学で夜逃げ

私の父は日立製作所に勤めるサラリーマンだった。会社を定年退職したあと、自分で建設会社を起こしたのだが、ほどなくして倒産してしまった。私が慶応大学一年生のときだった。

父は、日立の営繕課長や施設部長として高度成長期に日立が各地に建設した工場や創業者小平浪兵氏の偉業を記録した小平会館、小平記念館、小平記念東京日立病院などの建設に携わった。また会社側の支援で日立市の市議会議員も務め、日立港の建設などにも従事した。

私が生まれた一九五〇年はレッド・パージ（赤狩り）で日立、東芝、国鉄などで大争議が起こり、代々木の共産党本部から派遣された共産党主導の大ストライキが起こり、日立の主要工場がある日立では、駒井健一郎工場長（後の社長）が工場の本館に閉じ込められ、その工場長や工場長を守る父たちはシャンデリアを逆さにして便器代わりにして立てこもったとのこと。

私の誕生直後、日立の社宅で。（後列左から）母彰子、幸久、父浩蔵、姉誠子。（前列左から）兄豊久、姉典子、兄昭男

父が仕事で使っていた土建屋やその下請けさんたちがバリケードを築いて、共産党の組合員たちから工場長たちを守った。組合員にとって敵の大将格にあたる父はやがて攻撃の対象になり、父は夜女装して移動したり、当時日立市内で二台しかないタクシーの一台を借り上げ、もう一台のタクシーで追いかける組合側の追跡を振り切る、といったアクション映画ばりの修羅場をくぐったと、母から聞かされた。父を捕らえることに難航した組合側は、とうとうその母を捕らえるという手段を考え、私たちが住む社宅に組合員が派遣された。しかし、普段から社員の面倒見がよかった母に対し、若い組合

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ28

員の人たちは、「世話になった藤田さんの奥さんには手は出せない」と、引き返したとのこと。その間、母は生まれて間もない私が泣きじゃくるのを押入れの中に入れて泣き声をかき消した、と語ってくれた。

秋田出身の東北人である父は、生真面目で融通が利かず、定年後始めた土建業も、それまでの大企業を背景にした殿様商売とはまるで異なり、七年目で行き詰まってしまった。接待による営業も苦手、父の後継になるはずの腹違いの長兄、豊久も不肖ぶりを極めて経営の足を引っ張っていた。それに現場の自然災害なども重なり、資金繰りが悪化した。

一浪で慶応大学に入学した私は、宝石やゴルフの会員権を売却して欲しいなどと父に頼まれて東京でさばいたりしたが、そんな程度で収まるはずはなかった。

とうとう父から夜逃げしかないと告げられ、大学のクラブの歌舞伎研究会の仲間で、北区西ヶ原の佐藤秀夫君の家のトラックを借りて水戸に向かった。運転免許を持っていたのは私だけで、深夜水戸の家に到着した。夜陰にまぎれて、クラブの仲間数人と家財道具を運び出し、明け方東京に向かって6号国道を走った。常磐高速道もない時代で、亀有の環七に到着した頃に明け方となった。とたんに睡魔が襲い、信号待ちの度に目を閉じて仮眠し、信号が青になると友だちが起こしてくれて運転するという連続だった。やっと目黒区大岡山の川辺先輩の酒屋の倉庫に荷物を預かってもらい、後に上京してきた両親と川崎のアパートに移り

住むことになった。

父親は、少しでも収入を得たいと荒川の工事現場の監督などを始めたが、重い機材の運搬など慣れない仕事もさせられ、それまでの心労も重なったためか、胃がんの診断を受けた。湯島の小平記念東京日立病院で手術を受けたあと、約十カ月後の十二月に他界した。私が選挙のアルバイトをしている最中のことであった。

夜逃げしてからの私は、学業を続けるためのアルバイト探しを始めた。皿洗いなどよりは実入りも良く、社会勉強にもなると考え、新人で立候補を予定していた与謝野馨さんのところでアルバイトを始めた。その候補者に付き添っての選挙中に父の病状が悪化しての死であった。病院が選挙区から近く、選挙前に父と話したときには、まだまだ元気そうで安心していた矢先だけにショックも大きかった。与謝野さんはこの選挙では落選したが、後に政策通の政治家として活躍している。これが縁で私は東京都議会議員選挙を手伝ったあと、参議院愛知地方区の藤川一秋候補のアルバイトをすることになった。すでに大学四年のことであり、週に一度ゼミを受ければよいことになっていたので、名古屋にアパートを借りて週に一度新幹線通学をしながらのアルバイトであった。ここで私は人生の師とも言うべき寒河江善秋さんと出逢うことになった。寒河江さんは日本青年団の役員として多くの青年を全国各地で育て、その中には竹下登、海部俊樹代議士などの政治家もいた。陶芸家としても知られ、弟子

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ30

として歌手の加藤登紀子さんやその夫で全学連のプリンスといわれた藤本敏夫さんなどがいた。

藤川さんがトップ当選し、帰京したあと、この寒河江さんから、青年団の弟子である中尾栄一代議士の国会事務所でアルバイトしてくれないか、との依頼を受けた。やはり寒河江さんの弟子である秘書が県議会に出馬するので、補充がいないと出馬できないとのことであった。

政治家に法の抜け道を求める後援者たち

私は卒業までの数カ月、大学のある三田と永田町を行ったり来たりすることになった。

しかし議員会館で見た実態は、私に政治に対して大きな失望を与えることとなった。来る日も来る日もその議員を訪ねてくるのは、地元の後援者や業者たちだった。ガソリンスタンドを開設したいが、通産省の規制で数百メートル以内には開設できないので、何とかお願いしたい。タバコ屋を開きたいが大蔵省の規制で数百メートル以内には開設できないので、よろしく。後援者の娘が私立大学に入学したいので口を利いて欲しい。等々。何のことはない。点数が足りないので国会議員に頼みに来ているのであって、点数が足りている人はそもそも来ていないのだ。ふと考えてみて気が付いた。国会議員とは法律を作るのが仕事だが、その

周りにやってくる人は、法律やルールに従っていては自分の目的が達成できない人ばかりがたかりにやってくる場所ではないのか。自分で気が付いて唖然とした。

各省庁は、さまざまな業種に対して、厳密な規制を課している。本来、この規制は同じ業者にとっては平等なはずだが、国会議員が各省庁の役人を議員会館に呼びつけて、なだめたりすかしたり、あるいは半ばおどし同然に、こうした規制を特定の業者に有利なように書き換えさせることが、日常のように行われていた。

アルバイトをしながら学業を続けていた私にとっては、許せない思いだった。

国会議員は国民によって選ばれた代表のはずだが、本当に生活に困っている人や、苦しい経営を強いられている零細企業の経営者のことなどには、あまり目が向かない。利権のために訪ねてくる男たちに接待されて、赤坂や六本木に通う政治家が私に教えてくれたのは、政治に対する不信感でしかなかった。当時中川一郎代議士秘書であった鈴木宗男代議士は、議員会館で売り出しており、椅子にすわる間もないほど陳情処理（利権処理？）に追われ、立ったままどなりながら仕事をしている姿が国会議員会館で知れわたっていた。「政治は汚いもの、イヤなもの、はばかるもの」、「政治家にたかる有権者が変わらなければ政治は変わらない」という思いだけが強くなった。

もちろん、二十数年後に、中尾栄一、鈴木宗男両代議士が逮捕されるなどとは夢にも思わ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ32

なかった。

ディズニーの白雪姫のお城は、争いごとの仲立ちの場所

「政治がどう考えてもおかしい。日本だけがおかしいのだろうか。世界にはどんな問題があり、どう解決しているのか見てみたい」とある時、私に議員会館でのアルバイトを紹介してくれた寒河江善秋さんに話した。すると寒河江さんは、「議員会館などあまり長くいるべき所ではない。スイスにコーという場所がある。自分も初めて外国に行ったのがコーだ。行ってみたらどうか」と提案してくれた。

コーとはスイスにある山村のことだが、ＭＲＡ（モラル・リアーマメント＝道徳再武装、この団体は最近ＩＣ＝イニシアチブ・オブ・チェンジと名称を変えた）という国際ＮＧＯの国際会議場がある場所だ。ちょうどこのＭＲＡがアジア各国の若者を集めて「ソング・オブ・アジア（Song of Asia）」というグループを作り国際親善使節として各国を回るので、参加してみてはどうか、という話だった。父親を亡くして、アルバイトをしながら大学を卒業した私にとって、自費で海外へ行くことは無理な相談だった。しかし、この企画は世界各国をホームステイしながら回る青年の親善使節で、各国の浄財で運営されるもので、手持ちの、できる範囲での寄付で参加できるとのことであった。寒河江さんは、あまり詳しいことは話さず、「行ってみればわかるよ」と言うばかりだった。

一九七五年八月、私は中古自動車を売り払い、大韓航空機の片道の格安航空券で、羽田空港からソウル、パリ経由でジュネーブに向かった。未知の世界をこの目でしっかり見てやるんだという向上心に燃えながらの、初めての海外渡航であった。

このスイス行きは、母彰子にとっては大きなショックであった。後妻として父浩蔵に嫁ぎ、四人の継子を育てながら私を生んだ母にとって、私は一人息子であった。倒産、夜逃げの翌年父が他界してしばらくしてからは、母も渋谷にある学生寮の寮母として働きに出た。未亡人として息子に私立大学を卒業させ、やっと楽ができると思った矢先に、息子は就職でも、留学でもない、得体の知れないボランティア組織（当時はＮＧＯという言葉も存在していなかった）で、いつ帰るかもわからない旅に出るという。母にとっては堪えがたいことであった。それから私が日本を離れた二年間、ＭＲＡ運動の中心メンバーである加藤シヅエさん（元国会議員）、相馬雪香さん（難民を助ける会会長、尾崎行雄氏三女）や、中学、高校、大学の友人たちが時々母を食事などに誘って慰めてくれた。いくら感謝しても感謝しきれないくらいだ。

ＭＲＡの本部のあるスイスのコーは、ジュネーブからレマン湖沿いに一時間ほど行ったモントルから登山電車で三十分の小さな山村である。レマン湖を見おろすスイスの絶景の一つ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ34

だ。マウンテン・ハウスと呼ばれ、丘の上に、お城のような尖塔が見えるこの建物は、一九〇二年に建設された一流ホテルであった。戦後の一九四六年にＭＲＡが購入して、国際会議場と五百人以上が収容できる宿泊施設を兼ねた本部として、さまざまな活動の拠点になっている。ウオルト・ディズニーの白雪姫のモデルになったともいわれている幻想的な建物である。ここは、戦後の一九四六年から一九五〇年の間にドイツのアデナウアー首相やフランスのシューマン首相を含む、三千百十三人のドイツの政治家、経済人、ジャーナリスト、牧師、労働組合指導者と、同じように千九百八十三人のフランス人が寝食を共にして交流し、戦後のドイツとフランスの和解の橋渡しを行った場所である。独仏の和解は後のＥＥＣ、ＥＣ、そして現在のＥＵ（欧州共同体）へと発展し、ユーロという共通通貨まで生み出すようになった。また、戦後のモロッコやチュニジアの円満独立や、一九八〇年の白人少数政権から黒人多数派政権へのジンバブエの無血独立の橋渡しも行った。

また、一九五〇年には広島の浜井市長、長崎の大橋市長、北村徳太郎、中曽根康弘を含む国会議員、東芝の石坂泰三社長、日本生命の弘瀬現社長を含む財界人、労働組合代表、通訳の相馬雪香さんなど七十人の日本人がここを訪れ、敗戦国日本の国際社会への復帰の橋渡しも行われた。

私の未知の旅は、このお城、マウンテン・ハウスから始まった。六十カ国五百人以上が滞

MRA世界会議場コー。ディズニーの白雪姫のモデルにもなった

在するここでの会議は、出席者全員が食事を作ったり、給仕や皿洗いをするチームに属して手伝う。お年寄り向けの野菜切りのチームや、子供向けのクッキー作りのチームもある。通訳や電話交換のチームもある。電話交換とレセプションは英、独、仏の三カ国語ができることが資格である。この会議にはどんな世代の人でも参加できるように、託児所、テニス、サッカー、卓球、バレーボールのスポーツ施設も完備している。

英語もわからない私は、とりあえず給仕・皿洗いチームに入ったが、そのキャプテンは、アレック・スミスという若いくせに、やけに落ち着いた若年寄りのような人だった。あとで聞くとローデシア

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ36

という黒人差別をしている国の首相の息子とのこと。私にはローデシアがどこにあり、どんな国なのかすらも、わからなかった。いつも辞書を持ち歩き、まわりの人が話す英語を聴診器を当てるように聞き入った。外国語を聞き続けるということは、神経が疲れることで、毎晩八時間寝ても疲れる毎日だった。

同室のルームメートは、ミカエル・ハルビッヒというドイツ人だったが、いつもうつ伏せで寝ているのにビックリした。大きな柔らかい枕に顔を包むように寝る寝方にもお目にかかった。欧米では、子供を仰向けに寝かせることが多いのもわかった。慣れない私の世話をしてくれたのが、すでにインドから「ソング・オブ・アジア」に加わっていた藤森英和さん。床屋さんなので、各国の人の頭を刈って人気者だった。今では、百店舗以上を持つ日本有数の理容・美容チェーンの社長として活躍している。

世界の四大宗教を生んだアジアは悲しみにあふれている

「ソング・オブ・アジア」は、アジアが持つ可能性を若者の声を通じて世界中に伝えようというもので、インド独立の父マハトマ・ガンジーの孫のラジモハン・ガンジー氏（後に上院議員、現インド政策研究所教授）が提唱したものだった。インド、台湾、香港、日本、カンボジア、ラオス、マレーシア、フィリピン、ベトナム、フィジー、パプア・ニューギニア、

オーストラリア、ニュージーランドの十四カ国の十八歳から三十歳ぐらいの若者で構成されていた。トルコの学生運動の女性リーダー、インドシナ難民、フィリピンのモスリム独立運動の活動家、ニュージーランドの先住民であるマオリ族の非行少年、インドのアッサム地方の少数民族のゲリラの息子なども参加していた。これに訪問先で手伝うヨーロッパ人などが随行してくれた。全体の共通語は英語だ。

『もし地球が百人の村だったら』という本が評判を呼んでいるが、「ソング・オブ・アジア」はアジア全体を六十人の村に縮小したようなものだった。アジアは黄河文明、エジプト文明、チグリス・ユーフラテス文明、インダス文明の四大文明と仏教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教の四大宗教を生み出した最も歴史の古い大陸である。しかし、世界のアジアに対するイメージは、貧困、飢餓、内戦、分断国家、汚職といったマイナス・イメージが強い。私たちアジア人自身がこうした教えや叡智をないがしろにして、実践して来なかったことが、今のアジアをもたらしたのではないのか？　アジアの若者として、そうした真理と若者の心の奥に潜む叫びや希望（Song）を世界に発信しようというのが、「Song of Asia」の由来である。

アジアの色彩豊かな歌と踊り、それに地域の問題解決の経験を活かした寸劇からなるミュージカルを作り、世界中にアジアの若者の声を伝えるのが、この旅の目的だ。西洋が求めて

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ38

きた物質至上主義の世界ではなく、第三世界の声に耳を傾け自然と共生する世界を訴えるアジアの声を世界各地に伝えようという若者の使節団だ。一九七三年にインドでスタートし、これまでに、インド各地、ラオス、ベトナムを回ってヨーロッパに渡っていた。

私が「ソング・オブ・アジア」に参加した頃の世界の目は、アジアに注がれていた。共産主義を防ぐという大義名分のもとに開始されたベトナム戦争が泥沼化し、アメリカの若者は戦争に嫌気がさし、次々に脱走するという事件が起きた。ベトナム戦争の大義名分を明確にできなかったアメリカは、結局ベトナム戦争で敗北し、その結果ベトナムに共産主義政権が誕生した。アメリカのベトナムからの撤退をきっかけに、物質至上主義の西洋の考え方の、特に若者の間で見直しが行われるようになり、東洋が生んだ仏教、ヨガ、あるいはインド哲学などに救いを求める若者があふれていた時期だった。

日本も例外ではなかった。全共闘運動が下火になり、価値観を失った若者たちが、アメリカのヒッピー運動や、インドの瞑想などを求めて、海外の流浪の旅に出たり、あるいはロックバンドを結成して、大人の文化に反抗するシンボルになりつつあった頃である。

ベトナム戦争にしろ、全共闘運動にしろ、今までの社会変革運動は、お互いに激しい敵対心を持つものであった。「ソング・オブ・アジア」は、そうした時代背景の中で、主義の違いや労使のいがみ合いによる敵対ではなく、お互いを許し合うことによって、共に社会を築

いていこうというメッセージを伝えるために、生まれたものである。

こうしたメッセージを伝えるのには、アジアの若者たちによる歌と踊りと芝居を通じてのキャラバンが最も効果的であった。アジアが世界から注目されているだけでなく、さまざまな文化が混在しているアジアの若者が、アジアにはさまざまな文化があるという事実を伝え、その背景にある深い知恵を世界の人々に示唆することができるからだ。

歌と踊りと芝居に磨きをかけ、観客に最高の感動を与えるために、専門のダンスの振付師と、舞台監督もボランティアで加わっていた。日本の着物、インドのサリー、ベトナムのアオザイに加えて、マオリ族やインドの少数民族の民族衣装も含め全員が国民衣装をまとうと、アジアの色彩豊かな多様性の中の調和が一目瞭然であった。メンバーは全員で各国の歌を各国の言語で歌うことにした。日本の「赤とんぼ」、フィリピンの「バンブーダンス」、マオリ族の「ハイレマイ（歓迎の歌）」などは大人気であった。バンブーダンスは、二つの竹を上下に動かしただけの単純な遊びだが、フィリピンの人たちはそれを複雑で優雅なものに仕上げてしまう。何度も失敗しながらも、皆が楽しく踊れるようになっていった。

マオリ族の音楽は日本の民謡に通じるような朗詠風のフシが多く、太平洋を舞台に育まれてきた自然との共生の歴史を感じさせるような、すばらしいものだった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ40

「ソング・オブ・アジア」のキャスト。後列右から3人目が筆者

二、お互いの違いを知る、そして共通点も知る

嫁と姑の関係、夫婦喧嘩の種、兄弟のねたみは万国共通

六十人全体で公会堂などで公演するのは、いくつかのストーリーをまとめたミュージカルだった。小道具、衣装、音響設備も含めた四トンの舞台装置が私たちに同行し、野外でも公演ができる態勢になっていた。劇場設備がないアジアを訪問しているうちに徐々に器械も増えていったとのこと。一方、いくつかのグループに分かれて踊ったり、合唱したり、あるいは少人数の寸劇を行ったりと、受け入れ先の実情にあわせて、さまざまな対応ができる態勢も整えた。

訪問国ではＭＲＡの関係者が事前準備をし、一つの都市に平均一週間ほど滞在し、公会堂、学校、教会などで一、二度公演をする。しかし、公演は一つの手段であり、訪問先のさまざまな人々との交流に力を注いだ。地元の市長、政治家、経営者、学生、マイノリティーの代

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ42

表、マスコミ関係者などと交流し、私たちの経験を伝え、アジアの抱負を紹介し、ＭＲＡの理念も伝えるというものだった。私たちはその間に二人一組でホームステイをし、宿泊と食事の面倒をみていただく。もちろん公演をするといってもノーギャラだ。その間の最低限の小遣いは受け入れ先の人々のカンパで賄われた。

それから二年間、私はスーツケースの生活をし、一週間に一軒の割でホームステイを行い、約百軒の家庭でお世話になった。その後私は今までに四十二カ国を訪問し、約二百軒の家庭でお世話になったので、ホームステイの日本記録ではないかと思っている。これらの経験を通して私は、生涯の宝物を得たと思っている。

まず訪問先の家庭に到着すると、ホストやホステスの方が、「私たちの家を訪ねて下さって本当に有難う。これから一週間はここがあなた方の家ですから、自由に使ってください」と言って、家の鍵を渡してくれる。そして、家族やペットまでを一人一人（一匹一匹？）紹介し、お風呂の使い方、湯沸かし器、洗濯機、冷蔵庫や飲み物の所在などを細かく説明してくれる。家族の写真や調度品の由来なども説明してくれ、ゲスト・ブックに私たちが滞在した記念のサインを記入する家も多かった。朝ホストより早く出かける時や、夜ホストより遅く帰宅する時は、自分たちで勝手に食べて下さい、と言ってくれるので、気兼ねなく滞在することができる。ホストと一緒に食事をする時は、われわれ男は必ず皿洗いをするのが常識

で、私も随分上手になった。（日本ではあまりしないので、妻玲子に怒られている。もっとも、最近は家で食事をすることがほとんどないが。）週末、家の芝刈りやペンキ塗りといった仕事も、家族の一員として手伝うこともあった。ホストが属する教会の礼拝、ロータリークラブの会合、結婚式などにも家族のゲストとして同席させてもらったことも少なくない。要は、ホストとゲストの区別がなく、家族の一員として受けれてくれるということである。ふと、我が家で母がお客さんを迎えた時のことを思い出してみると、まず客用の布団や食器を押入れから取り出し、散らかっている荷物を押入れや別の部屋に移動する。客が食べきれないほどのご馳走を準備し、客が帰ったあとは疲れきってしまう。客に手伝ってもらうなどはもっての他だ。ホストとゲストの区別をせずに、互いに裏表のない自然の付き合い方をするのが、受け入れ側にとっても、滞在する側にとっても長続きすることだと実感した。

滞在した家の国や背景はさまざまだったが、やがて私はどこの家庭でも人間の家庭は同じだなとの思いが強くなる一方だった。たとえば、私は嫁と姑の関係の難しさは日本固有のものだと思っていた。少なくとも朝鮮半島や中国など儒教圏までかと思っていた。しかし、各国の家庭に滞在するにつれて、足の長いアメリカ人の家庭にも、鼻の高いオランダ人の家族にもこの問題が根深く存在することに気が付いた。兄弟同士の嫉妬の強さ、夫婦喧嘩のきっかけなども万国共通だなと苦笑した。歯磨きチューブをきれいにお尻の部分から押し出すよ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ44

うに使う妻と、無造作に真ん中へんから押しつぶすように使う夫の喧嘩など、後々大変参考になった！　特に欧米では離婚家庭が多く、連れ子同士が同居する家庭にも幾度か滞在した。こうした家族の内情も私たちにさらっと打ち明けてくれたことも、ホームステイをしながら、家族の一員として私たちを受け入れてくれているとの信頼感を与えてくれた。その後も生涯の友人としてお付き合いさせていただいている家族もある。オーストラリアのパースの労働組合指導者テッド・アーチャー氏は敬虔なカソリック教徒で、実の子と先住民アボリジニーの養子を含め、十六人の子供を養っていた。彼のように貧しくても愛情豊かな家族に触れたことも大きな財産だ。

グリーンランド人は日本人の先祖、それとも中国人、ラオス人の？

スイスを後にしての「ソング・オブ・アジア」の訪問国は、デンマーク、ノルウェー、イギリス、オランダ、スウェーデン、イタリアと回り、そこからカナダに飛び、正式にはカナダで解散した。しかし、その後も主なメンバーは、アメリカ、オーストラリアとニュージーランドを回った。この長い旅の訪問と企画は、ホスト国の招待によるもので、どんな内容や困難が待ち構えているかも知れない。世界に広がる信頼のネットワークのすばらしさに圧倒された二年間でもあった。

参加した若者のほとんどが、自分の仕事をやめて、このキャラバンに参加している。地位とも名誉とも関係のない国際親善に、なぜ青春時代の貴重な二年間を費やすのかと、多くの人が反対にあっている。しかし、自分の国では得られない何かを探すために、ここまでやってきたのだった。移動にはさまざまな手段が使われた。飛行機、鉄道、バスなど、各地の人々が精力的に手配し、裏方を手伝ってくれた。

スイス、コーの次の訪問国となった九月のデンマークは、すでに秋となっていた。

高度に社会福祉が発展した国デンマークでどういう出会いがあるか、私たちは大きな期待を寄せていた。当時、私が抱いていたのは、老後の心配のまったくない幸せな国家というイメージだった。しかし現実はいささか違っているようだった。

デンマークのユトランド半島には、デンマーク第二の都市オーフスがある。大学がたくさんあって、自然の中で学生たちがゆったりと学んでいる風情だった。

オーフスのある大学で公演したあと、そこの教授は次のように話してくれた。

「デンマークは世界で五番目に裕福な国です。しかし、大変な困難に直面しています。自殺、離婚、薬物中毒の率が年々高まっているのです。昨年は五百万人のうち一万五千人もの人が自殺未遂をしています。そして千五百人が実際に死亡しています。デンマークの人々は生活が豊かになれば幸せになれると思い、働き続けてきました。しかし、心の中には不幸がしまいこま

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ46

れているのです。つまり、生きるための価値観が失われているのです。デンマーク人はここに至って、物質だけでは幸せを得られないということに初めて気付くようになったのです」

さらに別な教授は、その背景として次のことを語ってくれた。

「ヨーロッパは今、病んでいるのです。ヨーロッパの繁栄の陰で、世界の三分の二の人々が悲惨な状態に置かれています。これは私たちののどに突き刺さったトゲのようなものです。この事実がヨーロッパに強い警告を与えています。しかし、私たちはその重荷に耐え切れるだけの実力を持っていません」

私は、デンマークの教授たちの真摯な語り口に感動した。つまりヨーロッパの繁栄は低開発国の犠牲の上に成り立っているからだということを、はっきり語ってくれたからだった。

私にとってはこうした考え方は新鮮な驚きだった。確かに、イギリスやオランダやスペインが世界各地を植民地にしようとして、軍事力を背景に領土を拡大していったという歴史は知っていた。その結果、多くの富を自国にもたらし、植民地の人々の苦境をよそに、自国を繁栄させたという事実も知っていた。

しかし、福祉国家のデンマークも、こうした植民地主義を利用して発展した国だとは知らなかった。しかも、そうした事実を深く反省し、何とか低開発国を助けることができないだろうかと、心を痛めているのだ。

私は日本の実情を考えてみた。日本の国会議員は、自分と自分の取り巻きの利権だけを考えていた。選挙民の代表と言いながら、国民のことはあまり頭になかった。私はそんな日本の政治に嫌気がさし、その結果、今ここでデンマークの教授の話を聞いている。

果たして日本の繁栄は、自分たちだけの力で達成したものだろうか。ことによったらデンマークと同じように、その繁栄の陰には、低開発国の犠牲があったのではないだろうか。よし、日本に帰ったら、この問題についても徹底して調べよう。そう考えると、日本の国会議員の姿も、小さくてみすぼらしい存在にすら見えてきた。

デンマークではもうひとつ、私が知らなかったことを学んだ。カナダの北側に位置するグリーンランドという世界で一番広い島は、一九五二年からデンマーク領だという。私たちは、このグリーンランド島の住民カヤック族の代表と副代表が主催する夕食会に招いていただいた。五十人ほどのカヤック族がディナーの席での私たちの公演を見に来てくれた。その人々を見るやいなや、私たちは目を丸くした。ラオスの仲間はラオス人にそっくりの顔を見つけた。香港の仲間は中国人にそっくりの顔を見つけた。私もまるで日本人の顔を見つけた。つまり、グリーンランド人は元々アジアから移り住んだことが一目瞭然だったのだ。彼らは私たちの寸劇のひとつを鑑賞し、強い共感を示してくれた。それは、ニュージーランドのマオリ族が自然との共生を歌ったものだった。そして、物質至上主義の考え方よりももっと大事

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ48

なものがあるという、古来からの哲学を紹介したものだった。

カヤックの若者たちは口々にこう語った。

「あなた方が持っている、民族を超えて共生すべきだというメッセージは、私たちカヤックが考えているものと同じです。これを機会にお互いに協力して一緒にやっていきましょう」

デンマーク滞在中の忘れ得ぬ思い出は、パプア・ニューギニアの独立であった。九月十五日のその日には、私たちが使っていたホテルの前に新しい国旗が掲揚され、「ソング・オブ・アジア」に加わっていた三人のパプア・ニューギニア人を祝福した。宗主国であったオーストラリア人も我が事のように喜んでくれた。この円満独立の陰には両国にパイプを持つMRAの人々の仲介もあったからだ。

ノーベル平和賞と予防外交の国ノルウェー

デンマークでのさまざまな思い出を後にして、次の訪問地はノルウェーだった。ノルウェーの人々は百年前まではバイキングとして知られ、世界中の海を航海していた。地図上ではヨーロッパ大陸の最北に位置しているが、大西洋から運ばれる暖流がノルウェーの港を凍らせないので、バイキングたちは一年を通じての大航海が可能だったのである。こうした能力によって、地球の正反対の南極に到達することになったのもノルウェーの探検家だった。ま

た、コンチキ号という古代インディオの船を再現した帆船で大西洋を渡ることに成功したのもノルウェー人だった。

海と共生していたノルウェー人は、やがて海底に眠っていた巨大な油田を発見することとなる。その結果ノルウェーは世界で最も裕福な国の一つとなった。

首都オスロは、おとぎ話の中に出てくるような、きれいな小さな町だった。主要機関が徒歩で行くことができる地域に集まっており、二週間の滞在で私たちはオスロの通りのほとんどを覚えてしまったほどだ。

ホームステイ先で私たちを迎えてくれた家族は、とりわけ温かだった。私たちは、ふたり一組でホームステイすることが多かった。オスロのホームステイ先では「ソング・オブ・アジア」の監督と私が組になって泊めていただいた。この監督はインド系フィジー人だった。ホームステイ先の奥さんはノルウェー人だが、ご主人はインド系の画家だった。北欧ではアジア人やアフリカ人がそれなりの地位を得ていた。そこには差別や偏見を超えて、外国人と共生しようとする北欧諸国の健全さがあった。

MRAは各国の都市に巡らされたネットワークを使って、ホームステイの受け入れ先を準備してくれたが、私たちが見知らぬ風習のもとでも、本当に安心して過ごせるように、きめ細かい指導をしてくれた。そして、受け入れ先が本当に自然にふるまってくれたのが、とて

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ50

も嬉しかった。

オスロでは私たちの「心の声に静かに耳を傾けよう」というメッセージを十五もの新聞が取り上げてくれた。

たとえば「アフテンポステン」という保守系の日刊紙は、

「若者たちはアジアの未来を信じている。彼らは人は変わらなければならないということを信じており、また人を搾取しようという仕組みを、正義を行う仕組みに変えなければならないと信じている」

と報道した。

これらの報道の結果、オスロ市内のあちこちの学校からぜひ来て欲しいという招待を受け、二週間の間に十八もの学校を訪れ、計二十八回の公演を行うことになった。

ある中学校の男子生徒は、私たちを学校に呼ぶために、クラスの全員を説得しなければならなかった。先生がそういう規則を作っていたからだ。しかし、その男子生徒は全員を説得することに成功した。また、別の学校では、生徒一同が試験を延期して、私たちの公演を見るという決議をした。

公演依頼は、労働組合や大学などにも広がり、私たちは政治家、学生、組合労働者だけでなく、さまざまな職業の人々と意見を交わすことができた。

デンマークと同様、オスロでもお金とモノに価値を置く、物質至上主義への反発とアジアへの共感を語る人がたくさんいた。

一九九四年のイスラエルとパレスチナの和平、昨年のスリランカのシンハリ人とタミール人との和平を実現したノルウェーは、予防・仲介外交の先駆者である。ノーベル平和賞を選考するのもこの国。ダライ・ラマ（チベット）、アウンサン・スーチー（ビルマ）、ラモス・ホルタ（東ティモール）、アラファト議長（ＰＬＯ）とラビン首相（イスラエル）、ツツ大司教（南アフリカ）といった紛争地域の、しかも、認知されていない地域の平和活動家に賞を与える自立性と公平さとを兼ね備えた国際政治に大きな影響力をもつ小国である。

今年の五月二十八日には来日中のノルウェーのボンデビック首相を囲む超党派国会議員の朝食会が開かれた。牧師でもある同首相は、世界にネットワークを持つ国会議員の朝祷会の熱心なメンバーでもある。羽田孜元総理のお誘いで私もこのグループに入れていただき、外国のお客さんがくる時はいつも私に通訳が回ってくる。日本では、津島雄二、谷垣禎一両代議士が始めたもので、今年もクレイトン・ヤイター元アメリカ通商代表、韓国の伊永寛通商外交相などと有意義な交流をさせていただいている。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ52

三、「戦後」という言葉は日本だけにしか通じない

私も英語が話せなかった

アルバイトに明け暮れ、一年の留年を含む五年を過ごした大学時代は、あまり授業に出ず、友だちのノートのコピーで試験を切り抜けてきた私は、英語も苦手科目の一つだった。つまり、そもそも英語ができずに「ソング・オブ・アジア」に加わっていたので、最初の数カ月はまわりで何を話しているのかあまりわからなかった。しかし、一緒に歌う歌を暗記することから始め、ホームステイ先で同室する友人と毎日一緒にいるうちに、その人の英語だけはわかるようになっていった。他の人が話す英語を私がわからなくても、その友人が言い直してくれるとよくわかるようになった。耳が慣れるというのはこのことだと実感した。やがて、学校訪問で友人に原稿をチェックしてもらってスピーチするようになると、随分上達するようになった。移動のバスの中で英語の資料を読み漁ったり、目の前に現われることを英語で

独り言でつぶやいたりする努力も実を結んでいった。たとえば、「今日九月五日、オスロに向かうバスの中。左に湖を見ながら走っている。前を行く車の番号は２３４１」といったことを英語で口ずさむ。二十五歳になってからの英語なので、すでに唇やあごの筋肉が日本語の筋肉で固まっている。口をとがらせ、舌や唇を使う英語を話すには、筋肉を慣らすことも重要だからだ。

英語を話す上でもう一つ重要なのは「相手のつばの届く距離で聞く」ということである。そもそもお辞儀ではなく握手の文化では、相手の目を見ながら顔の至近距離で話すというのが常だ。加えて、英語は口を開けて話すため、当然つばが飛んでくる。それを避けずに聞く距離にいると、相手の言っていることがよくわかってくるものである。よく、「相手の言っていることは大体わかるけれど、自分でしゃべることはできない」という日本人がいるが、実は相手の言っていることがほとんどわかっていないことが多い。まず聞けること（ヒアリング）が重要で、聞ければ同じような言葉をマネて話し始めれば結構話せるものである。高校程度の英語内容で十分なのだから。

私は、やがて帰国後には同時通訳も行うようになった。ＭＲＡという貧乏ＮＧＯにはプロの通訳を雇うほどの予算がなく、結局自分でやってみるしかなかったからだ。いや、それ以上に、相馬雪香さんという日本の同時通訳の草分けが身近にいたので、それを見習いながら

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ54

「ソング・オブ・アジア」で踊る（左から2人目が筆者）

覚えていったというのが正確だ。相馬さんがそうであったように、通訳技術を通訳学校で学ぶという機会などなく、とにかく現場で場数をこなすということだけだった。MRAのように、死ぬか生きるかの瀬戸際にいる人々の気持ちや憎しみなどを通訳するのに、技術で対応できるはずがなく、体ごとその人の気持ちに乗り移らなければ、その情念を外国語で表現できるはずがない。言葉以前にその人の心をつかむという「ソング・オブ・アジア」の経験は通訳にも役立つことになった。もっとも、国会に、特に小選挙区に出るようになってからは外国との交流も少なくなり、英語も大分錆びついてきたのが悲しい。

日本だけが平和ボケの台風の目の中に

「ソング・オブ・アジア」の旅を開始してしばらく経つと、私は、日本人だけがほかの仲間と違うのではないかという感じを抱くようになっていった。最初、それが何かはわからなかった。

ところが、ある時私が「戦後（post war）」という言葉を口にしたとき、親しくなっていた友人が喰ってかかってきた。

「君は戦後という言葉を使ったけれども、それは日本だけの話だろう。今、アジアの私たちの国は、どこも戦いの中に生きているんだ。その戦後という言葉を聞くと、正直いやになってしまうよ」

言葉は優しかったものの、彼の目は、私を問いつめるような鋭い光を発していた。

「でも、私は戦争を知らない世代だ。戦争は一九四五年に終わったではないか」

と言うと、彼は私の言葉を否定して首を横に振った。

私の認識はとても甘かったようだ。

私たちのまわりを見れば、朝鮮半島では南北分断という悲しい現実があり、しかも銃と銃が対峙したまま、いつ戦争が起きるかわからない状態だ。台湾海峡をはさんで、中国と台湾

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ56

との緊張はいまだ続いている。当時は香港も英国領だった。まだベトナムも南北に分かれていた時代だった。フィリピン、トルコ、マレーシア、ラオス、パプア・ニューギニア、インドと、私は参加者の出身国の地図を頭の中に描いて、リスト・アップしてみた。

どの国も、現実に紛争を抱えていたり、あるいは近隣諸国からの脅威にさらされている。戦争も対立なく、分断もされていない国は日本だけではないか。戦後などという言葉は、日本だけに通用する言葉であって、アジアの他の国の人々から見れば、日本だけが勝手に思い込んでいるのが平和という幻想ではないか。「アジアの中の日本」などという言葉があるが、日本は他のアジアの国々とは違った形で、自分だけが幸せになればいいという歩み方をしてしまったのではないか。

私は、「日本だけが平和ボケの台風の目の中にいる」と感じた。台風の目の中は雲ひとつない快晴である。しかし、一歩外に出ると暴風雨圏に入る。むしろ紛争や対立中に生きているのがアジアの普通の姿で、例外的に日本だけが一九四五年以後の一時期、外からの脅威も感じずに来てしまったのではないか。そして「日本はアジアではない」と、アジアの友人たちが思っているという重い現実が存在することも。

いったい、こうした事態をアジアの国々に引き起こしたのは誰なんだろう。

先進国によるエゴイズム。その中には日本も含まれるかもしれない。あるいは、アジア各国の宗教や領土の紛争。各国の独裁者による誤った政治。さまざまな理由が考えられる。

しかし、ここに集まった「ソング・オブ・アジア」の若者たちが共通して持っている価値観は、「人の心が変わらなければ平和は訪れない」というものだった。

私は、自分の認識が日本人固有の考えに染まりきっていたことを反省し、アジアの人々が抱える苦しみを共有しなければならないと、はっきりと気づいた。

そう考えると、私が感じていた疎外感が、心の中から消えていることに気づいた。

「そうだ。私は日本人である前に、アジア人なのだ」

そう気づいたことが、私の「ソング・オブ・アジア」での最大の収穫となった。

スコットランドやウェールズの独立運動

一同が英国に到達した頃には、私の心はアジアの仲間たちと何の違和感もなく、溶け合うようになっていた。

私たちは英国のことを自然に、イギリスと呼んでしまうことが多いが、こうした呼び方は現地ではタブーだ。英国はイングランド、スコットランド、ウェールズそれにアイルランドからなる連合王国で、イギリスという言葉はイングランドしか指していないことになる。

したがって、スコットランドやウェールズをイギリスと呼べば、「自分たちはイギリス人

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ58

ではない」という強い抗議を受けることになる。グラスゴーでスコットランド独立党の議員と懇談したが、今の日本に欠けている、歴史と文化に対する強いプライドを感じた。

スコットランドのアバディーンという町は、北海油田の石油ブームに沸いていた。そんな活気のせいか、石油会社の人、地元の議員、農家の人など、さまざまな職業の人々が私たちのホームステイ先になってくれた。

公演に先立って、パプア・ニューギニアの仲間が、貝をすり合わせた楽器を鳴らすと、人々はものめずらしそうに立ち止まって、私たちの公演の看板を見て、チラシを受け取って行く。私はそのそばで、羽織袴すがたで、手には扇子を持ち、カセットに合わせて踊る。

この奇妙な呼び込みに人々は興味をそそられ、私たちがアジア十四カ国からきたグループだと知ってさらに驚く。

スコットランドで感動的だったのは、あるホテルの女主人の言葉だった。実は彼女は自分のホテルを今後どういうふうに運営していったらいいか、ずっと悩んでいた。「ソング・オブ・アジア」の公演を見た彼女は、私たちをホテルに招待して、私たちの前でこう宣言した。

「あなた方の公演を見て、何が大事かをはっきりと知ることができました。私は、自分のホテルを今後どういう形で運営していったらいいか、この三年間悩んでいました。しかし、今日はっきりと運営してゆく自信がつきました。あなた方、『ソング・オブ・アジア』のような皆さんに使っていただくためにこのホテルがあるのだということがわかったのです。これからこのホテルは良心の声に耳を傾ける人々が集う場所として生まれ変わります」

この言葉を聞いて、ホテルの女性従業員も喜んだ。

「これで、本当に自分の生涯をこのホテルに捧げるという気持ちになりました」

彼女は直ちに私たちの「ソング・オブ・アジア」の公演ボランティアに加わり、ロンドンでの公演を手伝った。

アジアの友人にも残る日本の戦争の傷跡

公演の旅では、仲間たちの生い立ちや文化を詳しく知ることができた。公演先の文化を学ぶと同時に、私たちはアジア各国の文化を細かく学ぶこともできたのである。

無二の親友となった香港の教師フンチーは、ある日、私にこんな恐ろしい話をし始めた。

「母親から聞いた第二次世界大戦の頃の話だが……」

そこまで言うと、彼は言いよどんだ。

「なんだよ、途中まで話して。先を続けろよ」

「母親は見たそうだ。日本兵が赤ん坊を空中に放り投げて、落ちてくるところを銃剣で突いて殺したのを。親友だからこそ、この話を聞いて欲しかったんだ。いやな思いをさせてす

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ60

まない」

私の脳裏には、空中に投げ出されて声を出すまでもなく、ザクリと日本兵に刺し殺された赤ちゃんの情景が、まるで映画のように映し出された。そういった日本人がいたことがとても悔しかった。私は、返す言葉もなく、うなだれているしかなかった。

またある日、アフリカ人より真っ黒な顔に白い歯がきれいなパプア・ニューギニアの友人リオが、突然「鳩ぽっぽ」を歌いだした。

「え、その歌、教えなかったよ。どうして知っているの？」

と聞くと、むかし日本軍と一緒に働いたことのある父親から習ったという。日本兵は日本語を現地の人たちに強要したとのことだった。遠く海を隔てたパプア・ニューギニアにも、日本の傷跡が残っていた。

またニュージーランドのマオリ族の若者は、地元では不良少年として嫌われていたという。自分の根性をたたきなおして、他人との協調の仕方を覚えるために、この「ソング・オブ・アジア」に参加したのだという。さらにインドとビルマ（ミャンマー）の間のナガランドの少数民族のゲリラも私たちの仲間だった。ナガランドは、インドとビルマの両国からの独立を目指してずっと戦い続けてきたゲリラの拠点で、今現在も和解のきざしが見えない紛争地域である。彼らも、戦争に終止符を打つためには心の内側からの改革が必要だというＭＲＡの理念に共鳴して、このキャラバンに参加してきたのだった。

「戦争のために生きるのがナガランドの人々の本来の姿じゃないよ。戦争をやめるためには、自分たちと相手の心を変えるしかないんだ。このキャラバンで覚えたことをナガランドに帰ったら、必ず実践してみせる」

平和を強く切望する彼らの目は、いつもキラキラ輝いていた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ62

四、日本には「難民」や「人権」という言葉がなかった

また、行く先々でヨーロッパの人々から質問攻めに会うのが、ベトナムとラオスからインドシナ難民として逃避行をしてきた女性メンバーたちだった。

毎日のように「難民」、「先住民」、「人権」、「マイノリティー（社会的少数グループ）」などの言葉が、話題の中心だった。私たちが上演する歌や芝居のテーマも、そのほとんどがこうした言葉と関係のある事柄ばかりだった。

当時の日本では、新聞でもテレビでもこうした話題に触れられることはほとんどなかった。今でこそ「難民」という言葉を知らない人はいないものの、当時の日本では、こうした言葉はわれわれとはまったく無縁な、遠い世界の話だった。

しかし私が飛び込んだ「ソング・オブ・アジア」は、まさに紛争の渦中からやってきたアジアの若者たちの集団だったのだ。

またトルコから参加した女性チデムは学生運動の闘士だった。私が「ソング・オブ・アジア」に参加した頃は、全世界的に広がっていた学生運動が下火にはなっていたものの、まだまだ自分たちの理想を実現することに燃えている学生たちがたくさんいた。

今回のキャラバンは彼女にとっても実りの多い旅だった。

特に彼女を変えたのは、各国での政治家との出会いだった。行く先々のホームステイのホストたちは、私たちを積極的に地元の国会議員や地方議員に紹介してくれた。

私たちは北欧の旅を終えて、英国各地を回っていた。スコットランドの人々との出会いに感動し、さらにウェールズに着いたときだ。

あるウェールズの地方議員が、私たちにこう語ってくれた。その言葉はまるでチデムの悩みそのものに対する答えのようだった。

「あなた方の旅の目的は、私にははっきりと見えます。それは、戦争が終わり、平和というものが、ちょうど海にあふれる水と同じように、地上を覆うことを皆さんが自分自身の目で見てみたいということです。十四カ国の違った国々から来た若者が、こうして一緒に仕事をするというのは、とてもすばらしいことです。こうした試みは他の世代では考えられないことです。国同士がお互いに疑いを持ち合っているときに、皆さんはお互いに助け合っています。皆さんがここウェールズに来られたことを大歓迎いたします」

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ64

私たちの旅の目的は、行く先々で正確に理解されていった。

インディアンの酋長たちからカナダに招かれる

ロンドンのウエストミンスター劇場での公演を、新聞などで伝え聞いたカナダのカルガリー（二〇〇二年冬季オリンピック開催地）近郊のインディアンの酋長たちがわざわざ観劇に飛んできてくれた。「ソング・オブ・アジア」メンバーのマオリ族、インドのナガ族、アッサム族、それにノルウェーから合流したサミー人（ラップランド人）といった少数民族を中心とした和解のメッセージをカナダに伝えたい、と「ソング・オブ・アジア」をカナダに招きに来たのであった。

私たちの旅は、こうしたリクエストに基づいて、そのたびに行く先や滞在日数を考え、相談して決めてゆく形で行われていた。スイスからデンマークはデンマークが、デンマークからノルウェーはノルウェーが、ノルウェーからイギリスはイギリスが、というふうに、ホスト国が、前の国からの旅費を持つというのが一般的なパターンであった。

一九七六年四月にカナダのカルガリー空港に到着した私たちを迎えてくれたのは、「第七条約グループ」という酋長の方々であった。イギリスがアメリカ大陸を植民地化していく過程で、地域のインディアンとも停戦協定を結びながら西進した。したがって、この第七条約

グループとの調印を行ったのは、ビクトリア女王とのことである。私たちを迎えた酋長たちは、バックスキンの正装姿であったが、こういう正装で外国の賓客を迎えるのは、この条約調印の時以来二度目だそうで、その後イギリスのチャールズ皇太子が調印二百周年に訪れたときに、三度目の正装による出迎えを行ったとのことである。いかに私たちが光栄に浴していたかは、あとで考えれば考えるほど驚くばかりであった。

いくつかのアメリカン・インディアン居留地で、「ソング・オブ・アジア」の公演を行っただけでなく、さまざまなインディアンの部族や、活動家と交流することができた。

ここでも頻繁に語られていたのは「人権」という言葉だった。

白人とアメリカン・インディアンの戦いは、遠い昔の話だと思っていた私だったが、現実にはアメリカ政府やカナダ政府との間で数多くの懸案が未解決なままになっていた。

インディアン省の汚職に対する、死をもっての抗議

私たち「ソング・オブ・アジア」のメンバーにとって強烈な出会いは、アルバータ州の若いインディアンの活動家、ネルソン・スモール・レッグ・ジュニアとの会談だった。彼はブラックフットという部族の活動家で、北米アメリカのインディアンが組織する「全米アメリカ・インディアン運動」（ＡＩＭ）という団体の南アルバータ支部長を務めていた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ66

カナダのカルガリー空港でインディアン酋長たちの出迎えを受ける

彼は五百年間にわたるアメリカン・インディアンの戦いを解説してくれたあと、こう語った。

「とても大きな目標ですが、数多くの人々の心を変えなければなりません。同時に私は社会を変えたいのです。私にとっては真実だけが、唯一の武器です。真実に勝てる人はいません。私たちは道徳を基盤にして共生しなければなりません。私たちが持っている古来からのインディアンの知恵を、現代に応用しなければなりません」

そしてさらに、最近起きたインディアンと白人との紛争について触れた。実は前の週に、「全米アメリカ・インディアン運動」の創設者のラッセル・ミーンズが殺害され、インディアンが報復活動を開始するなど、不穏な空気が流れていた。ネルソンは、そうした中でもあくまでも非暴力を貫きたいと語っていた。

「相手の建物を燃やすのは、私たち自身を傷つけることにほかなりません。バッファローが二匹戦えば、草原は台無しになります。インディアンの知恵は、誰が傷つくのかを十分に教えています。耐えることがインディアンの道です。私たちは正しい道を歩みます」

ネルソンを中心としたインディアンとの交流の結果、何人かが私たちに合流して、一緒に旅をすることになった。地元の先住民が仲間に加わってくれることは、私たちにとっても大きな励みだった。

しかし、ネルソンとの出会いのわずか三日後に、私たちにショッキングなニュースが届いた。

彼が抗議の自殺をしたのだ。享年二十三歳、三通の遺書を残しての自殺だった。インディアンの正装をしていたということから、最後の抗議だということが明白になった。あいかわらず続いているインディアンたちへの不当な差別と、カナダ政府のインディアン省の汚職に対する抗議だった。

彼があれほど暴力を選ばないと言っていたあとでの抗議の死は、彼の非暴力の精神が通用しないほど、アメリカ・インディアンをとりまく状況が差し迫ったものだったのだろう。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ68

ネルソンの葬儀には、私たちを含めて数多くのインディアンが参加した。両親が私たちにこう語ってくれた。

「ネルソンは何度も何度も『ソング・オブ・アジア』のことを語っていました。彼らが運んできた和解の道こそがインディアンのとるべき古来からの知恵だと」

葬儀では、ネルソンの同志たちが次々にネルソンの言葉を語った。

「あらゆる手段を利用して、話し合いをすることこそが、本当の和解の道だとネルソンは語っていました。私たちは彼の死を受けとめて、彼が歩もうとした道を歩んで行きます」

五、戦争をつくる人、なくす人

カナダ議会での和解

ネルソンの死のあと、首都オタワに向かった「ソング・オブ・アジア」は国会議員との交流会を終え、国会内の夕食会に招かれネルソンの両親も私たちに同行した。ネルソンの抗議の対象だったインディアン省の大臣がネルソンの父親の隣に座り、父親に握手を求めた。

父親は大臣に言った。

「私はあなたに対しても、あなたの家族に対してもなんら個人的恨みを抱いていません」

ネルソンの父親も、対立ではなくて、和解の道を歩む人だったのだ。

しばらくの沈黙が続いたあと、大臣が語りかけた。

「私にできることが何かありますか」

大臣はその汚職に関わった関係者の処分を含めた改革に取り組んでくれた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ70

ネルソンの父親は私たちの公演のあと、インディアン居留地近くの中学校で、五百人の聴衆の前で、ネルソンの死後、インディアン省大臣と直接話をする機会を与えてもらったことを語った。

「大臣に対して、私は何と答えればよかったのでしょう。息子を返してくださいとでも答えればよかったのでしょうか」

ネルソンの父親は、「ソング・オブ・アジア」の公演を引き合いに出してこう語った。

「憎しみや恨みを捨てて、積極的な和解の道を探すことこそが、大事なのです。息子は私にとっては、友人のようなものでした。さまざまなことを話し合いました。勇気とは何か。真実のために戦うとは何か。そして息子の死のあと、カナダ中から手紙が届いたのです。私は息子がこんなに多くの友だちを持っていたことに驚きました」

そして、手紙の中には、ネルソンに捧げる曲も入っていたことを紹介した。トロントの作曲家が作って録音して送ってくれたそうだ

話の最後に、トロントから送られたネルソンに捧げる曲が披露され、さらに私たちが賛美歌を歌った。

ネルソンの父親は、インディアンの主要部族の四人の酋長を伴って来ていた。

酋長の一人がこう語った。

「私たちは変わらなければなりません。私たちインディアンも、そしてカナダ政府も。そして、お互いが変わることができれば、必ずや解決への道が見つかるに違いありません」

ネルソンの命をかけた抗議は、カナダ政府の側にも、インディアンの側にも着実に伝わった。命をかけなければならなかった悲しい抗議の死は、私たちにとってもつらく、大きなショックとしてのしかかったのは事実である。

しかし、ネルソンは命をかけて、争いより大事なのは和解であるということを、私たちに教えてくれたのだ。

「ソング・オブ・アジア」の旅は、一冊や二冊の本では書ききれないほどの貴重な体験を私たちにもたらしてくれた。

そればかりか、現在の私の最初の出発点を作り、決定してくれたのも、「ソング・オブ・アジア」だった。

私が二年間にわたるホームステイの旅で学んだのは、世の中には戦争を作り出す心と、それをなくす心との二つがあるということだ。

心理学用語に「集合無意識」というものがある。人類全体に共通している自分では意識できない共通の情動だそうだ。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ72

カナダ国会議事堂の前で（左端が筆者）

「朱に交われば赤くなる」という言葉があるが、社会環境が悪化すると、人々の心に悪い習慣が忍び込んでしまう。不正なことをしても罪悪感が麻痺をしているので、「この程度ならいいだろう」という気持ちが、次々に犯罪をエスカレートさせてゆく。

罪悪感の欠如した、すさんだ心が社会に広がってゆくと、人々全体の「集合無意識」として、あらゆる人々の心の中に巣くってしまうようだ。

平気で特定の人を差別する社会などは、最初は学校の「いじめ」程度の規模だったものが、全体に広がってしまった結果に違いない。

そこまで社会の病気が重くなると、それに警鐘を鳴らす人は、命がけの戦いを強いられる。戦前の軍国主義に反対した人、アメリカの黒人差別に反対した人など、どれだけの命が失われたか、はかりしれない。

反対に、社会の中に助け合いの気持ちが広がると、人々の心に優しさが生まれ、すさんだ心がいやされてゆく。ＹＫＫ吉田工業の創業者の吉田忠雄社長が、「善の循環」ということを唱えておられるが、同じことを指しておられると思う。

ホームステイの先々での家族の温かさは、私たちの心を優しく包んでくれた。そして、誰もが戦争のない平和な心を求めているということを知ることができた。

ＭＲＡが主張する「心の武装」とは、他人を恨んだり憎悪したりする悪い習慣が、心に入り込まないようにしようということである。

人々が他人と和解できるような心を持つようになれば、戦争をなくそうとする人の力が強力なものになり、平和に対する強い抑止力となるからだ。

妻玲子との出逢い、そしてデートなしの結婚

「ソング・オフ・アジア」は、正式には一九七六年秋にカナダで解散した。準備期間から数えると三年間の長丁場であり、また中心メンバーが多かったインドではインディラ・ガンジー首相が統制的な政治姿勢を強め、ＭＲＡのような国際的な民間団体や海外との交流に制

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ74

限が加えられるようになったからである。

私を含むメンバーの多くはアメリカに渡り、少人数でリッチモンド、ワシントンDC、ニューヨーク、ミネアポリスなどを回り、交流活動を続けた。十一月の大統領選挙ではカーター氏が、フォード大統領を破って大統領に就任した。

ペンシルベニア州のアランタウンにはMRAの創始者フランク・ブックマン博士の生家があり、市の保存物となっている。そこで驚くべきものに遭遇した。日本軍が一九四五年に東京湾の戦艦ミズーリの上で、降伏のしるしとして連合軍の何応欣将軍（中華民国総司令官）に進呈した軍刀が将軍からブックマン博士に渡され、ここに保管されていたのだ。平和に貢献したブックマン博士の功績を称え、将軍が贈呈したとのこと。

こうしたものが、外国の民間人に渡されていること自体、国際関係における個人と個人の信頼関係がいかに大切かということを学ぶことができた。

その後、私はニュージーランドに渡り、三カ月間国際会議の準備活動に関わった。一九七七年にオークランドで開かれた国際会議はマオリ族の主催で行われ、アメリカやカナダのインディアン、オーストラリアのアボリジニー、スカンジナビアのサミー（ラップランド人）、インドのナガランド、アッサムなどの先住民や少数民族が多く参加した。

同年二月にはオーストラリアに向かった。メルボルンにあるMRAのセンターで、アジア・

太平洋の若者が参加する国際人研修コースの助手をして欲しいとのスタン・シェパードさんからの招きだった。寒河江善秋さんからの、日本やアジアの青年が国際的に通用し、かつ自国に戻って地域や国に役立つような人材を育てて欲しいとの要請にこたえたものであった。

インド、マレーシア、台湾、韓国、パプア・ニューギニアなどの若者に混じって、五人の日本人が参加した。その四人が女性。一人は寒河江善秋さんの長女、千鶴さん、もう一人は星玲子であった。彼女のオーストラリア到着を強烈な仕打ちが待ち受けていた。MRAのセンター「アーマ」に着いたとたん、日本から持ってきた多額の現金が見つからないというのだ。記憶をたどらせると、どうも日本からシドニーまでの飛行機の座席の前のポケットに入れ忘れたらしい。早速カンタス航空に連絡し、同社も機内清掃の関係者全員を調査してくれたが、とうとう見つからなかった。おそらく、思いもかけないプレゼントを手にした人が今さら差し出すはずがないと、あきらめざるを得なかった。

玲子は茨城県の高校を卒業したばかり。両親とも中小企業の経営者であり、小さい時から祖父母に育てられた甘えん坊。天真爛漫というか自由奔放というか、学校生活もはみ出すことが多かった。大学は行かずに、自分を変えてみたいと思っていたときに、母の友人の狩野安さん（現在は参議院議員）にこの国際人研修コースの話を聞いてやってきた。

国際人研修コースは、最初の一カ月は、センターで英語、世界の時事問題、オーストラリ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ76

アの歴史や社会についての講義、参加者による各国事情や歴史の発表、参加者の国の歌の勉強などを行った後、残りの二カ月近くは各地をホームステイしながら訪問した。アボリジニーの居留地、港湾労働者、鉄工所、大規模果樹園、移民の受け入れ施設、インドシナ難民、国会などを訪問し、またオーストラリア社会を家庭の内側から勉強することができた。

私はその後、スイスの国際会議に出席し、そこに合流した母とヨーロッパ数カ国を回り二年ぶりに帰国した。当時国内における活動が下火になっていたMRAの事務局には専従者もおらず、これだけお世話になり、私の人生を変えてくれた方々に恩返しをしたいと、専従スタッフとして働くことになった。

すると母は　大学を卒業した一人息子が、就職もせずに、二年間も没頭したこの得体の知れないボランティア組織（当時はNGOという言葉も存在していなかった）がどんなものかを自分の目で確かめてみたい、と言い出した。シェパードさんも歓迎してくれたので、翌年約一年間母はメルボルンのセンターで国際人研修コースに参加することになった。六十三歳で外国語を勉強し、初めて外国生活をすることは大変なことだが、持ち前の東北人の粘りと努力で、若い人々にも溶け込み、多くの友だちを作り、慕われるようになった。玲子は結局このセンターに三年間残ることになり、主に料理の責任者として活躍することになった。母と玲子は、やがて親子関係になるとは知らずに、一年あまりを一緒に過ごすことになった。

加藤シヅエさん（前列左）の百歳の誕生日。その隣が相馬雪香さん。後列左から二人目が加藤タキさん

次に玲子と再会したのは、一九八〇年二月、インドでの会議であった。私はタイでカンボジア難民キャンプを訪ね、ソン・スーベールさんと出会った直後であり、「ソング・オブ・アジア」の仲間たちにそのグッドニュースを伝えることができた。約三年ぶりの玲子は、英語が見違えるほどに上達し、英語の歌をソロで堂々と歌うほどに成長していた。

玲子とは、その夏スイスの会議で一緒になり、出席していた柳澤錬造国際MRA日本協会理事長（参議院議員）夫妻や江田五月衆議院議員、東芝の労使代表などの面倒を一緒にみることになった。

その後玲子はロンドンに渡り、イギリスＭＲＡの書籍部で働くことになった。翌年二月私は国際電話でロンドンの玲子にプロポーズし、翌日玲子から受け入れの返事がきた。よく考えてみると、一度も二人でデートもしたことのない婚約であった。

一九八一年六月十四日、私たちは原宿の中央教会で結婚式を挙げた。タイの難民キャンプに私を導いてくれ、ソン・スーベールさんと引きあわせてくれた、あのジェリー・エイトキンさんが司祭を務めるために、バンコックから駆けつけて行ってくれた。彼の通訳を相馬雪香さんが務めてくれた。披露宴は日本青年館で行われ、柳澤錬造ご夫妻が仲人を務めてくれた。柳澤さんは、石川島播磨重工労働組合の委員長の時にＭＲＡに会い、土光敏夫社長との間に信頼関係を築き、労使関係を大きく改善させていた。そんな関係で土光さんが、当時国際ＭＲＡ日本協会の会長を務めていた。

ちょうど日本でＭＲＡの国際会議が開催された直後のため、式には海外からも多くの方々が参加して下さった。加藤シヅエさん、江田五月さん、相馬恵胤さん（相馬雪香さんの夫）、三菱総研の中島正樹社長、世界経済調査会の木内信胤理事長、東芝の高瀬正二専務などからご祝辞をたまわった。

第三章　平和を実現する心と心の響きあい

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ80

一、ナチスへの恨みを氷解させたフランス人女性

今日のＥＵを導いた独仏の和解

私の「ソング・オブ・アジア」の旅の出発地点だったスイスの山村コーにあるマウンテン・ハウスの存在が世界に知られるようになったのは、一九四六年から五〇年にかけて、毎年平和会議を開催したのが始まりだった。

ＭＲＡ（モラル・リアー マメント＝道徳再武装）という運動を起こしたのは、フランク・ブックマン博士というアメリカ人の牧師であり、ＭＲＡに賛同するスイスの九十人が私財を投げって戦前はホテルだったこのお城のような建物を購入して、運動の拠点としてブックマン博士に提供した。

第二次世界大戦が終焉した翌年の一九四六年夏。マウンテン・ハウスを訪れたブックマン博士が最初に発した言葉は、

「ドイツ人は一体どこにいるのですか」

という問いかけであった。

ブックマン博士は「ドイツ人を抜きにしてヨーロッパの再建を行うことは不可能であろう」という認識を持っていた。

ＭＲＡの支持者たちは、かつて敵対していたフランスとドイツの双方から、関係者を招き、毎年和解の会議を行った。

一九四六年から五〇年のコーへの参加者はフランスから千九百八十三人、ドイツから三千百十三人に上った。占領下のドイツではドイツ人の出国や外国への入国が厳しく制限されていたため、ＭＲＡ関係者がアメリカのドイツ占領当局からの出国許可を取得し、さらにスイスからの入国許可を得るという仕事を連日続けることになった。

この民間交流こそが、ドイツ人とナチの被害者の間での精神的和解を可能にする場となったのである。

フランスから参加したイレーヌ・ローー夫人は、子供たちが目前でナチの秘密警察ゲシュタポの拷問を受けたため、ドイツ人に対し激しい憎悪を抱いていた。それがきっかけで、イレーヌはレジスタンスの闘士となり、ナチス・ドイツと戦い続けることになり、フランス社会党の国会議員も務めていた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ82

その彼女が一九四七年の夏コーに到着すると、多数のドイツ人が同じ屋根の下にいると聞かされると、荷物をたたんで帰ると怒り出した。そこで、ブックマン博士が、「ドイツ人を抜きにしてヨーロッパの平和を築くことができますか」と問いかけた。イレーヌは三日三晩部屋に立てこもって、悶々と自分との葛藤を繰り返したあと、会議場に現われ、あるドイツ人未亡人とテラスで話し合った。その未亡人の夫は、ヒトラーの暗殺を企てたが発覚し、ナチに処刑されていた。

「私たちドイツ人がヒトラーに対して、より早く、より激しく、抵抗しなかったことを大変申し訳なく思います。私たちを許してください」

この話を聞いたイレーヌの心が溶けはじめた。

イレーヌは、大会議場にドイツ人を集めてこう発言した。

「私はドイツを大変憎んで、ドイツをヨーロッパの地図から抹殺したいと考えてきました。自分の思想として人類愛を訴えてきた私が、おかしなことに、一つの民族の破滅を願っていたのです。しかし、私は私の憎しみが誤りであることに気づきました。どんな理由があるにせよ、憎しみは新しい対立を生み出します。憎しみに打ち勝つのは愛しかありません。私は、ここにいるすべてのドイツ人の許しを請いたいと思います」

そして、こうべをたれ、謝罪を求めた。

これを聞いたドイツ人たちは、信じられないという面持ちで、

「許していただかなければならないのは私たちのほうです」

と叫び、感激のあまりに泣き出してしまった。

こうして、マウンテン・ハウスでの和解の会議は、お互いを許し合える場になっていった。

さらに一九四九年には、フランスのシューマン外相とドイツのアデナウアー首相が会することになる。ブックマン博士がシューマン外相に、アデナウアー首相を紹介したのがきっかけだった。

独仏和解やヨーロッパ統合が可能となった理由として、東西冷戦を挙げる人が多い。しかし、ヨーロッパで冷戦が激化したのは一九四八年から四九年にかけてである。ＭＲＡはすでに四六年から独仏和解に向けた活動をしていたのである。独仏和解は、後のＥＥＣ、ＥＣ、そして今日のＥＵ（欧州共同体）に至り、今ではユーロという共通貨幣まで生み出している。「戦争を起こしえない仕組み」を作ったという意味で、世界史的な偉業である。こうした意味でのアジアの共同体が必要であり、そのためのアジアの国民レベルでの和解が必要である。

奇跡のジンバブエ和平

こうしたＭＲＡの努力の成功例としてもう一つ挙げたいのが、七〇年代のアフリカ、ロー

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ84

デシアの例である。

昔ローデシアと呼ばれていたこの国は、今はジンバブエと呼ばれている。

当時イギリス自治領だったローデシアでは、黒人の政治参加に反対する白人層が、人種差別を主張し、一九六五年に黒人の声を一切無視して、一方的独立宣言を行ったのである。

黒人たちはゲリラ抵抗戦線を作り、この新しい政府に対抗した。七〇年代からの戦闘は特に激しくなり、多くの人命が失われた。また一方的独立宣言を行ったローデシアに対し、イギリスは、「アフリカ人多数支配が行われない前にローデシアに独立は与えない」という原則を表明し、経済制裁を行った。

その後、各国がローデシアの白人政府と黒人武装勢力の和解を試みたが、どれも成功しなかった。

一九八〇年になって、選挙が行われることとなったが、白人たちは強く抵抗した。混乱のきわみにあるローデシアに、千二百人の英国連邦軍が派遣され、その監視下での選挙だった。

ＭＲＡは一九七〇年代からローデシア各派間の和解活動を始めていた。その一人がイアン・スミス首相の息子アレック・スミスであった。私が一九七五年夏初めてスイス、コーに着いて皿洗いのチームに入った時のキャプテンがこのアレックだった。首相の息子という特権的な生活に育った彼は、父に対する反抗から、放蕩息子となり、麻薬にまで手を出し、とうとう南アフリカの刑務所に囚役した。そこであった牧師の助けで、それまでの反抗を父に謝罪した。父への謝罪を行った彼は、自分のような白人特権階級が多くの一般の黒人を虐げてきたことに気づき、国を良くするためには黒人と手を携えた行動が必要と考え、黒人に対する謝罪活動を行っていった。

一方、黒人の中にも武力闘争は多くの犠牲者ばかりを出し、戦乱ばかりが続いてしまうとして、和解による解決を目指そうという動きもでてきた。黒人穏健派の牧師、アーサー・カナデリカ師もその一人で、私もコーでその慈愛に満ちた穏やかな人柄に触れたことがある。ＭＲＡはこうした当時の白人グループ及び黒人の三つのグループと信頼関係を築き、その結果、七五年に首都ソルスベリーの大学でＭＲＡの国際会議が開催され、政府閣僚を含む千人以上の黒人と白人のリーダーが参加した。この会議に参加した人々の有志は、その後、黒人と白人による「良心の内閣」と呼ばれる少人数のグループを作り、各派間の信頼醸成や和解促進の活動を行った。コーのＭＲＡ会議には、七五年から七九年にかけてローデシアの双方の当事者が毎年十ないし二十人が参加し、和解の下地作りが行われた。

アーサー・カナデリカ師とアレック・スミスはしばしば一緒に黒人の集会などで謝罪したり、和解の必要性などを説いて回ったが、イアン・スミスの息子に同行していることを良しとしない黒人強硬派によってアーサー・カナデリカ師は暗殺されてしまった。私がこれまで

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ86

に出会った平和の活動家やカンボジアの議員などでテロによって命を失った人も少なくない。勇気ある平和の道は常に危険を伴うことをいつも思い知らされる。

人種差別の権化とされてきたイアン・スミス首相も、やがて、ロンドンのＭＲＡゲストハウスに招待され、各国の要人たちから和解についてのさまざまな提案や知恵に触れる機会もできるようになった。

一九八〇年の選挙では、黒人強硬派として知られるロバート・ムカベ氏の優位が伝えられるようになった。そこで、黒人による復讐を恐れた白人軍部はクーデターの準備に取りかかった。もはやイアン・スミス首相とムガベ氏とのトップ会談しか、武力衝突を回避する道はないと判断した「良心の内閣」のメンバーは、アレックが父親を、ムカベの親戚がムカベ氏の説得に成功して、投票日の前夜、両者の会談がセットされた。

ムカベ氏宅を一人で訪れたスミス首相を、絶好のチャンスとして狙撃しようとした黒人を別の人が阻み、両者は冷静に向かい合った。かつて、ムカベ氏の子供が危篤状態にあったときに、投獄中だったムカベ氏の見舞いを許さなかったことをスミス首相が詫び、一方、かつて、スミス首相を鬼とののしっていたことをムカベ氏が詫び、両氏は握手した。

スミス首相は、黒人政権になっても白人農場主などが国を出て経済に打撃を与えないことを約束し、ムカベ氏は、白人に一定割合の議席を割り当てることを約束した。

翌日の選挙で黒人グループが圧勝し、ムガベ氏がローデシアからジンバブエに移行しての初代大統領に選出された。その日の夕方、ムガベ大統領がテレビ番組に出演し、

「全国民が手を取り合っていこう。勝者、敗者のいずれにも敬意を払おう。われわれには少数派を抑圧する気はない」

と述べ、選挙前の白人の危惧に反して和解を進める姿勢を示した。

これに対しイアン・スミス氏は翌日、国内の白人に対して冷静さを失わず、国を出ないようにと訴えた。

二十年間続いた激しい戦いは終了し、八〇年四月十八日にはジンバブエ共和国が独立した。このジンバブエの無血独立は、一九九四年、同じ人種差別で知られていた南アフリカ共和国が白人政権から、ネルソン・マンデラ大統領の黒人政権に平和裏に移行する良き先例となった。

近年ムカベ大統領は独裁色を強め、白人の土地の没収や野党の弾圧を行っているのが残念である。和解の先駆者としての初心に戻って欲しいものである。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ88

二、アメリカ議会での日本人による最初の謝罪

平和の闘士、相馬雪香さん

こうした和解の歴史を作り出してきＭＲＡに、戦前から参加していたのが、私が師と仰ぐ、相馬雪香さんである。私は、「ソング・アブ・アジア」での二年間を終えて帰国後は、相馬さんを助けて国際ＭＲＡ日本協会の事務局で働くことになり、さらに一九七九年に相馬さんが始めた「難民を助ける会」に加わり、また、一九九六年に国会議員に当選してからは相馬さんたちと、対人地雷廃絶の戦いに参加することになった。

その相馬さんが、なぜＭＲＡに参加することになったのか、総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）の研究誌の中で相馬雪香さん、星野進保理事長と私との鼎談（ていだん）から、ご本人の言葉を引用させていただく。

私の（ＭＲＡとの）出会いは一九三八年（昭和十三年）のことです。当時は日本が一体どうなってしまうのかという、とても重苦しい時代でございました。

まず、満州事変が始まった一九三一年（昭和六年）九月十八日、私は父（尾崎行雄氏）と共にロサンゼルスにおりました。ワシントンでフーバー大統領（当時）に会って帰ってきた父が、

「残念で仕方がない。明治天皇以来築き上げてきた日本の信用が失われる」

と言い、私はその時初めて、人間にとって信用が必要なように、国にとっても信用が必要であり、国と人間との結び付きが大切なことであると感じたのです。

父は道義的に正しくないからと、満州事変に反対しましたが、日本はそれを受け入れず、「いい加減に黙れ」というような手紙が日本から沢山送られて来ました。一九三三年（昭和八年）年一月に帰国した時には、神戸では尾崎の上陸許さじというようなデモがあったほどです。

その船の中で、たまたま国家主義運動家の北一輝氏らと一緒になりました。北氏は、

「これからは西欧に対してアジアはアジアとしてやっていかなくてはいけない。日本はそのアジアの盟主にならなければならない」

と言い、父は、

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ90

「そんな時代ではない。世界は一つであり、アジアだ西欧だと言っている時代ではなく、世界全体を考えなければだめなんだ」

といった具合に毎日のように議論していました。

そして、同年三月、日本は国際連盟を脱退し、いよいよ孤立してしまう。その時も父は「世界から孤立したらだめだ」と盛んに言いましたが、いくら何を言ったってどうにもならないやるせなさがあったようです。

相馬（旧子爵　相馬恵胤氏）と結婚したのが一九三七年（昭和十二年）。古い伝統を持った相馬家に入ったものですから、朝から晩まで、すべてがカルチャーショックでした。でも、日本の国を変えるためにはここ（家庭）から始めなければと思っていましたし、そればかりではなく、相馬に対しての愛情もありましたので、何とか頑張ろうとしたのですが、どうにもならないのです。

そのうちに子どもが生まれようとする。この子が生まれて六年たてば、国民学校に行かなければならない。国民学校に行けば、「世界に冠たる大日本帝国は」ということを教わる。

私はそんなことを自分の子どもに教えられない。世界の中の日本であって「世界に冠たる」という思想はとても受け入れられない。でも、いくら私が受け入れられないと言ってもどうにもならない。どうしたらいいか分からなくて行き詰まっていました。

そんな時にたまたま、アメリカから来たＭＲＡの人と会い、話をしました。話をしていくうちに、私は人のことばかりを悪いと責め、怒るものの、状況は何一つ変わらないことを認め、人を変えるにはまず自分が変わらなくてはならないことを悟りました。

自分が変わるには、「信じようが信じまいが、神の意志に従って生きるということから始めるのです。それには『四つの絶対』の標準――絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛という物差しに照らしてまず自分の間違ったところを見てみる。そして静まって、自分の心の中に何か響いてくるもの（ガイダンス：ひらめき、心の中の声）を感じたら、それを書きなさい」と言われました。確かに、結婚してみたものの、自分にはどうにもならない。国もどうにもならない。家庭もどうにもならない。もし、それが突破口になるのならやってみようかと思ったのです。

まず、これだけはできないということがあったら、それを捨てよと言われました。そこで、生活環境の全く異なる家に、大咬呵を切って嫁いだものの、どうにもならず、この結婚生活がだめになったら自分の面子がつぶれると思いましたが、面子なんかつぶれても構わない、神が私にこの家から出て行けと言うのなら、即座に出ようと決心したのです。その覚悟でやってみることにしました。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ92

すると不思議なことに、「be a better wife」（より良い妻になれ）という言葉が出たのです。彼のためや日本の封建制の中で言うベターワイフだったら冗談じゃない、御免こうむると思いましたが、世界を変えるための、そういう新しい意味でのベターワイフなら、確かに今の自分はあまりグッドワイフだとは思わないからやってみようと思ったのです。それが私のＭＲＡとの最初の出会いです。

それ以来、毎朝瞑想して、その日に自分のすべきことは神が与えることだと思って生活してみたら、毎日の行動が少しずつ変わってきました。それから、いろいろなことがありまして、一九三八年（昭和十三年）の暮れ、アメリカからＭＲＡに以前から関与しているビルマ人のマ・ニエンタ（愛称ママー）という女性教師が一カ月間来日し、私はその間通訳を務めました。彼女は非常に精神的な人で、私は彼女の影響を大変受けました。そのころの私は、瞑想（ガイダンス）といっても半分眉唾で、どんな答えを出そうかしらと思いながら行っていたのです。

一九四一年（昭和十六年）一月、私の主人は召集で満州の牡丹江に行き、四三年（同十八年）に職業軍人でない人たちの家族呼び寄せが始まりました。私たちはその第一号になり、主人から「牡丹江へ来い」という手紙が来ました。来いと言っても、姑も祖母も同居しておりましたので、私が決めるわけにはいかないと思い、まず姑に聞いてみますと、姑は祖母に聞きなさいと言う。

私は主人に祖母宛に手紙を出してくれという手紙を出したのですが、主人から自分で決めなさいという返事が来たので、ガイダンスで決めることにしました。すると、ガイダンスは「すべてを祖母に託すこと」でした。

そこで祖母にお伺いをたてたところ、

「男が戦場に行くとき、奥方がついて行くものではないと私は思っています。ついて行く女はほかにいるはず。けれども今は時代が違っている。即答はできないので一週間時間をください」

と言うのです。

その一週間は、私は自分の運命を祖母を託して、何でもそれに従う覚悟でした。一週間後、お返事をいただきに参りますと、

「自分の常識では判断できない。けれどもあなたは私の言うことを素直に聞いてくれると思うので言います。あなたの判断でなさい」

と言われたのです。

そう祖母が言ったのには理由があって、私がＭＲＡと出会った当初、自分がいかに自分本位であったかを知り、周りの人にとにかく謝った時、祖母に

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ94

「今まで表面的には頭を下げていましたが、心の中ではいろいろ批判申し上げておりました」

と素直に言ったのです。祖母は多分驚いたのでしょう。その時は何も言いませんでしたが、多分その時の影響があると思うのです。

祖母から許しが出たので、三人の子ども（三歳、二歳、五カ月）を引き連れて満州へ参り、二年近くいたのですが、一九四四年（昭和十九年）の暮れ近くになると、物の配給が増え、毎日のように飛んでいた飛行機が見えなくなり、どうも様子が変なのです。

私は日本が負ける日がそう遠くないことを感じ、負ける時にここにいることが正しいか正しくないか、主人と二人でガイダンスで決めようということになりました。すると二人とも、私が子どもを連れて日本へ帰るべきだという答えが出たのです。無事に私たちは日本へ帰ることができました。このように、ガイダンスに従うと自然に道が開けるのだなあと思いました。

そして、一九四六年（昭和二十一年）、アメリカからＭＲＡの人が来日したのをきっかけに、日本でもＭＲＡを始めようではないかという動きが始まりました。

（ＮＩＲＡ政策研究［1997, Vol. 10, No. 1］平成九年一月二十五日発行『予防外交――和解の世紀を目指して』より引用）

日本の国際社会復帰の橋渡し

相馬さんはこうしてＭＲＡに参加するようになったわけだが、戦争直後に一つの大きな仕事を達成することになる。

当時の日本は共産党が台頭し、同時に、マッカーサー将軍がレッド・パージ（赤狩り政策）を採用する不安な時代でもあった。一九五二年のメーデーでは皇居前の広場で血が流され、階級闘争が当たり前のこととして受け入れられ、ストライキが頻繁に行われていた。

こうした最中の一九四八年だったが、数名がロサンゼルスで開かれたＭＲＡ大会に招かれ、翌一九四九年には、片山哲夫妻と、毎日新聞の記者がスイスのコーで開かれた大会に出席したのである。

一九五〇年の二月には、ブックマン博士の要請で、バーゼル・エントウィッスル氏とケン・トウィッチェル氏が来日した。

二人は吉田茂総理をはじめ、日銀総裁一万田尚登氏、東芝社長石坂泰三氏、石川一郎氏ら実業界の主だった人と会見したほか、毎日、朝日、読売の各杜が個別にレセプションを開くなどして、一般の関心は高まった。

その結果、スイスのコーで開かれる世界大会に日本の代表を送ることになり、国会議員、

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ96

産業人、労組代表、広島、長崎の市長など、七十名あまりの参加が決定した。その中には、石坂泰三東芝社長、早川愼一日本通運社長、中曽根康弘代議士らが加わっていた。

この計画の事務全般の仕事をしたのが相馬雪香さんと夫の恵胤氏で、通訳やら旅行の手配やらで、信じがたいほどの貢献をしている。また、当時は円をドルに替えることなどはできない時代だった。

吉田茂首相がじきじきマッカーサー将軍に交渉したものの、原則はまげられないとの答えだった。計画が頓挫する数日前、アメリカの篤志家が一行の旅費を寄付したくれたことから実現した、まさに奇跡の出発だった。

当時はまだ日本航空もなく、フィリピン航空機をチャーターして六月に出発した。プロペラ機で三十数時間かけてコーに滞在した一行にとっては、混乱した日本を立て直す方法を探る絶好のチャンスだった。その後一行は、ドイツとフランスに向かい、さらにアメリカに渡った。

私がＭＲＡ時代に訳した著書『日本の進路を決めた十年』の中から、アメリカでの一行の様子を引用してみよう。

ニューヨークのスケジュールのハイライトは当時ロング・アイランドのサクセス島にあった国連本部への訪問であった。一行を迎えたのは、長い間事務総長を務め日本を初めて国連加盟に誘ってくれたトリビイ・リーであったが、日本は講和条約調印までは国連からしめ出されていたのである。北村徳太郎議員はそれに答えて次のように述べた。

「きょうここを訪れた日本人は、われわれが極東でひき起こしたトラブルを深く恥じいり責任を痛感しているものですが、国連が平和維持のためにとっている速やかな動きに感謝するものです」

ワシントンでの一行には、日本を代表してアメリカの政府や政党の指導者、そしてマスコミを通してアメリカ国民に直接話しかける機会が与えられた。

やや不安そうな面持ちで国会議事堂に到着した一行は、副大統領でケンタッキー州選出のアルベン・バークレー上院議員の事務所に案内された。彼は一時的に中断している日米両国間の長い友好関係に触れ、この関係が「ただ単に復活するだけでなく永遠の存在としての位置づけとなってほしい」と述べた。続いて民主党二人共和党二人の議員が演説した。外交関係委員長のトム・コナリー、バーモント州のラルフ・フランダース、ヴァージニア州のウイリス・ロバートソンとアレックス・スミスである。続いてバークレーは栗山長次郎議員に吉田首相の代理として上院で発言するよう招いた。西山千が、

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ98

日本代表団をアメリカ議会で迎えるバークレー副大統領（左から2人目）とアレキサンダー・スミス上院議員（左端）。北村徳太郎議員（右から2人目）が下院で、栗山長次郎議員（右端）が上院でそれぞれ演説した（1950年）

見事な通訳をした。

「ほぼ一世紀にもわたる両国間の友好関係を日本が破ってしまったことは誠に遺憾であります。われわれが犯した、かような失敗にもかかわらず、寛大なアメリカは日本を許し、日本の存続を認めるだけにとどまらず、復興の助けを担っておられます」

「北朝鮮の無法な侵略はまたしてもアメリカを大きな犠牲に巻き込んでいます。日本としては国連のとった行動を心から支援するとともに、トルーマン大統領の勇気ある指導性に高い敬意を払うものです。日本もアメリカとの協力関係においてなんらかの形でお役に立ちたいと思います」

ニューヨーク・タイムズ紙は栗山の謝罪を社説で次のようにとりあげた。

「ワシントンでのこうした出来事が広島と長崎に原子爆弾が投下されてからわずか五年足らずに起きたのである―一行の中には広島と長崎の両市長も含まれていた。彼らの方でも許すべき何かを感じてくれたとすれば、それは大変な奇跡といえよう。現在の暗闇を抜けてすべての人類が兄弟となりうる明るい未来を垣間見る思いがした」

サタデイ・イブニング・ポストという雑誌の論説も栗山の演説を引用し、次のようにしめくくっている。

「『自分の国はいつでも正しい』といった観点からものを見がちなアメリカ人にとってこのような心の動きを理解することは難しいことだが、自分の失敗を認めるというこの行為は新鮮な衝撃を与えてくれた。具体的な影響としては、私たちが聖書に誓って感じたよりも柔軟な感じを日本に対して抱くようになったことである。アメリカ側にも『あの時確かに間違いだった』と認めてさしつかえない出来事が過去にいくつかあるはずだ」

議事堂をあとにした一行は大統領特別顧問ジョン・フォスター・ダレスやディーン・ラスク国務次官補などに迎えられた。

ワシントンでの最終日には下院が上院の列に倣って史上初めて外国代表を議場内に招

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ100

いた。演壇に招かれた北村徳太郎議員は日本国民を代表して「アメリカ国民に与えた遺憾な迷惑」に対して謝罪した。

傍聴席にはコーに向かう途中のオーストラリアの議員団が座っていた。北村は彼らを見上げ、日本がオーストラリアに対して行ったことに対する深い遺憾の意を付け加えた。彼の演説は大きな拍手でしばしば中断されたが、その終わりに下院議員と傍聴席の人々が一斉に起立して喝采がなりやまなかった。オーストラリアの議員の一人が後にコーで次のように語った。

「日本の代表が、過去に起こした間違い、苦しみ、悲しみを謝罪するのを聞いた時、私が今まで出会ったことのない身の引きしまるような静寂が漂った。歴史の瞬間であった。そしてオーストラリアはこれまで、南太平洋の問題に関してはいつも母国イギリスとアメリカの助けばかりを求めてきたが、これからは太平洋の世界戦略のためにも第三のパートナーが必要であることを認識した」

（『日本の進路を決めた十年』バーゼル・エントウィッセル著　藤田幸久訳　ジャパンタイムズ）

三、自分を変えることで労使のいがみあいを解消

民主的労使関係のさきがけ

同じように階級闘争を超えた新しい労使関係作りの動きも、同著に以下のように描かれている。

一九五一年の夏には、アメリカのミシガン州のマキノ島でブックマン博士を中心にまた世界大会が開かれた。日本からは国会議員数人、国鉄、電電公社、警察関係の人、東芝からは高橋常務と労組の委員長が参加した。

当時、電気産業は基幹産業としてやっと軌道に乗ったところで、組合の攻勢はしれつを極めていた。電気産業が主催したＭＲＡの会合には、東菱、日立、三菱、富士の社長以下多くの人が集まった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ102

日経連タイムス紙は、「東芝の石坂社長が二年前にＭＲＡの世界大会に参加して以来、電気産業はＭＲＡに注目してきた。昨年は同社の高橋常務と組合幹部がマキノで開かれた大会に出席している。戦後、経済と思想の混乱は労使関係に大きく影響しているが、ＭＲＡの考え方は役に立つと思われる」と書いている。

一九五三年のコーでの大会には、国鉄、鉄鋼、セメントの代表とともに東芝も参加し、河原亮三郎勤労部長と山村悦郎労組委員長を送った。

当時の労使は。敵対関係にあり、話し合う空気などはなかった。東芝の河原氏と山村氏の新しい人間関係は、帰国報告会での参加者一同の目を見張らせた。

「私は今まで会社にばかり公正な利益配分を要求したのですが、その自分自身が家族には給料の三分の一しか渡していなかったのです。なんという矛盾したことを行っていたのかと、自分自身を反省しました」

山村氏は率直にそう語った。

「これからは、何が正しいかという尺度をはっきりさせて、労働者の権益のために闘っていきます。もちろん現在進行中の賃上げ闘争もＭＲＡで学んだ精神を生かして闘います」と結んだ。

河原氏もこれに応えた。

「東芝の労使交渉は新しい段階に入りました。労使は信頼に基づいて話し合うのです」

その数週間後、河原氏は会社側を代表して賃上げの提案をした。提案された金額はきわめて小さいものだったが、中央執行委員会は河原氏の言葉なら信用出来るとして、二十二対十二で交渉が可決したのである。

こうした空気は、社員全体のやる気を生み出した。

この交渉の数ヵ月後、前の労組委員長の長谷川盛夫氏は、こう語っている。

「新しい空気が職場にみなぎって来ました。ある工場は毎月八百万円の赤字を出し、閉鎖寸前だったのですが、逆に三百万円の黒字になりました」

こうした新しい動きは他の電気産業にも伝播して行くこととなった。

一九五五年には、労使の対立、階級闘争と私生活の関係をテーマにした劇、『ボス』が各地で上演されている。その上演の席上で当時、生産性本部長に就任された石坂氏は次のように述べている。

「わが社が労組の代表をコーに送ったことは賢明な投資でありました。また、石川島の土光敏夫社長と組合委員長の柳澤錬造氏の協力は他の企業の模範ともいえます。私が生産性本部長を引き受けたのは企業のためだけでなく、全国的規模で協力体制を求めてのことで、ＭＲＡに期待するところが大きい。この劇『ボス』は企業のために役

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ104

に立つばかりでなく、国のためにも得るところが多いことを理解してほしい」と。

一九五八年、エントウィッスル氏は離日することになったが、その送別の席で石坂氏はこう語っている。

「デモクラシーはすばらしいものですが、アメリカのやり方は金魚鉢に消火ポンプで水を入れるようなものです。金魚は目を廻してしまいます。MRAはいい時に来てくださいました」

（『日本の進路を決めた十年』バーゼル・エントウィッセル著　藤田幸久訳　ジャパンタイムズ）

四、日本がリードしたコー日米欧経済人円卓会議

箱根の保養所での国際労使交流

こうした歴史を活かして世界各国の労使が参加するコー産業人会議が一九七三年から開催されている。日米欧の労使ばかりでなく、南アジア、中近東、アフリカなどからの参加者も加わり、特に冷戦終結が近くなった一九八〇年代後半からは、東ドイツ、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアなど東欧諸国からの参加者が増えた。ポーランドの労組「連帯」のワレサ書記長（後の大統領）の側近や、チェコスロバキアの作家ハベル氏（後に大統領）の演劇仲間なども参加するようになった。

日本からは東芝労使が一九七七年から一九九五年にかけて十七回にわたり出席し、日本の労使関係についての経験を紹介してくれていた。この間、近鉄、ジャスコ、日本通運、日産自動車トヨタの労使や労務担当部長などが訪れた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ106

日本企業の工場建設が欧州各地で始まった頃で、日本の労使慣行、終身雇用制度、提案制度などが欧米参加者の関心を呼んだ。労使が一緒に同じテーブルに着くだけでもイギリス人は目を丸くしたが、食堂でビュッフェの列で待たされているときに、先に並んだ経営者側の人が、料理を労組側の人の分まで一たん自分の皿の上に取った上で、その半分を労組の人の皿に移し変えている仲の良い姿には仰天していた。

夜の余興やかくし芸大会で労使が浴衣を着て盆踊りなどを踊り、大喝采であった。

いつもスーツで、大きなかばんを持ち、冗談も通じないと思われていた日本人が、自分たちと同じ人間だと感じてくれたことが大きかったわけである。

とうとう、そうした日本の工場や労組活動を自分の目で見てみよう、ということになり、日本でも産業人会議が開かれるようになった。この日本側の中心が、東芝の高瀬正二専務、矢野弘典労政課長（現在、日本経団連専務理事）と労組の河野一義委員長などであった。

会議は箱根の東芝、国鉄、日本通運、朝日生命などの保養所を借りて行われ、外国人用に作られた浴衣を着た参加者が箸の使い方を習い、お風呂での裸の付き合いをする頃には、良き友人としての信頼関係が出来上がっていた。工場見学や通勤電車を使っての家庭訪問なども外国のゲストにとって忘れ得ぬ経験となった。

日本叩きから日米欧の企業倫理基準の作成に

一九八五年、私は毎夏コーの産業人会議でお会いしていた、オランダの世界的電機メーカー、フィリップス社のフレデリック・フィリップス元会長からの「日本のまやかしの微笑」（ＮＲＣハンデルスブラッド紙五月八日付）という一面大の記事を受け取った。鎧甲の武士が地球儀に斬りつけた返り血で、真っ赤な日本列島を描いた風刺画入りである。「権力の要塞・通産省」と結託する日本の電機業界が、「ダンピング、標的戦術などを駆使して欧米企業の破壊を狙っている」とするフィリップス社の重役をニュースソースとする記事である。「日本は、カラーテレビをトロイの木馬に見立てて安値で販売した。日本の消費者はダンピングの資金提供を行った」とある。

「日本に対する友情がゆえに」この記事を送ってきた同氏は、「外から見た日本のイメージを日本人は知る必要があります。イメージは時には事実よりも重要です。実際過去の戦争の多くがそうでした」と、後に朝日新聞の下村満子さんとのインタビューで語っている。

フィリップス元会長は、こうした問題を立場を超えて本音で話し合える場が必要ではないかと提案してこられたので、私は、日本の経営者を回り、フィリップス氏を中心とする日米欧の経済人による「コー円卓会議」（Coax Round Table、ＣＲＴ）に出席してくれるよう勧誘に歩いた。このままでは、日本の経済界が海外から叩かれ、大きな紛争になる可能性を

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ108

心配したからである。当時は、バブル景気が盛り上がり始めた頃で、徐々に多くの企業が参加してくれるようになった。

八六年に第一回会議が開催された。しかしその初日は、欧米参加者による日本叩きの波が起こり、対日不信や恐れの深さが浮き彫りになった。しかし、「まず相手の立場に耳を傾けて問題解決を目指す」というコーの精神が働き、翌日欧米の参加者は「相手に何をすべきかを指図するのではなく、まず自らを正そう」という姿勢に変わった。

そうして翌年、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」を模索し、経済・社会関係に建設的変革をもたらす触媒の役割を果たす」という目的を定め、コーでの本会議と春の中間会議を、日米欧の各都市のほかに、インド、中国、台湾などで開催することになった。

この間、キヤノンの賀来龍三郎会長、松下電器の山下俊彦相談役、日産自動車の塙義一副社長（後に社長）、ニフコの小笠原敏晶社長、住友電工の阪本勇相談役と住友義輝常任監査役などが中心となって活発な交流が続いた。

最初の数年間は貿易黒字を中心とする「日本問題」が中心を占めていた。やがて双子の赤字や競争力強化などの「アメリカ問題」。さらにEC統合、東欧支援、失業問題などの「ヨーロッパ問題」へと議題が変化していった。こうしてつちかわれた連帯意識の高まりに伴い、企業が自らを律し、社会のさまざまな問題解決にあたることこそ、行政や政治の介入を招きがちな貿易摩擦に対抗できる有効な手段であるという共通認識を持つようになった。

コー円卓会議で。（左から）山下俊彦松下電器相談役、藤田玲子、賀来龍三郎キヤノン会長、奈良久爾三菱総研会長、藤田幸久

その結果、異なる価値観、文化、習慣を超えた企業行動の普遍的な基準作りに取り組もうという気運が生まれた。

その結果、九四年七月には「コー円卓会議・企業の行動指針」（Principle for Business）が完成した。

これは、キヤノンの賀来龍三郎会長が提唱した『共生の理念』、ヨーロッパ側が提唱し、企業の従業員の尊厳を強調する「人間の尊重」の精神、また、米国側が提案し、企業は企業を取り巻くステークホールダーズ（利害関係者）

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ110

に配慮して広く地域社会に貢献しなければならないとする「ミネソタ原則」が柱となっている。

この「企業の行動指針」は、イギリスのファイナンシャル・タイムズ紙が「日米欧の経営者による初の行動規範」と報道したほか、国連でも紹介されるなど、高い評価を受け、十一カ国語に翻訳され、発行部数も十万部を超えている。そして、アメリカ、ヨーロッパ、日本だけでなく、タイ、シンガポール、韓国、メキシコなどでセミナーを開催するなどして啓蒙活動を続けている。日本でも経団連の後援によるセミナーなどで普及活動を展開している。その骨格となる一般原則は次の通りである。

原則一　企業の責任―株主のみならずステークホールダーズ全体に対して
原則二　企業の経済的、社会的影響―革新正義および地球コミュニティーを目指して
原則三　企業の行動―法律の文言以上に信頼の精神を
原則四　ルールの尊重
原則五　多角的貿易の支持
原則六　環境への配慮
原則七　違法行為等の防止

また、ステークホルダーズに間する原則は以下の通りである

一　顧客
私たちは、全ての顧客に敬意をもって接することを信条とする。顧客が私たちの商品やサービスを直接購入しようと、あるいは間接に市場で求めようと、この信条に変わりはない。

二　従業員
私たちは従業員一人ひとりの尊厳と、従業員の利害を真剣に考慮することの重要性を確信する。

三　オーナー、投資家
投資家が私たちに寄せる信頼に応えることの重要性を理解する。

四　仕入先
仕入先や協力会社（下請け）との関係は相互信頼に基づくべきである。

五　競争相手
私たちは、公正な経済競争こそが国家の富を増大し、ひいては商品とサービスの公正な分配を可能にする基本的な要件の一つであると確信する。

六　地域社会

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ112

事業活動が行われる地域社会で改革や人権のために活動する団体に対して、私たちはグローバルな企業市民として何らかの貢献ができると確信する。

現在、日本のコー円卓会議部会長を務める日本電気金子尚志相談役は、「社長時代に遭遇した防衛庁事件の反省と世の中への恩返しの気持ちから」（ＣＲＴ部会報告、二〇〇一年一月）この普及活動の先頭に立っている。また、「総会屋事件、談合、増収賄事件、近くは原子力産業、乳業事件、自動車リコール隠し事件、ＢＳＥ（狂牛病）問題等さまざまの社会的不祥事が相次ぐ中で、故意の違法行為は法の裁きにゆだねるが、故意でない不祥事、法知識の欠如や無意識の行動による不祥事をチェック・監査する仕組みを構築することによって激減させることができる。それが、企業が率先して企業倫理活動を展開する意義である」として地道な普及活動を行っている。

五、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」

アメリカのイラク攻撃に反対、が世界の潮流

国会内にはＭＲＡ推進議員連盟（羽田孜会長）があり、ＭＲＡに参加した経験のある議員が集まって、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」をモットーに機会あるごとに勉強会が行われている。落選後の今でも私が事務局長を務めさせていただいている。議員以外の会員も参加できる自由な雰囲気の会である。

一九九七年以来、スイスのコーでは日本側の提唱で「政治円卓会議」が開催されているが、二〇〇二年八月の会議は「人間の安全保障」をメインテーマに行われた。

この会議でまず驚いたことは、伝えられるアメリカのイラク攻撃には、カナダ、イギリスなど、湾岸戦争や二〇〇一年のアフガニスタン攻撃などで常にアメリカに歩調を合わせて来た国々の参加者も含め反対意見の合唱が起こったことだ。唯一イラク攻撃を支持している

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ114

イギリスのブレア首相の野党である保守党の政治家や、タリバン掃討の軍事作戦にアメリカ軍とともに参加しているカナダのアクスワージー前外相からも、アメリカの「単独行動」に対する反対意見が強く出された。「人間の安全保障」の提唱者である、カナダのアクスワージー前外相は、私が取り組んだ「対人地雷禁止オタワ条約」の立役者でもある。

あまりの反米意識の強さに、アメリカの参加者からは、世界の安全を守るという責任と負担を果たしながら、他国との共同歩調をどう両立させるかについて知恵を出して欲しい、という悲鳴も出された。

日本の羽田孜、谷川和穂両代議士からも、武力行使に対する慎重意見が出され、議長声明でも「テロに対する対応は国際法、とりわけ、国際人道法と合致した方法が取られなければならない」と、「単独軍事行動」を否定する表現が盛り込まれた。

テロ対策には、政府による国家安全保障とともに、国連やＮＧＯなどとの連携を通して、貧困、人権抑圧、難民、麻薬、感染症問題など人間の安全保障への国際的な取り組みが急務であることを再認識することができた。

オランダのアルテス元スペイン大使は、自国政府の軍拡政策に反対して大使を辞職し、以来軍縮活動に専念している。世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）の名誉会長も務め、宗教間対話も積極的に行っている。アメリカによる宇宙軍拡戦略が全人類に対する脅威になること

を警告していたが、この点は、ジュネーブでお会いした猪口邦子軍縮大使も指摘していた。

「二〇〇一年のエンロン事件に始まった企業の不祥事は、グリーンスパン連邦準備銀行議長が指摘するように『貪欲の汚染』の広まりであり、このままでは自由市場経済システムそのものが崩壊してしまう。九月十一日のテロ事件以上に世界史上の大きな出来事だ」という意見が、複数のヨーロッパの参加者から表明された。

韓国から二人の国会議員が参加し、四月二十九日にＭＲＡ国会議員連盟が超党派の五十五人の国会議員の参加で結成されたとの報告がなされた。特に腐敗防止に取り組むという趣意書が紹介された。日本のＭＲＡ推進議員連盟との相互訪問を計画し、汚職問題などはそれぞれの国内で取り組むとともに、たとえば東チモールなどの問題に共同で取り組もうという意見交換がなされた。

韓国の議員連盟の中心人物である柳在乾議員は、

「韓国では政治家は〝嘘つき〟であり、〝正直でない〟というイメージが強く、〝政治家〟と〝正直さ〟は両立しないと言われています。そこでこのギャップを埋めなければ国が不幸になると思い、こうした理念を共有する議員で議連を立ち上げた次第です」

と語った。

日本の議員からも、

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ116

「いやいや、日本でもこのギャップは相当大きいです。韓国と同じです」

との謙虚な発言がなされた。

これらの世界の潮流は日本にいると感じられない世界との温度差と時差である。私はこの会議で話し合われたテーマが数年後に必ず日本でも問題になることを目撃してきた。

地球環境問題、難民問題、対人地雷問題、最貧国の債務問題、戦時中の強制労働問題といった地球規模の問題に限らず、エイズ、企業年金制度の行き詰まり、麻薬、十代の妊娠、狂牛病問題など日常生活に関わる問題もある。日本には無縁だと思っていた問題が必ず日本にもやってきている。むしろ取り組みが遅かったために日本のほうでより深刻な問題になっていることもある。

日本が世界の孤児にならないように、私はこの世界との温度差と時差を縮める架け橋役を果たして行きたいと思う。これは内政か外交かの違いではなく、物事の本質に関わる問題なのだから。

議席を失うことを恐れぬ政治

それには、「誰が正しいか」ではなく、「何が正しいか」ということに、一人ひとりの価値基準を置き換えたときに、初めて民主主義が持つすばらしい機能が発揮できるに違いない。

ましてや、「自民党こそ正しい」「民主党こそ正しい」「小泉さんがよい」「菅さんがよい」などという次元の問題ではない。「命を守るために自民党はどういう戦いをしているか」「経済の安定のために民主党はどういう政策を持っているか」「人権を守るために小泉さん、あるいは菅さんは何をしているか」という基準が大事なのではないだろうか。

そんな意味では、昨年の民主党の代表選挙をめぐる、党内のゴタゴタは目に余るものであった。やむにやまれず、私は以下のようなアピールを全国会議員に送った。

「議席を失うことを恐れぬ代表選挙を」

民主党国会議員の皆さんへ

前衆議院議員
藤田　幸久

落選後二年間地元での活動に専念している立場から、最近の民主党代表選挙を巡る国会議員の皆さんの動きについて気になることがありますので、以下敢えて批判を恐れずに直言させていただくことをお許し下さい。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ118

一、国民が愛想をつかした自民党の癒着政治に代わる総理候補を選ぶのが、今回の重要な民主党代表選挙である。しかし、代表選挙を巡る民主党の動きは、「学級委員選挙のようなドタバタ劇だ。足の引っ張り合いで、安心して政権を任せられない」と国民の多くに映っている。最もほくそえんでいるのは自民党で、民主党の自滅を心待ちにしている。

二、「鳩山さんでは小泉さんには勝てないし、優柔不断だ」、「菅さんの人柄ややり方は虫が好かない」、「横路さんでは思想が違うし、時代の後戻りだ」、「若手の候補に総理が務まるはずがなく、政権奪取をあきらめる敵前逃亡だ」といったレベルでのやり取りが、国民にはしらけて見える。

三、民主党は自民党に比べて、従来の政治家にない若さ、しがらみのなさ、政策能力、新鮮な経歴など多くの比較優位を持っていながら、それが活かされていない。むしろ、小利口な若年寄が談合を重ねているように見える。

四、その根本原因は何か？　それは、「誰を担ぐことが自分の次の選挙に有利か？」という思惑が強すぎるからだ。これでは、民主党は選挙互助会になってしまい、世論の浮き沈みの度に代表を入れ替え、選挙区事情の変化に伴い政党を渡り歩かなければならない。

五、役所の高慢さ、銀行のあくどさ、（自民党）政治家のいやしさを知り尽くした国民は、それを打ち破る代替勢力を渇望しながら十年間も裏切られ続けた。多くの国民自体もエゴと閉塞感にはまっており、この癒着とあきらめの構造を覆すには、政治家自らが保身を捨てて命懸けで当たらなければならない。

六、そもそも、一九九六年の（旧）民主党結党の理念は、「議席への執着から解放され、自らを高め、選挙を恐れず信念に基いて行動すること」にあった。しかし、レゾンデートルであるべき「市民政党」が、「もう一つの永田町的政党」と化していないか？

七、代表選挙は、「自分の選挙のために誰が正しいか？」ではなく、「国民のために何が正しいか？」の姿勢で臨むべきだ。そのためには、とりわけ国会議員が議席を失うことを恐れずに改革を担う覚悟を固めることである。これができれば揺るぎなき団結が生まれ政権交代も遠くない。仮に石原新党が出来ても右往左往する必要もない。逆に、これがなければ、一時期政権に就いても直ちに自壊してしまう。

八、そもそも、信念と実力があれば、仮に落選しても自分の得意分野でいくらでも活躍でき、必要ならば次の選挙で戻ってくればよい。落選してもタダの人にならないのが民主党の議員であろう。

九、小泉総理の目くらましと真紀子人気が国民の政党離れを引き起こした今、最早目先

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ120

の人気取りでは通用しない。小利口でない覚悟と信念を固めて団結力を国民に示すしかない。代表選での激しい議論を通して、異なる立場や世代を超えた相互信頼と団結と統治能力を示すことである。それが、自社さ、自自公、自公保、小泉・抵抗勢力の連立で延命し、自・石原新党で更なる延命を謀るかもしれない自民党にとどめを刺す道だ。

十、その原点は政治家一人一人が自らを捨てることが出来るか否かにかかっている。

以上は私の私見です。ご批判ご意見など賜れば幸いです。（二〇〇二年八月二日）

六、宗教間対話と世界宗教者平和会議（WCRP）

一九九〇年の湾岸戦争は、日本の外交や安全保障に大きな衝撃をもたらした。「金だけではなく血と汗も」と迫るアメリカに、日本政府はなし崩し的に多額の戦費負担を強いられながら、国際的にはあまり評価を受けない後味の悪い結末に終わった。しかし、それ以上に私にとっては、日本が変化する国際政治の中で、本質的に対応ができない姿に失望していた。

東西冷戦の時代が終わり、世界各地で緊張緩和や和平の兆しが見られる一方で、人種や民族、宗教の違いによる対立が各地で相次いで起こっていた。

ことにアジアにおいては、紛争や対立が減少することなく、人権抑圧も含めて緊張緩和の流れから取り残されたかの感があった。

これまで人を抑えつけてきた軍事力やイデオロギーや国家による締め付けがゆるむにつれて、個人のアイデンティティーや信条に関わる対立の増加が世界的傾向であり、これを解決

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ122

するには、従来の政治、経済、外交面などの対応とは異なる次元での、人の考え方や生き方そのものに関わるアプローチが必要ではないか、と私は考えた。

「ソング・オブ・アジア」で学んだように、世界の四大文明や四大宗教、多くの聖人や預言者が、紛争や対立を多く抱えたこのアジア大陸で生まれているのは不思議な巡り合わせだ。人種や民族、宗教間の対立を和解へと転ずる鍵がアジアにあるのではないか、との問いかけが生まれた。

ある朝、私は、アジアにあって、自らの立場を超えた融和や共生を、平和的に実現しようと行動している世界的な精神指導者四名の存在に気づいた。四名に共通する「あくまで行動する非暴力を貫き、寛容と忍耐をもって和解に尽くす」というアプローチこそ、さまざまな紛争や対立を超えて平和と新しい秩序をもたらす普遍的な答えにつながると強く感じた。宗教は異なるが、生きた信仰に裏打ちされた四名に共通する行動哲学とモラルが、アジアを超えて全人類を結ぶ橋渡しのように思われた。

この四名を日本に招き、こうした動きを日本から世界に発信することによって、共産化も、植民地化もされず、戦後「平和の受益者」としての恩恵を受けつづけた日本が、「平和への貢献者」へと転換を果たす一助にしようと思った。

四名の方々に私が個別にお会いしてこの構想を説明すると、全員が即座に快諾して下さった。直前に来日できなくなったダライ・ラマ十四世を、私は亡命先のインドのダラム・サラにたずね、ビデオ・インタビューによって参加していただいた。

これまで一堂に会したことのなかった三名は、来日以来、まるで長年活動を共にしてきた同志のようになごやかなチームワークで多くの方々に接して下さった。関西経済連合会、大阪商工会議所、関西宗教人グループ、世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）日本委員会、外国人特派員協会、経済団体連合会と続いた会合では、その都度まずダライ・ラマ十四世のビデオが上映され、それを補完するように三名の話が続いた。

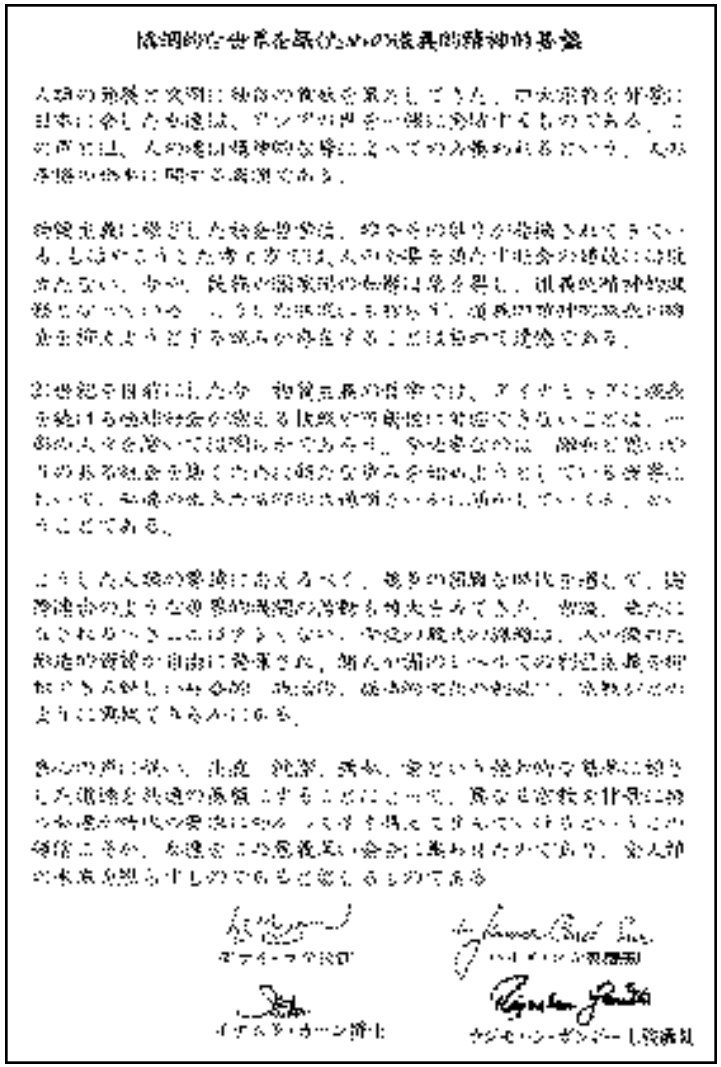
一九九一年十一月二十七日、東京でＭＲＡ国際シンポジウム「平和と新秩序、アジアの貢献」が開催され、この三名に加え、日産自動車石原俊会長、作家の曽野綾子さん、東大の樺山紘一教授が出席した。

この模様は、ＮＨＫ教育テレビの金曜フォーラムで放映されたほか、「宗教が語る世界の平和〜アジアから人類へのメッセージ」というタイトルでＰＨＰ研究所から出版された。

また、四名は「協調的な世界を築くための道義的精神的基盤という宣言を発表した。

ダライ・ラマ十四世とラジモハン・ガンジーは、ローマ法王が呼びかけたイタリアのアッシジにおける平和会議の出席者であり、シン枢機卿とイナムラ・カーン氏は、立正佼成会の庭野日敬開祖が創設した庭野平和賞の受賞者である。天台宗の山田恵諦座主が主催した比叡

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ124



国際的な世界を築くための実践的精神的基盤

人類の発展と文明に独自の貢献を果たしてきた、諸大宗教を背景に日本に寄せられた意思は、ヒンズーの声を一緒に響かせるものである。この声は、人の魂は精神的な骨にとへでのみ宿るという、人の尊厳の核心に関する表現である。

物質主義に陥ってしまった社会世界は、絶えずその限りを増幅されてきている。もはやこうした考え方では、人の心を満たす社会の建設には役立たない。中の、民族の国家間の紛争は尽き果て、個人的精神的混乱をもたらしている。しかし、[illegible]

21世紀を目前にした今、物質主義の崩壊では、アイデンティティに根ざした[illegible]

こうした人類の要請に応えるべく、幾多の困難を時代を通して、[illegible]

我々の声に耳を傾け、生命、[illegible]

オアイーラ大使　　ハイメ・ロンカ議長

イブラヒム・ラーン博士　　カジミーン・ダンバー上院議員

山宗教サミットや国連の宗教サミットなども、庭野日敬開祖が中心的役割を果たして一九七〇年に創設した世界宗教者平和会議（WCRP）が重要な役割を担っている。

宗教は決して争いの種ではなく、和解の担い手であるという理念を三十年以上も前に日本から発信し、具体的な宗教交流活動を世界に広げたことの意義は、歴史が高く評価しよう。一九七〇年は冷戦の最中であり、湾岸戦争や同時多発テロ、イラク攻撃など予想だにしなかった時代であるという観点からもノーベル平和賞的偉業であると言っても過言ではない。難民支援と宗教間協力という二つの分野での世界宗教者平和会議との交わりは、私にとって「ソング・オブ・アジア」が模索したゴールにも匹敵するものである。

第四章　地雷ではなく花を

ダライ・ラマ14世に単独会見(写真上)。写真下は左からハイメ・シン枢機卿、ラジモハン・ガンジー上院議員、イナムラ・カーン博士

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ128

一、日本がはじめて遭遇した難民

家、国、肉親、そして命までも失う難民

今、世界中の紛争地域から膨大な数の難民が発生している。

テレビには、仮設テントで暮らす難民たちの姿が、地域紛争が起きるたびに映し出される。

自分の国が戦火にさいなまれたり、あるいは、とんでもない暴君たちによる圧制で、生命の危険にさらされた人々が、命からがら見知らぬ国に逃げ出すことで難民が発生する。家財道具やお金などはほとんど持たずに、しかも国境地帯に数多く敷設されている地雷をかいくぐって逃げてくるのだ。

日本に住んでいる私たちにはなかなかピンとこない。しかし、十万人単位の人々が、あなたの住んでいる町の近郊に、着の身着のままで逃げてきたことを想像していただきたい。彼らは決して戻ることができない。彼らの後ろには地雷原が広がっており、その向こうには暴

君たちの犬に成り下がった兵士たちが、戻ってきた者を皆殺しにしようと待ち構えているからだ。

自分の生活を維持し、家族を守ることに精一杯の私たちが、果たしてこうして逃げてきた大量の難民を、暖かく迎えることができるだろうか。

一時的に食事を提供したり、ごく一部の人々に仮の住まいを与える程度のことはできるかも知れない。しかし、長期間にわたって自国に帰ることのできない人が、大量に私たちの町にやって来ることになれば、まったくお手上げになるに違いない。

数年前まで緒方貞子さんが担っていた国連難民高等弁務官という仕事は、こうした大量の難民を世話する組織だ。世界中で一千万人以上いるといわれる難民の世話をしているのがこの組織だが、いくら国連の組織といっても、限られた数の職員と資金でこれらの難民の世話をするのは不可能だ。しかも国連難民高等弁務官事務所は、逃げてきた人々が嘘をついていないかどうかを認定する仕事に忙殺されている。

つまり、弾圧されたり殺される可能性に直面してるのではなく、自国の外に逃げることでお金を稼ぐことだけを考えている人々も、少なからず、これらの人々の中に混じっているからだ。本当に困っている難民を助けるためには、難民を偽装した出稼ぎ者を締め出す必要がある。無差別に保護し続けたのでは、国連にいくらお金があっても足りないからだ。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ130

したがって国連難民高等弁務官事務所の仕事は、半分がこうした選別作業の仕事で占められる。さらに、難民が逃げ込んできた国の政府との頻繁な交渉も必要だ。どの国も、難民を十分に世話する余裕はない。しかし、事は人命に関することだ。面倒をみるための資金がないと渋る国に対して、人道的立場でなんとか工面するように説得し続けるのも、彼らの仕事だ。

さらに、難民を生んだ国に対して「圧制を止めて、難民が帰還できる環境を整えなければ国際社会のつまはじきになってしまいますよ」と説得し、帰還事業の開始を促すのも大事な仕事だ。

私はこうした難民キャンプのいくつかを訪問してきた。タイ国境のカンボジアの難民キャンプ。ＮＡＴＯによる空爆直後のコソボの難民キャンプ。アンゴラやルワンダの虐殺から逃れてきたアフリカの難民キャンプ、そしてアフガニスタンのキャンプなどである。

国連機関や世界各地のＮＧＯ（非政府組織）が難民の救援に駆けつけているが、一時的な食料や医療の配布が精一杯で、いつになったら帰還できるかわからないという不安定な状態に置かれている難民の精神面、物質面をすべて支えることは困難だ。

特に精神面を支えるためには言葉の壁を乗り越えなければならない。見知らぬ外国での生活を強要されている難民は、極度なストレスにさいなまれている。

さらに忘れてならないのは、こうした難民の大部分が、肉親を亡くすという経験にさらされていることだ。戦火の中で、親や子を亡くし、その遺体を埋葬する間もなく、地雷原を越えて他の国に逃げてゆく。

収入もなく、家屋もなく、乞食同然の生活を他国で強いられる過酷さは大変なものである。その上に肉親を亡くした悲しみと、場合によっては自らも地雷でケガを負っていたり、長い旅と不衛生な環境によるさまざまな疾病にかかっていることも少くない。

難民に冷たい外務省

一九七八年の夏、カナダのＭＲＡの友人でジャーナリストのジョー・ホワイトヘッドから相馬雪香さんと、私のもとに同じ手紙が届いた。

「今、世界が一番関心を持っているのはインドシナ難民の問題です。タイの難民キャンプにはヨーロッパのボランティアが、人道上の立場から支援活動をしています。しかし、その中に日本人はいません。そればかりか日本は同じアジアなのに、難民をわずか二人しか受け入れていません。日本人はどうして冷たいのでしょうか。ベトナム戦争で儲けた日本人の関心は、経済的に豊かになることだけだったのですか。これは恥ずべきことです」

という内容だった。

これを見た相馬雪香さんは憤慨した。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ132

「冗談じゃない。日本人の心は少しも冷たくない。私たちが温かい心を持っていることを証明しましょう」

思い立ったらすぐに行動する彼女は、さっそく外務省のアジア局長を訪問し、行動を起こしてくれるように頼みに行った。

インドネシア難民の救援がいかに大事であるかをじゅんじゅんと説く相馬さんの話を聞いたあと、アジア局長はこう答えた。

「お気持ちはわかりますが、政府には政府の方針があります。難民を受け入れるのは国土が狭いこの国では難しい相談ですが、政府なりに国連に多くの資金を拠出して難民対策に貢献するなどの活動をしています。したがって他人様からとやかく言われる筋合いはございません」

何度説得しても、同じ答えをするばかりで、政府が難民を受け入れるべきであると真剣に考えてくれる様子はまったくなかった。

しかし、政府の壁が厚いからといってあきらめるような相馬さんではなかった。

果たして日本では難民を受け入れていないのかどうかを、柳澤錬造議員に調べてもらった。柳澤さんは、当時国際ＭＲＡ日本協会の理事長で、後に私たち夫婦の仲人を務めてくれた。そこでわかったのは、日本に議会が開設された一八八〇年以来、難民について国会で法案な

どとして取り上げられたことは一度もないということだった。しかし、九州の赤十字の施設で三人の難民を定住難民として受け入れていることがわかった。

そこで相馬さんはカナダの友人に手紙を書いた。

「あなたの数字は間違っています。日本が引き取っている難民は二人ではなく、三人です。しかし、日本が何もしようとしていないのは本当のことです。私がなんとかします。日本人の心は冷たくありません」

一九七九年の夏スイスのコーで相馬さんと私は、マレーシアの難民キャンプを視察してきたというドイツの国会議員と話した。彼は、難民キャンプにおける各国のＮＧＯの活躍ぶりを目を丸くして語り、「まるで援助のオリンピックのようで、本当にすばらしかった」と語った。しかし、その後で、「日本人はどこにいるのか？　という声も行く先々で聞かれた」とも打ち明けてくれた。これを聞いた相馬さんは、「もはや政府を待って行動する時代は過ぎた。これからは市民自らが立ち上がる時だ」と決意を固めて帰国した。

相馬さんがまわりの知人に呼びかけ始めると次々と人が集まってきた。難民について心を痛めていた人が思いのほかたくさんいたのである。しかし、事があまりにも難しい外交にまつわることだったので、自分では言い出せなかったのだ。

こうして、一九七九年十一月二十四日「インドシナ難民を助ける会」という日本で初の難

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ134

民支援の民間団体（ＮＧＯ）が設立された。
しかし、あいかわらず政府の対応は実にお粗末な状態だった。
国会では当時の園田外務大臣が冷や汗をかきながら、
「難民の問題は人道上の問題であり、遅ればせながら関係各省と相談して、明年の通常国会には提出するようにしたい」と答弁し、なんとか対応したいという姿勢を見せた。
柳澤錬造さんが、
「世界各国での難民の受け入れ数を教えてください」
と質問すると、
「アメリカ二万三千人、オーストラリア一万一千人、フランス二千七百人、カナダ千八百人、西ドイツ千三百人です。それに対し、日本に到着した難民は約千九百人ですが、そのうち約千五百人はアメリカなどへ再出国し、現在四百七十七名が滞在しています。そのうち、長期滞在の許可を与えたのは一家族三名です」
という答弁だった。
答弁をした園田外務大臣も、外務省の部下が提出したこの数字を、恥ずかしい思いをしながら読み上げたに違いない。
しかし、その年の暮れには大平内閣が成立し、翌一九七九年の東京サミットでは、難民問

題が取り上げられることになった。
「これで、難民問題が一歩進展する」
一同は時代の流れが変わったことに大きく安堵した。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ136

二、相馬雪香の怒りと全国行脚

国民一人ひとりが一円の募金を

しかし、その期待は大きく裏切られることになった。

相馬雪香さんは「インドシナ難民を助ける会」の事務局の吹浦忠正さんたちとともに、新しく設けられた内閣インドシナ難民連絡調整会事務局へ出向いた。

机の向こうには高級官僚たちがずらりと並んでいた。

当時六十七歳になっていた相馬さんは、父ゆずりの口調でとうとうと語った。

「日本がインドシナ難民を救援しなければ世界から孤立してしまいます。お金と物資を難民キャンプに拠出するだけではだめです。日本人を送り込むべきです。そのためには私たちが現地に行きます。私たちのバックアップをしてください」

しかし、官僚たちの答えは実に冷たかった。

「日本はすでにインドシナ難民対策に必要な資金のうち五〇％を国連に拠出しています。援助は私たちが行います。相馬先生のお言葉はしっかりとうけたまわりました」

民間は余計なことはしないでくれということを、丁寧な言葉で言ったに過ぎなかった。

相馬さんは、その言葉を聞いて、こうなったら自分たちでやるしかないと思ったそうだ。しかし、この困難な事業を展開するための資金のめどはなんとしてもつかなかった。

ある日、新聞記者が訪ねてきて、「インドシナ難民を助ける会」に関して、相馬さんにインタビューをした。

彼女の口からは、自分でも想像のつかない言葉が出た。

「日本人一人ひとりが一円を出せば、それだけで一億二千万円になります。私たちは募金活動を開始します。日本人の心が温かいことを世界に伝えたいのです」

相馬さんの言ったこの言葉が報道されるや、他の新聞やテレビも次々に取り上げ始め、「インドシナ難民を助ける会」の事務局には、次々に問い合わせが殺到した。

一人一円と聞いて、

「一円では少ないと思ったので百円を送ります」

といった本当に小さな額の募金が多く、大部分が千円以下だった。現金書留で届けられるこれらの小額の募金は、時には一日に五百万円を超えることもあった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ138

四カ月後には、相馬さんが新聞記者に語った一億二千万円という募金額が現実のものとなった。

日本人の心が温かいことが、相馬さんの呼びかけによって証明されたのである

この年の暮れに、相馬さんは初めてタイの難民キャンプを訪れることができた。相馬さんは、国会議員に同行を呼びかけた。それに応じたのが、原文兵衛参議院議員（後の参議院議長）と羽田孜衆議院議員（後の総理大臣）だった。

二人の議員を含めた「インドシナ難民を助ける会」の一行は、そのキャンプにいたカンボジアの子供たちの痩せこけた状態を見て、涙した。栄養が足りずに「おなかがへった」と泣くこともできずに、地面にただべたりと座っていただけなのである。

帰国後の活動は目を見張るほどの速さで、迅速に行われた。年明け草々に青年ボランティアグループを組織して、さっそくタイの難民キャンプに送り込んだ。その翌月には、タイの在留邦人が組織したバンコクのグループに二千万円の資金援助をした。このグループは現在の日本国際ボランティア・センター（ＪＶＣ）として発展を遂げ、その後の目覚ましい活動をするきっかけとなっている。

カンボジア、ソン・サン一家との出逢い

一九八〇年二月、私はタイ、バンコックのアマリン・ホテルのロビーに座っていた。タイ領内のカンボジア難民キャンプを訪問したかったが、つてがなく、頼りになりそうな人をそのホテルに訪ねたが、空振りに終わっていたからだ。慣れない状況などでどうしてよいかわからない時には、座って静かに考え、次にどうするかを考えるという習慣を、「ソング・オブ・アジア」で教わっていたので、実行してみると、しばらくそこにいようという考えが得られたからだ。すると後ろから人の話し声が聞こえてきた。欧米人らしい人が、タイの青年に難民キャンプで仕事があるから手伝ってくれないか、と勧誘しているところだった。

しばらくして私は立ち上がり、その欧米人に自己紹介し、新しく日本でＮＧＯを立ち上げたので、難民キャンプに連れて行ってくれないか、と頼んだ。すると、後にジェリー・エイトキンと名乗るアメリカ人は、ビックリしたように喜んで、「実は数日前に日本に立ち寄り、日本のＮＧＯと連絡をとろうとしたが、うまくいかなかった。ぜひ明日一緒にキャンプに行こう」と誘ってくれた。そして、別れ際にロビーのはずれにいたマレーシア人と名乗る男女を紹介してくれた。

翌朝エイトキンは、私が滞在していた安ホテルに迎えに来、スーツケースごと私を迎えて、国境のキャンプを目指した。彼はキリスト教の牧師で、数カ月前から夫人のジュディーと共

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ140

に、教会のＮＧＯで難民支援に専念していた。車中で、私がＭＲＡのボランティア活動をしていると言うと、彼はまたビックリ！　前日アマリン・ホテルのロビーで紹介されたマレーシア人とは実はカンボジア人で、男性の名はソン・スーベール。インドでガンジーの孫と一緒にＭＲＡの活動をしていた、という。そう聞いてビックリしたのは私のほう。ソン・スーベールとは、「ソング・オブ・アジア」の創設者の一人で、劇の中で朗読される「アプサラ（天女）の微笑み」という詩の作者であった。私がスイスで合流する前に亡命先のフランスに帰っていたのだ。

数日間で国境地帯を駆け巡り、バンコックに戻った私は、ソン・スーベールとニューヨーク・タイムズに務める才気煥発なカンボジア人女性とお茶を飲みながら語り合った。ソン・スーベールはパリのソルボンヌ大学を卒業し、考古学を専攻しユネスコの仕事などもしていた。シアヌーク時代にカンボジア中央銀行を創設し、大蔵大臣や首相（一九六八年）を歴任したソン・サン氏の次男であった。ソン・サン氏は、一九七〇年にアメリカの支援を受けたロン・ノル将軍がシアヌーク殿下に対するクーデターを起こすと、その両者の仲介を試みたが失敗し、パリに一家とともに亡命していた。そして、タイ国境に逃れ中国が支援するポル・ポト派と、ベトナムの支援でそれを追い込むヘン・サムリン政権の板ばさみにあっている民主主義勢力の代表として、一九七九年末にはクメール民族国民解放戦線（ＫＰＮＬＦ）

というレジスタンス組織をタイ・カンボジア国境に作ってその議長に就任していた。中国やベトナムの共産勢力に代わる第三勢力として、ＡＳＥＡＮ諸国やアメリカ、西ヨーロッパ諸国が支援する形にはなっていたが、西側諸国はそれぞれの思惑や主導権争いもあって中途半端な支援に終始することになった。

それに比べ、四人組以来の関係を持つ中国や、木材や宝石の利権を支配するタイの軍人などはポル・ポト派を支援し、シアヌーク殿下に六十室もある邸宅を提供している北朝鮮は同殿下を支援し、ソ連の後押しを受けたベトナムがプノンペン政権を実質支配しているため、第三勢力への支援は弱められてしまった。

そんな中、シアヌーク派、ソン・サン派、ポル・ポト派の反ベトナム三派は、民主カンボジア連合政府（三派連合）を結成し、ソン・サン氏が首相に就任した。汚職にまみれた政治家が多い中で、ソン・サン首相は「カンボジアのミスター・クリーン」と呼ばれた清廉な政治家であった。また彼が戦前神戸を訪問中に生まれた長男をコーベと名づけたが、そのコーベが（一九六八年に）交通事故で亡くなると、これは公職を辞すべきだとする仏様の教えだとして首相を辞したほど敬虔な仏教徒であった。後に彼の政党を仏教自由民主党と称したのも、彼の深い信仰に根ざしたものである。一方、シアヌーク殿下の下で中央銀行総裁を務めていた時、彼は総裁と大蔵大臣を兼務するよう要請されたが、この両ポストは必ず敵対する

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ142

ポストなので同一人物が兼ねるべきでない、として固持したように、芯の強い政治家でもあった。

三派連合首相として来日するたびに、私がアポイントをアレンジしたり、通訳として同行して、国会議員、マスコミ、経済団体、NGO、宗教団体などを回った。同じくMRAで知り合い、国民的人気のある野党党首のサム・レンシーや後に国会副議長を務めたソン・スーベールに対しても同じお手伝いをしてきた。長身の細い身体で、品のある学者のようなソン・サン首相からは、家族ぐるみの付き合いをさせていただいたき、多くのことを学ばせていただいた。

しかし、動乱が続くこの国にとって、これらの人々の出現は早すぎたのかもしれない。カンボジアでは和平が成立した一九九三年以来三度の総選挙で、常に野党の候補者や支援者がフン・セン首相側の仕業と思われる政治テロで命を失っている。ミャンマーのアウンサン・スーチーさんも含めまともな人々が活躍できるアジアの支援にこそ、日本はもっと力を注ぐべきだと思う。

昨年、友人のカンボジアのオム・ラザディー国会議員が白昼暗殺された。詳細は不明。シアヌーク国王やラナリッド殿下（国会議長）の側近でありながら、腐敗していない数少ない硬骨漢であった。

カンボジア連合政府ソン・サン首相と土光敏夫国際MRA日本協会会長（経団連会長）との通訳を務める

MRAの国際会議にも度たび参加し、国会の外交委員長として世界中に多くの友人を持っていた。一九九七年のフン・セン首相によるラナリッド殿下に対するクーデターの際にも、海外出張先からの帰国を拒んで武力行使に対する抗議を行い、スイスのMRA政治円卓会議でも論陣を張った。

それにしても一九九三年の和平後も、この国では政治テロが後を絶たない。前回一九九八年の総選挙でも二十人近くの候補者が暗殺された。警察、軍、裁判所、マスコミを牛耳る与党人民党の関与や容認がなければ起こりうるはずがない。

日本政府はこうした状況にはあまり

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ144

口を出さずに、フン・セン首相との蜜月ぶりを続けている。かつて日本政府が入れ込んだフィリピンのマルコス大統領、インドネシアのスハルト大統領、インドのインディラ・ガンジー首相などの独裁政権が、もろくも崩壊した轍を踏まないで欲しい。

カンボジア難民援助の始まり

かくして難民キャンプ訪問とソン・スーベールとの劇的出会いを通じて、一九八〇年代の「難民を助ける会」のカンボジア支援は、ソン・サン派系が管理するソク・サン村、スロク・スラン村、そしてサイト2の医療、車椅子、食糧、衣類、衛生、住宅建設、職業訓練などのプロジェクトを中心に進められた。最も一般難民が多く、政治的制約を受けない形で人道支援ができたからである。この間日本の難民支援NGOは質の面でも数の面でも大きく飛躍し、カンボジアは日本のNGOの教育現場として大きく貢献した。

相馬さんたちが先駆けた努力は、日本のNGO（非政府組織）の発展に大きな力となったわけである。

NGOという言葉は、今では誰でも聞いたことがある言葉になっているが、その実態を知っている人は意外に少ないと思う。

文字どおり英語にすれば、ノン・ガバメンタル・オーガニゼーションで、非政府組織と訳

すしかないが、民間の力で主に国際協力や海外の難民支援などを行う組織のことである。

NPOという言葉も最近よく聞かれるようになってきたが、こちらのほうは、非営利組織（ノン・プロフィット・オーガニゼーション）という意味で、主に国内で活動する福祉、環境、文化などの分野などで活動する団体を指す、幅広い意味を持った言葉である。

簡単に言えば、NGOは国際活動をするNPOということになり、NPOは企業のような営利を主目的としない団体全体を指す言葉だと言えよう。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ146

三、森進一さんと「じゃがいもの会」

「世の中のお役にたてよ」とおふくろさん

一九八四年、歌手の森進一さんから「インドシナ難民を助ける会」の人と話をしたいという連絡があった。仲立ちをしたのは、当時総理大臣だった中曽根康弘さんである。

中曽根事務所に出向いて、森進一さんと会った難民を助ける会の吹浦忠正さんに対し、森さんは、

「今、アフリカで多くの人が飢えています。なんとか助けたいのです。協力してください」

と熱心に話し始めた。

芸能人を集めて武道館で公演し、寄付金を集めてそのお金を「難民を助ける会」の手で、アフリカの子どもたちに届けて欲しいというのが森さんの願いだった。

当時アフリカ各地で大量に難民が発生し、テレビではおなかが膨らんだり、手足が針金の

ようになった子供たちがテレビに映し出された。顔にとまったハエを追い払う力もない子供たちの映像を見た森進一さんは、幼い頃に貧乏で苦労した自分自身と二重写しになっていたたまれない気持ちになっていたのだ。

優しい彼のことだから、奥さんの昌子さんや子供たちと、家族で泣きながら、アフリカの子供たちの映像を見ていたに違いない。

吹浦さんは最初は芸能人の気まぐれ程度に考えていた。しかし、真剣に語りかける森さんの言葉につき動かされ、協力の努力をすると言って別れた。

このことを相馬さんに相談すると、

「それは面白い。ぜひやってごらんなさい」

という明るい返事だった。

森進一さんが中心となって集まった芸能人は団体の名前を「じゃがいもの会」と名乗った。「じゃがいもの会」によるチャリティー・ショーは大成功を収め、資金集めだけでなく、アフリカの難民の存在を広く全国の人に伝えることにも成功した。

森進一さんは、「難民を助ける会」の機関紙「ＡＡＲボランティア情報」で、柳瀬事務局長との対談で次のように語っている。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ148

母は、女手ひとつで、私と姉弟を育ててくれました。私も小学校の頃から新聞配達や牛乳配達をして母を助けました。長男として社会に出たら一生懸命働いて家族を支えなければという思いはありましたが、なにしろ子どもでしたから「いつかは、門のところまで車で移動するような大きな屋敷に住めるようにするから」なんと夢のようなことを言っていたものです。そうしたら母親が「お前の気持ちはありがたいし、ほんとうにそうなったらうれしいけれど、成功してもお金はそういうことに使うんじゃないんだよ」と言いました。母が言いたかったのは、自分の母、つまり祖母からよく聞かされた話として、成功したからといってすぐに拍手してはだめだ。その人がどのようにお金を使ったかを見極めてから拍手をしなければならない。成功することが大事なのではなくて、どう使うかが大切といったことなのでした。食べたいものも食べられない厳しい生活でしたが、母は「いつか世の中のお役に立てる人になるんだよ」と励ましながら育ててくれました。なんとかして社会にご恩返ししたいという思いが、じゃがいもの会に取り組んだきっかけです。

アフリカ・プロジェクトの立ち上げ

この「じゃがいもの会」の募金をきっかけにアフリカのプロジェクトを本格化しようということになり、私がアフリカに派遣されることとなった。「インドシナ難民を助ける会」も、これをきっかけに一九八四年に「難民を助ける会」（ＡＡＲ）と名称を変更した。活動範囲をアジアから、世界各地へと広げることになった。

「難民を助ける会」がアフリカに進出するので至急プロジェクトを決めてきて欲しい、との要請を吹浦代表幹事から受けたのは、一九八四年七月のことであった。悲惨なアフリカの子供を毎日テレビで眺め、取り組むべき相手の大きさを考えれば考えるほど、「焼け石に水」のような一過性で消える援助ではなく、細くとも長続きする援助を始めたいという思いにかられた。

私はエチオピアやソマリアといった緊急援助的プロジェクトを選ばずに、あえてジンバブエとザンビアに的を絞ることにした。それは、①活動している海外のＮＧＯも比較的少なく、〝新参者〟として担えるプロジェクトの選択肢も広く、かつ他のＮＧＯから学ぶ機会も多い。②難民救済と地域開発や地元への還元とを同時に行いやすい国である。③政治的にも安定しており、未経験の日本人にも活動しやすい。といった理由である。

初めてでかけるアフリカ二カ国のプロジェクトを、たった十二日間でまとめねばならないというこの難しいミッションには、初めから幸運が続いた。それはアフリカへの途上でスイスのＭＲＡアフリカ会議に参加でき、またジュネーブの国連難民高等弁務官（ＵＮＨＣＲ）

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ150

本部とさまざまな打ち合わせをすることができたことである。このアフリカ会議では各国の参加者や友人から難民受入国側が感じる重荷、恐れ、そしてプライドについて生の声を聞くことができ、相手国政府との交渉に留意すべき点を学ぶことができた。ＵＮＨＣＲは訪問国の関係団体や難民キャンプ訪問の手配に協力してくれたが、この窓口となって親切に助けてくれたのが、ＮＧＯ担当で後に駐日代表となったギー・プリム氏である。

九月一日にアフリカの大地を初めて踏んだ私は、順調にジンバブエのトンガラ・キャンプとザンビアのメヘバ・キャンプのプロジェクト構想を練ることができたが、両国政府による「難民を助ける会」プロジェクトの許可、とりわけボランティアの受け入れが最大の難問として立ちはだかった。アフリカの中ではかなり安定した両国とはいえ、植民地支配や内戦等を経て、外国人の参入に抵抗がある上、自国民の雇用創出が重要課題であった。アフリカ特有の甘えや官僚機構の既得権もあって、難民への財政支援や現物寄付は大歓迎するが、これまでなじみがない日本人ボランティアによる直接参入には警戒感が持たれた。

私は、政府当局者との交流において、「隣国の苦しみを助けているお国の努力に側面から協力し、その姿から学ぶ機会を日本の青年に与えていただきたい。「難民を助ける会」設立の理由の一つは、日本人の教育にもある。商売が目的ではなく、謙虚に学ぶ気持ちと技術を持った青年たちを送りたい。また難民救済活動を通してお国の国民生活にも貢献できること

を目指したい」と訴えた。

こうしたメッセージを最も真剣に受け止めてくれたのが、十年来のジンバブエの友人アレック・スミスである。アレックは白人少数政権を率いたイアン・スミス首相の息子として生まれながら黒人への謝罪を通して黒人との和解に努め、父スミス首相に黒人多数政権への移行を受け入れさせた「ジンバブエ無血独立」の立役者の一人であった。難民問題を担当する労働・人的資源・社会福祉省が外国人ボランティア受け入れを拒んでいることを知った彼は、私を同省の次官に引き合わせてくれた。黒人女性で学究肌の同次官は、人種を超えて培ったアレックへの信頼と、新しい国づくりは外国との開かれた協力と交流にあるという理念から、「難民を助ける会」の受け入れを認める英断を下してくれた。同じ日に会ったムガベ首相夫人からも「融和の精神を援助に生かして欲しい」との言葉をいただいた。こうしてジンバブエでのプロジェクトが始まったことにより、「難民を助ける会」はそこを拠点にザンビア政府との交渉も速やかに進めることができた。

多くの周辺国から難民が流入するザンビアでは、難民キャンプが四方の国境地帯に散在し、交通機関や道路も悪く、滞在期間も限られていたため、小型飛行機をチャーターして駆け足で回った。アンゴラ国境では最新のランドクルーザーも砂地にはまり脱出に三十分以上もかかる程であった。トイレなどの衛生状態も悪いので、最近日本の海外青年協力隊の男のメン

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ152

森進一さんを王子の北とぴあに迎えてコンサートを開催

バーも尻尾を巻いて帰国してしまったとのこと。近年は女性よりも男性の隊員のほうがひ弱になり、帰国するケースが多いと聞かされた。

こうした駆け足でまとめた「難民を助ける会」への提案は、医療施設、水、リヤカーなど交通手段、教育などのプロジェクト等であったが、結局はザンビア北西部のアンゴラ、ザイール国境にあるメヘバ難民キャンプのプロジェクトを行うことが決定された。具体的には「じゃがいもクリニック」、上総掘りの井戸掘り、リヤカー作り、図書館への書籍の寄贈、といったプロジェクトが次々に実現していったことは感無量である。

その後もタンザニア領内のルワンダ難民のキャンプに関するタンザニア政府との行き違いなど、海外でのトラブルがあると事務局長の柳瀬房子さんや吹浦さんから私にSOSが入るのが常で、私の「難民を助ける会」における役割は、海外プロジェクトの立ち上げとトラブル処理、と相場が決まっていた。

ザンビアのメヘバ難民キャンプにおける「難民を助ける会」によるプロジェクトは未だに続いている。おそらく、日本のNGOによる単一キャンプに対する援助の「最長不倒記録」を更新中なのだろう。来年二〇〇四年で二十周年を迎えるわけだから。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ154

四、市民を追いまくる悪魔の武器「対人地雷」

「悪魔の兵器」と呼ばれる対人地雷は、いま世界の七十カ国に六千万個から一億千二百万個も埋設されているといわれる。埋設数が多いのは、紛争の続いたアフガニスタン、カンボジア、ボスニア、アンゴラなどだ。「無差別に相手を狙う兵器」で、兵士も、市民も区別しない。カンボジアのあぜ道やアフリカのたきぎの足元に地雷が潜み、生活の場が地雷原と化している。

中には、チョコレートの箱や、おもちゃの形に似せて作られたものまである。「見えない兵器」「悪魔の武器」と呼ばれる理由で、年間二万人ほどの人が手足を失う被害を受けている。「最も残忍な兵器」ともいわれ、一度埋められた地雷は、誰かが踏むまで犠牲者を待ち続ける。手足を引き裂き、吹き飛ばし、二人に一人は殺され、一人は手足の切断、失明などの重度身障者となる。戦争が終わっても、地雷は人を追い続け、紛争後の復興の大きな障害

となっている。

除去には費用も時間もかかる。訓練を受けた作業員が金属探知棒で埋設位置を探り当て、遠隔装置で一個ずつ爆破しても、年間約十万個の処理にすぎない。全部除去するのに千年かかる、といわれる。

カンボジア難民の支援活動を続けるうちに、地雷の被害にあった人々に対する救援活動が「難民を助ける会」の懸案の一つとなった。大量虐殺を行ったカンボジアのポル・ポト派政権の魔の手から逃れるために、多くの人々がカンボジア西部の国境を越えて、着の身着のままでタイ領内に逃げたわけだが、ジャングル地帯には大量の地雷が埋設されている。この地雷で命を落とした人々も数多いが、命を落とすには至らなくても、手足を失ったまま逃げてきた人々の数もおびただしい。

両腕のない南さんが身障者難民の前で口で絵を描く

そこで、一九八九年に地雷のための救援活動を開始することになった。日本の身障者の方々から提供された車椅子を約六百台、タイとの国境地帯にあるカンボジアの難民キャンプ「サイト2」にトラックで運び込んだ。私に加えて当日は、京都で一燈園という心の教育活動をしている石川洋さんや、大阪の堺市出身の南正文さんという画家が同行してくれた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ156

カンボジア難民に車椅子200台を贈呈

南さんは小学校のときに、肩から先の両腕を電動ノコギリに巻き込まれて切断されて、苦難の人生を送ってきた人だ。ぐれてしまい、学校にも行かず自暴自棄の日々が続いたそうだ。

南さんの人生を変えることになったのは中村久子さんだった。

中村さんは明治時代に生まれた女性で、子供の頃に突発性脱疽（だっそ）にかかり両手両足を切断した。二十歳のときに自活を決意し、両手両足が使えないままに、肩と口で裁縫、編み物、刺繍をこなし、「だるま娘」の看板で、興業の世界に身を投じた。

中学生だった南さんは、中村さんの勇気ある生き方に触発され、身障者にもできることがあることを知り、筆を口にくわえて絵を描くことを開始した。やがて画家として大成し、各地で少年院の少年や、身障者を勇気づける活動をしている。

今回の旅では南さんの息子の順一君が付き添ってくれた。

私たちが難民キャンプに着くと、炎天下車椅子の人たちが並んで、到着を待っていた。

地雷の被害を受けた人々は、何の罪も犯していないのに、二重の苦しみを背負う。地雷による身体上の被害に加えて、まわりの人から差別されたり、やっかい者扱いにされるという苦しみである。しかも、難民キャンプは、一般の社会とは違って、過酷な状況にさらされている。

また皆さんにぜひ知っていただきたいのだが、どこの国でも難民キャンプに住んでいる人は、働くことが許可されないということである。

つまり、難民キャンプにいる大量の難民がその国で働けるような政策を採れば、その国の労働者の仕事を奪ってしまう可能性があるので、働くことを許可していないのである。

働きたくても働いてはいけないというのは大変な苦痛である。つまり、健全な人でも大変な精神的苦痛を伴う難民キャンプで、身障者として暮らすことは、私たちの想像をはるかに超えた過酷な世界なのである。

だから、私たちが車椅子を持って到着したときも、彼らは非常に疑い深いまなざしで私た

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ158

ちを見ていたのである。

ところが南さんは、彼らの前でパレットを開け、それに水を注ぎ、色紙を取り出して肩で踊るようにしながら　水彩画を描き始めた。

暑いので汗だくになりながら、息子の順一君が差し出してくれる水のはいったコップを肩と口ではさみ、その水を飲みながら、また絵を描き続ける。筆と一緒に首から上を動かす南さんの額からは汗がしたたり落ちる。順一君がその汗をすかさず拭き取る。

最初は疑い深い目で見ていた人々も、だんだん身を乗り出すようにして、南さんがいったい何の絵を描くのか興味を示し始めた。十五分ほどで描き上がった鮮やかな日本画を、順一君が皆の前に示すと、すかさず大歓声が上がった。

南さんのパフォーマンスは、キャンプの身障者の人々の心の氷を解かすことに成功した。

モノを持ってゆく援助も必要だが、南さんのように、心を持ってゆくことが何よりの援助なのである。

日本から持ってきた車椅子は、全国の身障者やお年寄り、そしてその家族が贈ってくれたものだった。実は、フランスの人道援助団体が日本の車椅子のようなモダンな作りのものは、道路がガタガタのカンボジアでは問題があるし、修理の面でも難しいだろうとの反対意見を述べていたので、私たちには一抹の不安があった。

しかし、日本からの車椅子に難民の身障者の方々に座っていただこうとお願いするや否や、今まで木製の車椅子に座っていた人々が、両手をテコのように使って、またたく間に日本製の車椅子に飛び移った。そしてくるくると角度を変えながら、記念撮影のためのカメラを構えている私たちに向かってきた。軽い車椅子を自由自在に使うことをまるで夢見て練習を繰り返してきたかのように、それは見事な車輪さばきだった。

地雷ではなく　花をください

こうした活動や、難民キャンプでの支援活動の現場で対人地雷の悲惨さに接してきた「難民を助ける会」では、対人地雷の廃絶を内外に訴え、被害者の支援を強化していこうということになった。しかし、その活動のきっかけがつかめないまま、論文集を出そう、シンポジウムや集会を開こう、街頭でチラシをまこうなどという議論が続いていた。そのとき、地雷を踏むのは兵士よりも女性や子供のような民間人がはるかに多い、という対人地雷問題の原点にさかのぼり、地雷で亡くなった子供たちと同じ年代の幼児や児童を読者にし、お母さんたちにも読んでもらえるような絵本をだそう、ということになった。

そこで、提案者である「難民を助ける会」の柳瀬房子事務局長が作者となり、有名な絵本作家で会のメンバーである葉祥明さんが無償で絵を描いてくれることになり、一九九六年九月一

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ160

日に「地雷ではなく花をください」という絵本が自由国民社から出版された。定価は千五百円で、一冊売ると六百円の収益が出る。六百円のお金があればカンボジアで十平方メートル、テニスコート一面分の地雷原の除去ができる。収益金は英国のヘイロー・トラストという退役軍人を中心とした地雷除去専門のＮＧＯによる除去作業の資金として使われることになった。絵本はその後、続編、続々編、ありがとう編と次々に出版され、合計五十万冊以上が売れることとなった。つまりテニスコート約千五百個分の地雷原の除去が行われ、農地や学校の校庭に転換されたわけである。

ライオンズクラブで車椅子をカンボジア難民に届ける

私が属する「東京赤羽ライオンズクラブ」は昨年五月に三十五周年を迎えた。その記念イベントとして、地雷で手足を失った身障者に車椅子を百台贈呈することになり、四月に六名でカンボジアを訪問した。これは、二〇〇一年に筑紫哲也さんなどが出演したＴＢＳの特別番組「地雷ＺＥＲＯ」にカンボジアの十三歳の少女リアちゃんが登場し、自宅近くの道で地雷に足を吹き飛ばされたリアちゃんの屈託のない笑顔に、ライオンズクラブの一人がとりことなり、提案をしたことからとんとん拍子で話が進んだものである。

私は、難民を助ける会などと相談してこの訪問を企画した。まず、カンボジア第二の都市

バッタンバンから十五キロ離れたリアちゃんの村、カンボンレイ村へ向かった。この地域は、かってポル・ポト派が支配し、今でも国境防衛の要所である。さらに、二十二年前ベトナム軍によってタイ国境に追われたカンボジアの難民支援を私が行ったソク・サン難民キャンプの反対側であることが判明し、私は運命の巡り合わせに驚いた。悪路を約三時間、落ちた橋を避けて川を横切り、ぬかるみの中を四輪駆動車で進む。かつてのポル・ポト派の拠点も通過して到着した除去現場はタイ国境からわずか二百メートル。

さらにひどいぬかるみに、とうとうランドクルーザーも動かなくなった。一時間以上遅れて午後三時半にリアちゃんの村に到着した。学校の校庭に九十一人の生徒と幼児十人程が整列して、私たちを待ち受けていた。

テレビで見たリアちゃんは、少し緊張しているのか元気がなさそうだったが、それでも、一行の訪問に大感激の様子。生徒全員に文房具が入ったスクール・バッグを手渡した。これは、プノンペンにある難民を助ける会「キエンクリン・センター」の卒業生の身障者による手作りで、さらに日本から持ってきた折り紙を女の子に、森永キャラメルを男の子に渡した。こんなに遠い所で、こんなに貧しい村で、こんなに喜んでもらえたことに感激したメンバーの目は潤んでいた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ162

「小さな頭と、大きなお腹と、細い脚の国」カンボジア

翌朝プノンペンに戻って、与党フンシンペック党を訪問。シアヌーク国王の弟で、元外務大臣、現在は幹事長のシリウッド殿下の出迎えを受けた。彼とは数年前にスイスのMRA会議で同席して以来親しくしている。元国会副議長で憲法評議委員のソン・スーベールさんも同席してくれた。

シリウッド殿下は、現在のカンボジアの状況を、「小さな頭と、大きなお腹と、細い脚の国」と表現した。「小さな頭とは、ポル・ポト派による虐殺などで学者や知識層が不在であること」。「大きなお腹とは、共産党政権時代からの三千人もの役人と、旧四派の軍の統合からなる国軍が多くの軍人を抱えすぎていること」。「細い脚とは、従って民間の産業や商業活動が育っていないこと」を指している。そして、この細い脚を太く安定させるための技術、資本、そして人道援助の必要性を訴えた。

難民を助ける会「キエンクリエン・センター」での車椅子の贈呈式は、気温四十度の中で行われた。各州から身障者の代表が出席し、車椅子百台を贈呈した。

最後の夜、皆で会食した。清水輝隆さんは、「この国は戦後の小学生時代の日本とそっくりだ」としんみり語り、継続的な支援が必要だと述べた。小さくてもできるところから、と。中山仁さんは、「今回の訪問で人生が変わりました。日本での生活のし方やお金の使い方などについて考えさせられました」と述べた。朝倉正博さんは、視察したカンボジアの一流病院といわれるシアヌーク国王病院の設備のあまりの貧しさにショックを受け、医療機器の支援を始めた。

リアちゃんの村は、水も乏しく、衣服もボロボロ。井戸掘りなども含めて、この村の継続的な支援を行いたいという思いで、一行は帰国の途についた。

カンボジア支援のきっかけとなった、2001年の筑紫哲也氏の番組「地雷ZERO」に登場したリアちゃん（13歳）。右足が義足

第五章　ＮＧＯと政治の橋渡し

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ166

一、鳩山由紀夫さん、菅直人さんと初当選

鳩山一郎総理とMRA運動

友愛運動で知られる鳩山一郎元総理はMRA運動にも賛同していた。労働組合の攻勢に悩まされた西欧の経営者が、まず自分の家庭や職場を正すことによって問題を解決する、というテーマのMRAの劇「ボス」を総理官邸で上演し、国会議員を招いたほか、MRAの創始者フランク・ブックマン博士が一九五六年に来日した際には、天皇誕生日に博士を音羽の私邸に招いている。また、戦後の日本の国際社会復帰への支援に対する功績として、博士に勲二等旭日賞を贈った。

そうした友愛精神とMRA精神とを新しい政党の理念に盛り込もうとしている話を聞き、相馬雪香さんと私は、さきがけの幹事長であった鳩山由紀夫さんを赤坂の事務所に訪ねた。

小さな声で伏目がちに話す姿は、政治家というよりは学者肌だが、癒着政治を断つことの

必要性や過去を克服してアジアとの新しい関係を作る必要性などを情熱的に語ってくれた。政治家でも普通に普通のことが話せる人がいるものだと、学生時代に接した政治家とはまるで異なるイメージに新鮮な驚きを感じた。

その後、加藤シヅエさん、キヤノンの賀来会長、武者小路公秀さん、羽田孜さんなどとMRAのシンポジウムにも出席いただいたりの交流が始まった。一九九六年八月スイス、コーの五十周年記念会議が開かれた際に、幸夫人と長男の紀一郎さんとともに出席した。この夏は、羽田孜夫妻、谷川和穂代議士、狩野安参議院議員、澁澤雅英澁澤博物館館長、市岡揚一郎日本経済新聞論説主幹、星野進保総合研究開発機構（NIRA）理事長など総勢七十人の日本人が出席した。

私は、この五十周年記念事業に向けて、前年に「和解への課題」（An Agenda for Reconciliation）というメインテーマを提案して了承されていた。これは、「国連のガリ事務総長が提案した『平和への課題』や『開発への課題』というプロジェクトが、技術的、形式的になり過ぎて冷戦後の紛争解決や復興援助が上滑りしているのではないか、もっとコーで実現した独仏の和解のような根本での和解が必要ではないか」という私の思いからの出発であった。幸い、日本の総合研究開発機構（NIRA）とアメリカの戦略国際問題研究所（CSIS）という予防外交に取り組むシンクタンクも協賛してくれ、ヨーロッパのMRAもあ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ168

シンポジウム「和解への課題」を主宰。（左から）コーネリオ・ソマルガ国際赤十字総裁、ダグ・ジョンストン戦略国際問題研究所（CSIS）副所長、藤田幸久、星野進保総合研究開発機構（NIRA）理事長

わせて日米欧の共催とすることができた。

羽田孜さんは、日本でＭＲＡの超党派の議員連盟を作ろうと提案し、鳩山さんは、政治家による円卓会議を毎年コーで開こうと提案して帰国し、この二つともすぐに実現することとなった。

帰国後鳩山さんから連絡があり、新党の理念を表している「わがリベラル・友愛革命」という小冊子の英訳をお願いできないか、との依頼を受けた。早速取りかかり、ちょうど桜美林大学客員教授として来日中のラジモハン・ガンジーさんにもチェックしてもらって完成させた。

翻訳をしているうちに、「この作業は、選挙を恐れていて叶うはずがない。ややもすると近視眼的になりがちな選挙民の心に、その人々に洗礼を受ける者が、より遠くを見、視野を広めることを勧めることは容易ではない。しかし、自己を高め、そこに正義を見出し、政治家を捨てる覚悟さえあれば、自然体のまま歴史の変局点で舵をとることができよう」という健気な心情に私は囚われた。「政治家を捨てる覚悟」で改革を目指す人たちを孤立させてはならないと強く感じた。

衆議院選挙二週間前に立候補決断

翌朝、このことについて静かな時間をもつと、新党結成について手伝いたいという思いを直接伝えるべきだというはっきりした考えが得られた。田園調布の鳩山さんの自宅に電話すると、「実は妻の幸も言っていたのですが、藤田さんのような人に衆議院選挙に出てもらったらいいと話していました。奥さんと相談していただき、奥さんの賛同が得られれば、ぜひ出てください」とのことであった。

私は、妻の玲子と相談すれば必ず反対するととっさに思った。実は二カ月前の七月、スイスのコーで日本経済新聞論説主幹の市岡揚一郎さんと玲子と三人でチーズ・フォンドゥーを食べていた。突然市岡さんが、「藤田さんは、ずっと理想に燃えてボランティア活動をして

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ170

きたが、それだけでは世の中変わりませんよ。あなたは国士みたいな人だから、政治にでも出てみたら?」と言ってきた。すると玲子が「そんなことしたら、すぐに離婚します!」と言ってのけたことを思い出したためだ。「お金も地盤もないし」と言うと、「今度は比例という制度もあるし」と市岡さん。私はよく意味もわからないまま、その話題はそこで途切れていた。

翌日、水戸の玲子の実家で、玲子の母親と玲子に、鳩山さんとの話をすると、意外にも二人とも反対せずに、「もう自分の心の中では決まっているのでしょう?」との答えであった。鳩山さんにこの結果を連絡すると、東京の責任者の鳩山邦夫さんと会って選挙区などの打ち合わせをするようにとのことであった。十月十二日告示の選挙に対し、すでに九月十三日のことであった。

上京して邦夫さんに会ったその足で、相馬雪香さんの上野毛の自宅を訪問した。相馬さんは、落ち着いた表情で、「それが、あなたのガイダンスならば全面的に応援します」と言って下さった。二人の子供に相談したら、「お父さん、もし落ちたらどうやって生活していくの?」と聞かれてドキッとしたが、もともと薄給のボランティア活動で貧乏は慣れっぱなし。「大丈夫、なんとか生活はしていけるよ」と安心させると、子供たちもほっとして、僕たちも手伝うから、がんばれよ!」。はっきり出馬が決まったのは九月二十日であった。

東京の近くでは足立区中東部の東京十三区が候補者がいないので、そこを念頭に準備を始めることになった。事務所探しを始め、選挙の経験者を派遣してもらうことを鳩山さんにお願いしながら、バタバタと手当たり次第の準備にとりかかった。

ある日、菅直人さんから電話が入った。実は菅さんとは十五年ぐらいの知り合いである。大学時代の後輩で、武蔵野市議の深沢達也さんが彼の秘書を務めていた関係である。健保連の役員に菅さんをお引き合わせしたり、外国のお客さんをご紹介したこともある。そんな縁で菅さんは私たちの結婚式にも出席してくれた。

菅さんは電話で、「藤田さんは、比例でもいいんだよね?」と聞いてこられた。もともと鳩山さんと話した時に、あまりにも急な出馬で、しかも海外との往復ばかりで地元の活動などしたことがないので、比例の可能性も話に出ていた。そしてその数日後、鳩山さんから電話が入り、「純粋比例でお願いすることになりました」という電話が入った。

九月二十八日、豪雨のような大雨の中で民主党結成大会がホテル・オークラで開かれた。世の中はこうして動くものか、という実感で興奮一杯の大会だった。その足で、相馬雪香さんと、三田の電機連合に向かい、鈴木勝利委員長や今井正弘政治部長、元村英一電機連合東京事務局長にお会いした。東芝労使は、一九七七年から一九九五年にかけて十七回にわたりコーの産業人会議に出席し、日本の労使関係についての経験を紹介してくれていた。鈴木勝

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ172

利委員長は、東芝労組の書記長の時に参加しており、私が通訳もした。有名な刀鍛冶の話から武士道の精神を紹介し、通訳に手間取ったのを覚えている。これ以来数名いる電機連合の改革フォーラム議員連盟に入れてもらい、ずっと支援をいただいている。特に、電機連合東京ではただ一人推薦をいただき、連合東京の組織内候補として支援をいただいている。

十月六日の衆議院選挙告示の直前、民主党の東京比例区の順位が発表になった。

一位：菅直人（小選挙区と重複）、二位：石毛鍈子、三位：鳩山邦夫（小選挙区と重複）、四位：海江田万里（小選挙区と重複）、五位：山花貞夫（小選挙区と重複）、六位：藤田幸久、七位：石井紘基（小選挙区と重複）、八位以下は同一順位。

この結果、予定通り菅直人、鳩山邦夫の二人が小選挙区で当選し、私は、結果的に四位。民主党の東京比例区としては五位の石井紘基さんまでが当選した。

当選後一カ月で党初の外国訪問を実現

十月二十日に当選直後から、民主党という新政党の議員外交の企画・立案を担うという大仕事が回ってきた。その第一弾として、アジア重視の立場から民主党初の外国訪問国として中国を選び、鳩山由紀夫団長夫妻、山花貞夫、大畠章宏、海江田万里、岡崎トミ子、生方幸夫の各氏とともに十一月十六日から二十日にかけて訪問した。私は旧知の中江要介元中国大

1996年の初の選挙で。菅直人さん（中央）、鳩山由紀夫さん（右）と

使のアドバイスを入れて、次世代の指導者との信頼関係作りを柱に組み立て、胡錦涛中国共産党政治局常務委員（現国家主席）、呉邦国副総理などと会談した。結果的に江沢民国家主席の後継者として胡錦涛氏を読み当てたことになり、後に自民党など他の政党も胡錦涛氏との交流を強化するようになった。

従来の政党外交とは一味違った訪問にしようと、私は中国残留孤児の養父母の慰問を企画し、一行は大連のアパートに住む柱栄さんを訪問した。北区田端で、在日中国人による歌劇団、東京中国歌舞団の代表を務める劉錦程さんと揚仁蓮さんが行っている養父母慰問団の支援に私が関わっている経験からのアイデアであ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ174

った。自分の国に攻め入った敵国の親が残していった子供を、我が子のように育てあげてくれた養父母の皆さんは高齢者がほとんどだ。帰国した残留孤児の招きで訪日した人も一部いるが、ほとんどの方々は高齢で地方にいるため、そうした人々を歌と踊りで慰問し、日本からのお土産などを差し上げているのがこの慰問団だ。

十一月十八日の朝日新聞は次のように報道した。

柱栄さんの「あの子（孤児）が日本人だろうと中国人だろうと関係ない。自分の子供でないと思ったことはない」という言葉に感激した鳩山氏は、「お母さんの心は、われわれ政治家がやってきたことよりずっと尊い」と労苦をねぎらった。

訪問準備の段階で中国側は、訪問最終日の午後の日程を江沢民国家主席との会談を想定して空けておくようにと、私たちに伝えていたが、前日になって会談が実現しない旨通告された。野党第二党の党首との会談を既成事実として認めるかの判断がつかなかったという説、日本の与党側から横やりが入ったという説、欧州主要国首脳が訪問中で日程調整がつかなかったという説が出回ったが、われわれには説明はなされなかった。

反論記事を掲載してくれた産経新聞

一九九七年一月には、民主党第二番目の訪問国として、韓国を訪れた。金泳三大統領、金

胡錦涛氏（現国家主席）と

大中、金鐘泌の三氏を始め、主要閣僚と会談した。出発の直前に、アジア女性基金から韓国の元慰安婦の一部に支援金の支払いを強行し、反日ムードが高まっている中での緊張した訪問となった。この訪問や前年の中国訪問での歴史や過去に関する鳩山代表の発言に対して、一部日本のマスコミが、鳩山さんの「反日性」のイメージを強調するようになった。これらの訪問の記者ブリーフィングを担当していた私としては看過できない事実誤認が含まれていたので、翌年たまたま高校の先輩がいる産経新聞と話をしたら、私の反論をコラムに掲載してくれることになった。一九九八年四月十五日付産経新聞は「私にも言わせてほしい」という

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ176

大きなコラムに、以下のように私の寄稿を載せてくれた。

（一九九七年一月）鳩山由紀夫代表はソウルにおける柳宗夏外相との会見で、元慰安婦に対する支援金は「受け取る方々に理解されて受け取ってもらう環境が必要。〝法律的に解決済み〟とするだけでは済まされない。より政治的、人道的観点からの解決が必要」と述べた。これに対し、柳外相は「韓国側は日本に金の要求はしないばかりか、慰安婦に韓国政府としての見舞金を支払った。しかし、これでもって日本政府に責任はないとするのは不可能」と述べた。

鳩山氏に同行した私は、この内容を記者団にブリーフ（説明）したが、各紙は一月十四日付朝刊で「国家的個人補償は必要　慰安婦問題　韓国外相が初言及」（産経新聞の見出し）などと報じた。韓国側は実際には日本政府に対し、個人補償を要求するような発言を鳩山氏にはしていない。産経新聞は、その後も鳩山氏が〝反日的〟であると印象づけるような報道を続けた。（その後、民主党本部には右翼が押しかけ大きな拡声器で批判を繰り返したが、）あたかも鳩山氏が韓国側から補償要求を引き出したかのように報じた事に触発された点も否定できまい。

本人の実像とかけ離れた「反日性」といった逆のイメージが形成されているが、鳩山

氏の愛国心は極めて高い。天皇陛下が国会の開会式にご出席の際、開会式自体に出席する国会議員が少ない中で、彼はしばしば国会内庭に出てお迎えし、お送りする。日本の政治を愛するが故に、祖父・一郎氏が作った自民党を弟・鳩山邦夫氏とともにあえて離党したと同じように、日本を愛するが故に、日本のあり方に厳しく、謙虚な姿勢を注いでいるのである。

「日本には過去の謝罪を迫るが、欧米は自らの旧悪には目をつむる」と批判する日本人も少なくないが、欧米は過去に対する対応を、近年極めて素直に実行している。第二次大戦中スイスに亡命を求めたユダヤ人追い返しに対するスイス大統領の謝罪と和解基金の設置。ユダヤ人迫害に対するフランス、シラク大統領の謝罪。第二次大戦中の日系二世迫害に対する米国ブッシュ大統領（父）の謝罪と補償金支払い。黒人奴隷差別に対するクリントン大統領の謝罪。インドネシア植民地支配に対するオランダ女王の反省表明、等と続く。

国が真に自立して、自らの尊厳を持つとき、他国に追随したり、こびたりする必要がなくなるとともに、なにものにもとらわれることなく自らの欠点や過ちを認めて、冷静に対応することができる。かくして信頼を得た国は、他国と対等の大人の関係を築くことができる。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ178

自社の記事に対する批判を含む寄稿をよく産経新聞が掲載してくれたと今でも感謝している。一切出てしまった記事には訂正しない、というスタンスが他の新聞社の姿勢だからである。ソウルに同行した記者は、韓国政府側のブリーフィングを鵜呑みにしていたことがこうした曲解の一因であることも判明し、私にとっていい勉強にもなった。

一九九七年七月民主党は横路孝弘副代表、仙谷由人政調会長、大畠章宏代議士、前原誠司代議士、玄葉光一郎代議士、齋藤つよし参議院議員と私による訪米団を送った。この訪問には私の友人で国際政治・軍事アナリストの小川和久さんが自費で同行してくれた。アメリカ要人との意見交換に小川さんのような専門家のアドバイスが私たちに有用だったことはもちろんだが、さまざまな局面やテーマにおけるアメリカ側の生の反応や現場での温度差を感じ取りたいという小川さんの研究課題にも役立つことができた。小川さんと私は、私が国会に行くまでの数年間、自民党総研の長期ビジョン委員会のメンバーとして一緒だった。田中六助元代議士が創設した自民党総研は日本の政党シンクタンクの草分けで、民間企業数社からの出向社員が事務方を務めていた。長期ビジョン委員会は国連外交や対アジア政策など外交や安全保障の長期的テーマの提案を政調会長に行うグループで、小川さんのほか、嶌信彦

（ジャーナリスト）、渥美堅持（国際大学教授）、松岡紀雄（神奈川大学教授）、小尾敏夫（コロンビア大学駐日代表）、木村哲三郎（亜細亜大学教授）の各氏などが参加していた。こうした学者グループの中に私が混じっていたのは、これからはＮＧＯの関係者のインプットが必要だという松岡紀雄先生のお誘いによるものであった。当時の自民党はこうしてＮＧＯ関係者の出入りも自由で、しかもこの委員会は自民党の政策とは独立した提案を自由に行うことができ、私にとっては貴重な勉強になった。

これに引き続き、民主党は九月に鳩山由紀夫代表、前原誠司代議士、藁科満治参議院議員、川橋幸子参議院議員、と私による訪米団を送った。この訪問に際し、事務局長を務めた私は、旧知の軍事アナリストの小川和久さんと、彼のアシスタントを務めたこともある私の政策秘書で、スタンフォード大学とハーバード大学卒の西恭之君の協力を得て、在日米軍の能力と機能を説明できる英文の資料を作成して、アメリカに持ち込んだ。

コフィ・アナン国連事務総長、ドール元大統領候補、アーミテージ元国防次官補（現国務次官）、スローコム国防次官や多くの上下両院議員などと交流したほか、鳩山代表がニューヨークのジャパン・ソサイティーとワシントンの戦略国際問題研究所（ＣＳＩＳ）で講演した。

これらの会合でこの資料は頻繁に使われたが、在日米軍がアメリカの世界戦略でこれほど必要不可欠な存在であることを知っている議員などは少なく、啓蒙、広報活動としては大い

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ180

リチャード・アーミテージ氏（現国務次官）と

に役立った。また、国務省や国防省の高官も、こちらから敢えて質しても、この内容に反論することはなく、これらの事実が認知されていることを確認できた意味は大きい。ペンタゴンでは、スローコム国防次官から日米間の事前協議の存在に気づかぬ発言を引き出したが、あわてて同席していた藤崎一郎公使（現外務審議官）が否定したことからも、日米安保に関する日米政府間の長年の微妙なつじつまあわせがあることが察知された。

日米安保は日本のただ乗りだという議論はもはや通用せず、むしろ、在日米軍がなければアメリカは湾岸戦争を戦えなかった、という事実をこれらのアメリカ要人に理解させたことの意義は小さくな

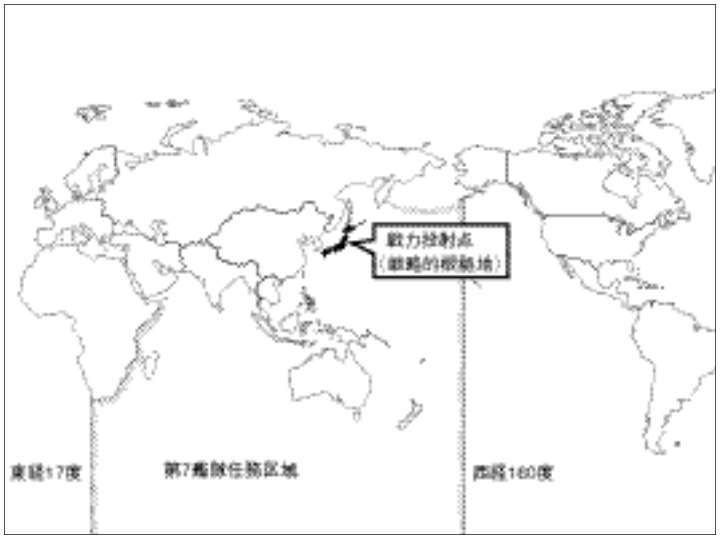


図１　米国のリーダーシップは地球の半分で日本に依存

いと思っている。一昨年のアフガニスタン攻撃や、今回のイラク戦争も在日米軍基地がなければ実現しなかったことも明らかである。しかし、日本政府自体が、こうした事実をアメリカに広く伝えようとしていないことに疑問を禁じ得ない。在日米軍基地の維持に日本政府、つまり国民がつぎ込んでいる税金は約六千五百億円である。

この時使った図表「日本―米国の世界戦略の大黒柱」の主なものは、は以下のとおりである。

〈図1〉

米国のリーダーシップが地球の半分で日本に依存していることを最もはっきり

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ182

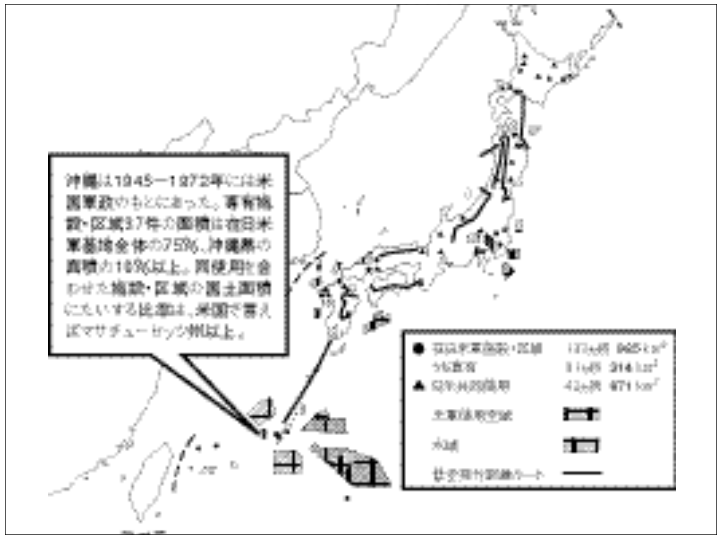


図２　日本が米軍に提供している施設・区域

と表しているのは、米国海軍最大の艦隊、第７艦隊だ。この艦隊は日本なくしては行動できない。その任務区域は西経160度（米国アラスカ半島および真珠湾西方百マイル）から東経17度（南アフリカ・喜望峰）の五千百万平方マイル。米国は第７艦隊任務区域の沿岸諸国と二千二百億ドルの貿易を昨年行った。その九八％は海上を輸送された。この貿易は直接的には三百万人、間接的には六百万人の米国人の雇用を生み出している。米国太平洋艦隊司令部によると、二〇一〇年までにこれらの雇用は倍増する。世界貿易の四分の一と中東産の石油の半分が東南アジアの海上交通路を通っている。

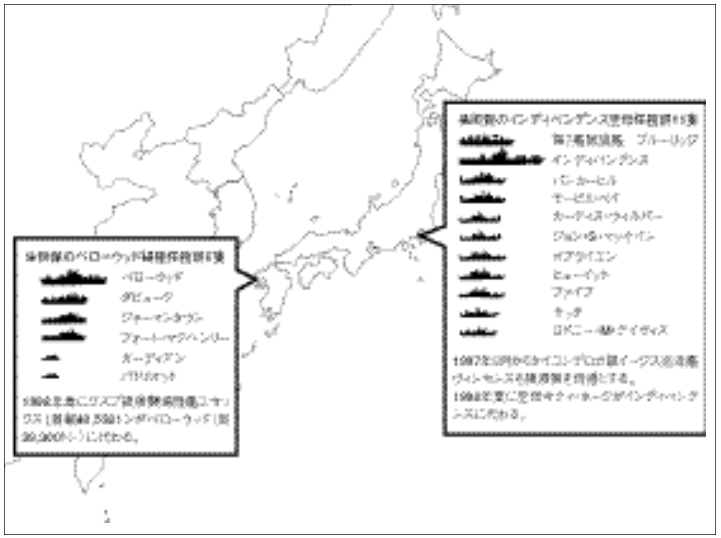


図３　海軍の日本での前方展開―米国の外では戦闘艦の母港はここだけ

〈図２〉
日本が米国に提供している施設・区域と沖縄が占める比量の大きさを示している。
沖縄は一九四五―一九七二年には米国軍政のもとにあった。専有施設・区域三十七件の面積は在日米軍基地全体の七五％、沖縄県の面積の一〇％以上。同使用を合わせた施設・区域の国土面積に対する比率は、米国で言えばマサチューセッツ州以上。

〈図３〉
米国海軍の水上戦闘艦と潜水艦の母港は米国の外には日本しかない。
米国太平洋艦隊司令部によると、この

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ184

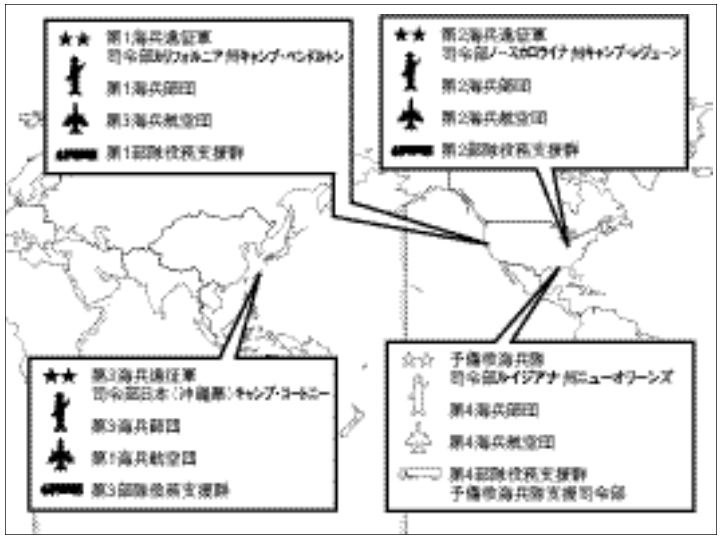


図４　世界の米軍海兵隊現役部隊の三分の一の司令部が沖縄に

前方展開なくして現在のプレゼンスと危機対処理力を米国本土の基地から確保するには三倍から五倍の艦艇が必要になる。

〈図4〉

米軍海兵隊の現役部隊の三分の一が沖縄に展開する。

平時には第三海兵遠征軍司令部は現役海兵隊員の三分の一よりかなり少ない部隊しか指揮していない。だが最高司令部は必要に応じて第1、第2海兵遠征軍の部隊を第3海兵遠征軍に組み込める。第3海兵遠征軍からはハワイの第1海兵遠征旅団と日本に配備されている航空機が湾岸戦争に出撃した。

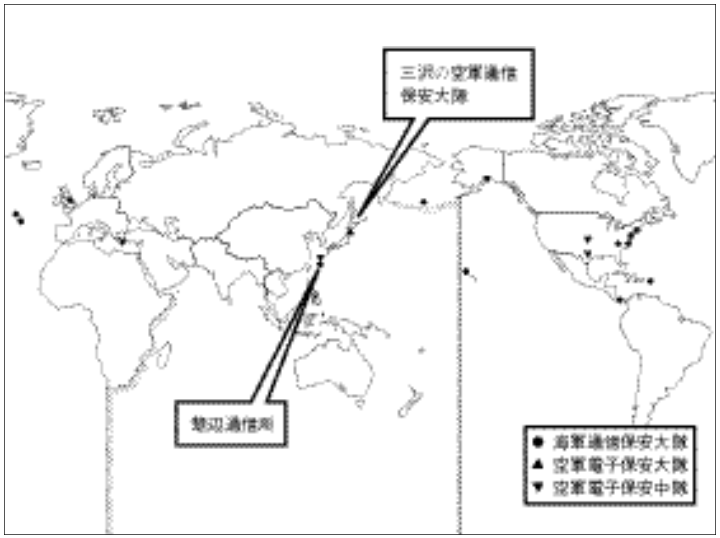


図５　信号情報収集（通信傍受）拠点としての日本

〈図5〉

信号情報収集（通信傍受）拠点としての日本はロシア・朝鮮・中国に近いという利点がある。青森県三沢の空軍第６９２０電子保安大隊、沖縄県読谷村ハンザ基地（楚辺通信所）の海軍通信保安大隊、同村トリイ・ステーションの空軍第６９９０電子保安中隊は東アジア地域全体の通信とレーダーを傍受している。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ186

二、「金喰いＯＤＡ」の現場に憤慨

水洗トイレつき、電動黒板つきの小学校

「難民を助ける会」でザンビア北西部のメヘバ難民キャンプで、井戸掘りなどのプロジェクトが軌道に乗ってしばらくしてから、とんでもないことが起こってしまった。

この地域には電気が乏しいので、木と竹だけで掘れる江戸時代から伝わる上総掘りによる井戸はとても有効だった。

電気がないといっても、まさか原始時代のような暮らしをするわけにはいかないので、キャンプの住民や日本のボランティアは生活に必要な最低限の電力を自家発電機でまかなっていた。

このキャンプのすぐ近くに日本政府の援助で小学校が建てられることとなった。住民は大喜びで、建設を歓迎し、建築の仕事をボランティアで手伝う人も現れた。

ところが出来上がった校舎を見て、皆唖然としてしまった。

なんと、教室には電動黒板が設置してあり、便所は水洗トイレになっていた。

子供たちは、この近代的な施設を見て大喜びしたものの、大人たちは全員顔をしかめた。水がないから井戸掘りをし、電気が乏しいから自家発電機を使っている地域に、水洗トイレと電動黒板をつけてしまったからだ。

「日本政府の援助があるうちはいいかも知れないが、一体どこから電気を持ってくればいいのか。水洗便所を維持するためには新たに、たくさん井戸を掘って、さらに汚水処理施設も拡大しなければならない。そして、この汚水をどこにどうやって運べばいいのだろう」

日本大使館の関係者に問いただすと、

「実は予算を消化しないと、次の事業を続けられなくなります。予算に見合う施設として別段、電気黒板や水洗便所はぜいたく品ではありませんから。問題はありません」

という回答だった。

実は同じ時期にザンビアで海外青年協力隊で活躍していた、ＭＲＡ出身の寒河江亮君は、この国に包帯が著しく不足しているので、包帯の援助を日本大使館に要請したが、大使館は即座にその提案を却下した。包帯は安すぎて、大量に援助してもＯＤＡの予算を消化できない、という理由だという。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ188

この二つから明らかなことは、「ザンビアに必要がなくても、予算を消化するためには、援助してしまい、この国に本当に必要なものでも、予算を消化できなければ目もくれない」という日本の援助哲学と体質の実態である。

現地の事情をまったく考慮せずに、自分たちの仕事を持続することだけを目的として、こうした迷惑な施設をどんどん作るのが、日本政府のやり方だと思うと、怒りを通り越して悲しくなってしまった。

せっかく上総掘りの井戸でキャンプの人々に喜んでもらったのに、これでは何のために動力のいらない技法をはるばるザンビアに届けにきたのか。私たちの努力を台無しにするだけでなく、キャンプの人の将来にも負担を与えてしまうではないか。

こうした事情はアフリカだけではない。包帯や注射器などの基本的な医療用具を求めている病院に、そうしたものを贈るかわりにCTスキャンを贈ったり、ガソリンを入手するお金がままならない貧農地域にトラクターを贈ったり、いったい何のための援助かという例がいくらでもある。

日本の役人は世界中が日本と同じ事情だと思っているらしいが、受け取る側が求めているのは経済的に発達した国の高価な機械ではない。発展段階に応じて最低限必要なものなのである。

不必要な援助や、単に予算を消化するだけの援助をやり続ければ、そのしっぺ返しが必ず帰ってくるに違いない。

最近の一連の外務省の不祥事は、そうした構造を浮かび上がらせてきた。大使館でゲストを迎えるために準備された私たちの税金で、自分たちの家族の食事代をまかない、しかも高級ワインなどを購入するぜいたくざんまいの大使や職員が大勢いることが報道されたときは、国民の皆があきれ果ててしまった。

しかし、海外の現場では、私たちの目が届かないだけに、あいかわらず不正がまかり通っているようだ。

政治家になりたくなかった私

一方、この「水洗トイレつき、電動黒板つきの小学校」は、私の人生にとって大きな副産物をもたらす、きっかけともなった。私は、大学を卒業して以来、「ソング・オブ・アジア」に加わり、MRAや「難民を助ける会」などでボランティア活動を行ってきた。正直、自分の心の中では、良いことをしているという自己満足と自負があった。しかし、この日本政府の無駄な援助を知ったとき、「自分だけが良いことをしているだけでは済まされない」と思うようになった。結局は私たちの税金が、遠い異国の地であまりにも無駄に使われるばかり

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ190

か、その国の国民と日本人との間の心に水を差すことは何としても防がなければならないと、いう強い怒りを感じた。と同時に、大学時代のアルバイトの経験から、「政治は汚いもの、はばかるもの」と避けてきた自分だが、結局は政治を無視すればもっと政治は悪くなるばかりで、霞ヶ関と永田町を変えていくしかないのだろうという思いを募らせることになった。

後にNGOから政治の道に転進した私だが、「政治家になりたくなかった政治家」の心の転機が、この「水洗トイレつき、電動黒板つきの小学校」にあったのである。

三、超党派の協力による対人地雷禁止活動

『地雷ではなく花をください』が国会議員のベストセラーに

国会議員バッジをつけると一年生議員と呼ばれる。日本社会の御多分にもれず、国会でも年功序列がまかり通っていて、一年生議員は未熟であるとみなされ、議会内での発言や活動になかなか参加させてもらえない。

これは、どの政党にもある悪弊で、議会全体の問題として直していかなければならない。しかし、どの政党にもこうした古い年功序列に眉をひそめている人は必ずいるもので、一年生議員が何かをしようとすると、出る杭を叩こうとする動きが出ると同時に、陰ながら助けようとする人も現れる。

鳩山さんや菅さんは、陰になって助けようとするタイプの人だ。もちろん民主党はさまざまな政党からやってきた人の集団なので、かつての政党の悪い面が持ち込まれることもある

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ192

が、全体としてはリベラルであった。鳩山さんや菅さんのようなリーダーが、自民党などから比べればかなり若いというせいもあった。

民主党のそういった雰囲気の中で、私は一年生議員であるにもかかわらず、まず最初の仕事として、懸案だった地雷の除去のための活動をしようと考えた。

一九九六年の選挙で東京の比例区から衆議院議員に当選して、わずか一週間後のことだった。熱海で民主党国会議員のためのの研修会が行われた。

私はその場で、民主党として地雷廃絶活動に協力してはどうかと提案した。NGO出身の議員として、今までの永田町政治ではない、市民と一緒に活動する政治を実現したかったからだ。

そのとき私は「難民を助ける会」が九月に出版したばかりの、『地雷ではなく花をください』という絵本をたずさえていった。定価は千五百円で、一冊売ると六百円の収益が出る。六百円のお金でカンボジアで十平方メートルの地雷原の除去ができる。こうしたNGOと市民による活動を目に見える形で支援することこそ「市民が主役」の政治にピッタリではないか、と訴えた。

私の提案を快く受け入れた民主党の議員たちは、次々にその本を買ってくれた。そのうちに他党の議員たちも買い求めてくれるようになり、中には他の人にも広めたいといって、まとめて買ってくれる人も大勢現れた。

国会議員だけの間で四千冊ほど売れ、国会議員のベストセラーとなったのである。

橋本龍太郎総理と小渕恵三外務大臣の協力

その当時の橋本龍太郎総理大臣は、すでに九六年のリヨン・サミットで「日本は地雷廃絶を目指す」と発言していた。それを受けた外務省は対人地雷全面禁止条約（オタワ条約）に加盟し、地雷を廃棄しようという方向で動いているかのように見えた。しかし、自衛隊が対人地雷を百万個保有しており、地雷廃絶反対の姿勢を崩さなかった。

そこで私はマスコミを動かし世論を動かすために、超党派の「対人地雷全面禁止推進議員連盟」を作る活動を開始した。ところが、絵本を買ってくれた議員のうち、野党の議員は議員連盟に参加してくれたものの、自民党の議員がなかなか参加してくれない。個人的に絵本を買ってくれる自民党の議員はたくさんいたのだが、防衛政策と予算修正に関わる問題なので、党の方針として対人地雷禁止には乗れないというのである。

「仕方がないから野党だけでやろう」

という声が起きたとき、私はこう発言した。

「やはり人道援助は超党派でやらなければいけません。政府が自民党ですから、自民党の

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ194

人が関わらなければ、政策の転換は難しいと思います。辛抱強く待ちましょう」

すると、自民党の衆議院議員で陸上自衛隊出身の中谷元さん（後の防衛庁長官）が議連に入ってくれた。

彼は地雷の敷設訓練をしたこともあり、地雷についてはかなり詳しい人だ。しかし、ＰＫＯの仕事でカンボジアに行ったときに、地雷の被害が一般住民におびただしいのを知って、ショックを受けたそうだ。

かつての地雷は、敷設した軍がちゃんとした地図を作り、戦争が終結した後に除去できるようにちゃんと保存していた。

しかし現在の地雷は、プラスチック製で、なかにはカエルやチョウチョウの形をしたものや、アイスクリームの形をしたものまである。しかも、正規軍ではなく、ゲリラなどが地面に埋めるのではなく木にひっかけておくものもある。これでは兵士を相手にしたものではなく、子供までも殺戮（さつりく）しようということではないか。

中谷さんはカンボジアのそうした実態を知って、地雷のような残酷な武器をなくすべきだと考えるようになった。自衛隊出身だからこそ、人一倍武器の恐ろしさに敏感だったのだろう。第一号の自民党議員として「対人地雷全面禁止推進議員連盟」に参加してくれたのだった。

その後、どんどん自民党からも議連に入る人が増え、九六年六月の段階では、三百八十八

人の国会議員が加入した。

しかも中曽根康弘、竹下登、海部俊樹、宮沢喜一、細川護熙、羽田孜、村山富市と元総理大臣七人の方々が、加入してくれたのだ。これはとても大きな励みになった。

橋本総理大臣に、議連の小坂憲次会長や中谷元会長代理、そして事務局長の私がこれら議員の署名を持って陳情に行くと、「よくここまで動いてくれたね」と評価してくれた。サミットで地雷反対を明言するなど、協力的だった背景として、次のような体験を話してくれた。

ひとつはサイパン島に遺族会の仕事で行ったときのことだ。対人地雷かたくさん埋まっているので、遺骨の収集ができないと断られた。

もうひとつは、朝鮮半島を南北に分断している三十八度線付近を国会議員で視察したときのことだ。ある議員が尿意をもよおして、横道で用を足そうとした。それを見た韓国兵が全速力で彼に体当たりし止めた事件である。国会議員は全員青ざめ、生きた心地もせずに韓国兵が踏み鳴らした狭い道を恐る恐る歩いたとのことである。

そうした経験から、橋本さん自身も当時国会で対人地雷禁止の声を上げたが、当時は誰も聞く耳を持ってくれなかったとのことである。

そして、今や三百八十八人の国会議員が、日本が地雷禁止条約に加盟すべきだという意思表明をしていることを知った橋本さんは、

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ196

「ぜひ引き続いて政府に圧力をかけて欲しい」と私たちを励ます一方で、後に聞いたところによれば、防衛庁に対して、「日本の国土防衛に、対人地雷が不可欠かどうか具体的に示せ。対人地雷以外に国土防衛の方法はないか」という防衛庁の痛いところをついた具体的な回答を求めたそうだ。

それを知らずに、われわれは、NGOと協力しながら、防衛庁包囲網を築いて行った。

「難民を助ける会」は、朝日新聞に「対人地雷全面禁止に賛同する一〇〇人」の全頁広告を掲載したり、銀座で地雷で傷ついた動物の着ぐるみの行進を行ったりして日本の世論の高揚に努めた。「一〇〇人」の中には中曽根康弘元首相や猪木正道元防衛大学校校長、西原正防大教授、軍事アナリスト小川和久氏など防衛問題の専門家も加わってくれた。

そんな折、英国のダイアナ妃が不幸な自動車事故で亡くなった。ダイアナ妃が地雷反対運動を精力的にやっていたということが、世界中で報道され、国際世論が盛り上がった。さらに九七年の十月には対人地雷禁止運動を展開している世界のNGO千団体のネットワークであるICBL（地雷禁止国際キャンペーン）と、そのリーダーであり、私も旧知のジョディ・ウィリアムズさんがノーベル平和賞を受賞したのである。平和賞は、ネットワークが賞金の半分を受け取り、ウィリアムズさんが残り半分を受け取るという異例の形での授与だった。つまり、ネットワークに関わる何百万人もの人がノーベル平和賞を受賞したことになる。

したがって私が関わっている「難民を助ける会」をはじめ、志を同じくするいくつかの団体もこの栄誉にあずかることになったのである。「難民を助ける会」は日本で最初にICBL（地雷反対国際キャンペーン）に加盟し、アジアで唯一の調整委員団体となっていたので、十二月十日に行われたノーベル平和賞の授賞式には長有紀枝さん（「難民を助ける会」常務理事兼事務局次長）が出席した。

ダイアナ妃の死と、ノーベル平和賞が追い風になり、国際世論が盛り上がったときに、新任の小渕恵三外務大臣が決定的な発言をした。

「日本でこれだけ地雷の除去活動がなされている一方で、その日本自身が百万個の地雷を持っていて、条約に入らないというのは、おかしな話です」

この大物外務大臣による発言は、政府を大きく動かし、日本政府によるオタワ条約加入の流れが決まった。それからは、ノーベル平和賞を受賞したICBL（地雷反対国際キャンペーン）のチャナレットさんとオタワ条約加入を求める署名を小渕さんに提出にいったり、外務委員会で外相に加入を迫る援護射撃の質問を行ったり、日本政府の加入に反対していたアメリカ政府や防衛庁との調整をはかる外務省の後押しをしたりの数カ月が続いた。

一方、この年の七月カンボジアではフン・セン首相によるクーデターが起こり、ラナリット首相やサム・レンシー野党党首も国外に逃れるなど混乱していた。そこで夏以降、カンボ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ198

地雷禁止国際キャンペーンのチャナリットさんと故小渕恵三外相に申し入れ

ジアのソン・スーベール国会副議長やサム・レンシー氏、アメリカのカンボジア問題特使のスチーブン・ソラース元下院議員などが日本を訪れ、そのたびに私は国会、外務省、アメリカ大使館、マスコミなどとの引き合わせを行っていた。スチーブン・ソラース元下院議員が来日したのは、息子幸英が亡くなった直後で、幸英が将来カンボジアのために尽くしたいと死の前日話していたことを話すと、彼はぜひ、フン・セン首相に最も影響力がある日本政府が同首相に対する働きかけを強めて欲しいと提案した。私は早速小渕外相にあって相談したが、小渕さんは極めて真剣に話を聞いてくれた。なぜ私がカンボジアにそれだけ思いがあるのかという話題になり、二十年近くの関わりに加えて、息子の願いのことも触れた。その数日後の夜、私の田端の自宅に突然小渕外務大臣が現れた。息子の弔問に来て下さったのだ。同じ北区の王子本町の自宅への帰宅の途中だった。小渕さんの温かいお人柄が偲ばれる。

オタワ会議の前日に日本政府によるオタワ条約調印が閣議決定が下された。小渕さんは急遽オタワに飛んで、九七年十二月三日、条約にサインすることができた。実は事前に、対人地雷全面禁止議員連盟の代表そして、小渕外相に同行しないか、とのお誘いをいただいたが、幸英の死後間もなく、喪に服したいとの思いから折角のお誘いをお断りさせていただいた。

小渕さんと最後にしっかりお話したのは、二〇〇〇年三月三十日、やはり、超党派の議員連盟の代表として総理官邸にお訪ねし、沖縄サミットに向けての「最貧国に対する債務削減」政策の陳情に伺った時だ。カソリック東京大司教の白柳誠一大司教や日本平和学会の北沢典子さんなども同席していた。私の真横に坐った小渕さんを見ると、いつもより顔が黄色っぽく見えて、言葉尻が普段よりもしつこい言い方だったので、随分お疲れのようだなと他の人と話しながら官邸を後にした。

その二日後に小渕さんは脳梗塞で倒れた。四月十三日、小渕さんは返らぬ人となり、ご遺体は順天堂大学病院から、王子本町の自宅に戻った。私の王子の事務所はご自宅から三百メ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ200

ートルのところにあり、国会議員で真っ先に駆けつけたのは私であった。

四、不登校児への通学定期を実現

一九九八年一月二十九日私は他党の議員とともに、一色真司・全国通信制サポート校協議会会長とらとともに文部省を訪れ、通信制サポート校の生徒に通学定期券が発給できるよう陳情を行った。そして生徒と父兄一万五千四百八人の署名を文部大臣に提出した。

通信制サポート校とは、通信制高校に在籍した上で通学して学ぶ教育施設。不登校生や高校中退者の学習の場として、当時全国で三千数校、一万人以上が通っていると言われ、通学者は年々増えていた。

しかし、通信制サポート校は文部省の学校教育法上の教育機関ではなく、ＪＲの「指定学校」として認められていないため、通学定期券を購入することができない。学校数が少ないため、遠距離を通勤定期で通う生徒も少なくなく、大きな教育的負担を強いられていた。

すでに義務教育である中学校に在籍しながら、不登校である生徒が通うフリースクールの

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ202

生徒には通学定期の支給が認められていた。中学校の校長が在籍を認めればという条件である。定期を支給するＪＲ各社は公共割引としての通学定期を発給するには、文部省の「指導」などがないと取扱い規制以上の判断はできないとの建前であった。

私たちは、通信制高校では四年かかって二割ほどの卒業実績しかないのに、サポート校に通う不登校生徒の八割が卒業しているという実績を示しながら、文部省の初等中等局の担当者に陳情した。結局文部省は通信制サポート校の所管を初等中等局から、生涯学習局に委ね、同席した寺脇研課長が受理することになった。

私としては、三カ月前に亡くなった幸英のことも思いながら、なんとか不登校生徒の支援を行いたいとの強い思いもあった。

その後、通信制高校の校長の中にも、「不登校や高校中退を経験した子供を社会に送り出すための対応」については、「サポート校などの複数の教育機関と連携し、学習、生活両面から、より総合的に生徒指導にあたることが重要」として、実習用学習定期券の申請を行って下さる人が出てきた。

こうした中、私は一九九九年二月十八日に有馬文部大臣に衆議院予算委員会で質問した。東大の学長であった有馬さんは、従来の文部省の立場を超えることはできなかったが、ご自身はこの問題に前向きな答えを出したいとの雰囲気はにじみ出ていた。その後も超党派の議

衆議院予算委員会で質問に立つ筆者

員グループで支援活動を行ううち、同年八月一日、とうとうＪＲ東日本が実習定期の解釈を大幅に拡大する形で、サポート校の生徒も通学定期の支給が受けられることが実現した。関東の私鉄もこれに合わせた。

その後私は、王子を中心に活動する東京シューレの支援をしたり、二十一世紀教育研究所というＮＰＯの理事に就任して、サポート校などによる不登校生の支援と啓蒙活動、ネットワーク作りを行っている。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ204

五、自衛官に大喝采を浴びた防衛庁追及

私は当選以来安全保障委員会に属し、日本の防衛問題に重大な関心を持ってきた。この間、釧路、横田、入間、座間、横須賀、硫黄島、岩国、江田島、沖縄などの自衛隊及び米軍の基地、並びに北富士演習場などを視察した。世界第四位の軍事費大国といわれながら、前述のように、米軍の艦船や飛行機の出入りを守ることが中心の兵力構成であり、釧路の戦車や兵器には一九六〇年代のものもあり隊員たちの生活環境も気の毒なくらい低く、また北富士演習場の演習も弾薬の節約のために数発しか打てない、といったちぐはぐな現場を見ることができた。自衛官がもっと誇りをもって国を守れるように、自衛隊の国民的認知と自衛官の生活環境の整備、時代遅れの早期退職制度の改善による天下り問題の解決等を支援しようと努力してきた。

そんな折、陸、海、空の各自衛隊の装備品を一元的に研究開発しているはずの「技術研究

自衛隊釧路駐屯地視察、左は中島弘毅外務委員長

本部」（以後、「技本」と呼ぶ）が、実際には組織内部での研究開発はほとんど行わず、幹部自衛官が天下っている防衛産業の各企業に丸投げしていることがわかった。装備品の研究試作品の発注仕様書自体も会社が作り、技本の担当者に渡した物を、いかにも技本の技官が作ったごとく装い、それを基に会社に研究試作品の発注書を出し、正当な価格の数倍の値段で受注させている現状が判明した。

さらに、悪いことには、納入された研究試作品が不良品であるために性能確認試験において契約書に書かれた性能が確認できないのに、担当技官が「合格」として検査を行い、税金で高額な支払いが行われることだ。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ206

私は、国会においてこのカラクリに対して鋭い追及を行った。その結果明らかになったのが、「将来機雷用複合センサーの不良品納入と試験失敗の隠蔽及び虚偽報告」事件だ。

すなわち、平成二年及び平成三年に第5研究所では「将来機雷用複合センサーの研究試作その(1)とその(2)」の開発ということで、両方で約十億五千万円の予算で実施された。その後、平成四年、五年、六年と最終的には都合三年間かけて性能確認試験が行われた。

ここで私が追及した点は、研究試作品を領収する段階で、仕様書で求めた機能を十分に満足していないことを承知していながら技本が受領していたという事実であり、その検査のいい加減さである。実際に性能確認試験を行ったとき、契約にある仕様の半分の性能も得られないのに、適当に試験を終了してしまい、最終的な管理報告の中ではなんと計画どおり終了したと記載されている。私はこの事実について防衛庁に「偽りの報告と不良品納入の隠蔽があった」と認めさせた。

しかも、技本全体においては、年間千五百億円もの研究開発費を使っていながら、航空機やレーダー等の研究テーマ七十八件についても何らの研究技術報告がなされていないことも明らかにし、これでは、自衛隊及び国民は、税金が何に使われたのかまったくわからない点も明らかにした。

私の追及の結果、当時の野呂田芳成防衛庁長官も、指摘された事実を認め事務次官も含め

事務官や技官関係者の懲戒処分を行った。（一九九九年七月二十五日）

停職処分 二名、戒告 五名、訓戒 三名、注意 四名

そして、今後の不祥事発生防止対策として技術研究本部内部に点検改善委員会なるものを設置し、研究管理の改善に努めるとの方向が出された。

私の国会復帰を待ち望む真面目な自衛官

これらの事実を国会で追及すると、日頃、災害派遣や海外での平和維持活動（ＰＫＯ活動）などに励んでいる割には、事務官や技官よりも定年が早く退職後の就職先にも恵まれない多くの自衛官から私に大喝采が巻き起こった。インターネットで、国会の私の質問に聞き入っていたとのこと。

しかし、私が落選し、追及がなくなると再び官僚と防衛業界との癒着が始まり、巨大な装備品開発プロジェクトがスタートするとともに内部告発と疑わしき者や非協力者への強力な粛清が行われつつあるとのこと。真面目な一般自衛官のためにも国会への早期復帰が待ち遠しい。

北区に十条駐屯地があり、その敷地の中に赤レンガの建物があった。地元の市民が、日本にも数少ないその建物の保存に動いた。私も国会で額賀防衛庁長官に質問したが、時既に遅

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ208

く、レンガを新しい建物の中に保存するという次善の策を取らせることで終結してしまった。この駐屯地の活動を理解し、支援しようという「十条駐屯地懇話会」という民間の団体があり、私も参加していたが、国会で防衛庁の追及を何度か行っているうちに、体よく出席を断られるようになってしまった。

真に自衛隊や自衛官のために後押ししたいと思っているだけに残念である。

六、NGOと国会議員との連携が国を変える

二年ほど前、スイスのマンツ大使の招待でケレンベルガー国際赤十字総裁を囲む昼食会が大使公邸で開かれた。前国連難民高等弁務官でアフガニスタン特別代表の緒方貞子さん、元国連事務次長の明石康さん、日本赤十字の近衛忠輝副社長などが同席した。

マンツ大使から国会からの人選を依頼されたので、スイスと関係が深いＭＲＡ議連の鳩山由紀夫民主党代表と谷川和穂元法務大臣にも出席いただいた。

アンリ・デュナンが一八六三年に設立した国際赤十字は、紛争地域での救援活動を行っている。赤十字というと赤い羽根募金などの募金活動などのイメージを持つ人が多いかと思うが、それは日本赤十字という団体の活動だ。国際赤十字は国連や各国政府以上に紛争地域の最前線で、捕虜の保護や戦争犠牲者の救援活動を行っている、まさに「命の救済者」で、正規の職員はスイス人しかなることができない中立のプロ集団である。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ210

ペルーの日本大使館人質事件でもゲリラ側と交渉ができたのは国際赤十字だけだし、最近もアフガニスタン北部でタリバン側の兵士に対する北部同盟側の虐殺に現場で警告を発して対応をしたのも国際赤十字である。

ケレンベルガー総裁に、

「国際赤十字の職員は、紛争地域のすべての当事者やゲリラ・グループと接触する権限が与えられているのですか」

と私が質問したところ、

「いや、すべてのグループと接触しなければならない任務があるのです！」

という答えが返ってきた。

「では世界中のすべてのゲリラ・グループやテロ集団と接触があるのですか」

と聞くと、

「ビン・ラディンのグループとフィリピン南部のアユタヤ・グループとだけは、相手側から拒否されたり、治安上の理由で連絡が取れていません」

との答えだった。

私が手がけて日本政府の調印に成功した、対人地雷禁止のオタワ条約や、小型武器制限の国連活動なども、もともとの提案者は国際赤十字である。大国のエゴで引きずりまわされる

国連と異なり、紛争解決の最前線で命をはる国際赤十字の活動に改めて驚嘆した次第だ。

国際赤十字は百年以上前から活動している有名なＮＧＯだ。設立者のアンリ・デュナンが一九〇一年に第一回ノーベル平和賞を受賞したという、国際的に信用のあるＮＧＯなので、こうした活動が可能なわけだ。

実際、冷戦後の世界は、国境を越えた地域紛争や、国内のグループ間の紛争が増えた上に、貧困、難民、薬害エイズ、麻薬、対人地雷、小型武器、地球環境問題など、未解決の問題が激増している。こうした事柄に各国政府では対応ができず、ＮＧＯ抜きでは解決が難しい問題がますます増えているのが実情だ。

ＮＧＯは、国連機関や欧米では政府のパートナーとして、近年では途上国でも政府や自治体のパートナーとしての役割を果たすまでに至っている。実際、軍事行動や武力制裁も協議する国連安全保障理事会も、三十ほどのＮＧＯと定期的な非公式協議を毎週行っているほどである。

たとえば難民問題に対応するには、紛争当事者各派とのパイプが不可欠である。私も関わったカンボジアの場合、フン・セン派、シアヌーク派、ソン・サン派、ポル・ポト派がそれぞれ難民や避難民を抱えていたので、和平プロセスと並行して各派の難民支援を進める必要があった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ212

日本政府が承認している派ばかりか承認していない派も、支援して政治的中立性を保つために難民支援の表舞台はＮＧＯに委ねられた。こうした日本のＮＧＯによる人道援助が、後に国連主導による和平の環境作りに大きく貢献した。

ほかにも、重債務最貧国の債務免除、ビルマの民主化支援、北朝鮮日本人拉致問題、北朝鮮亡命者支援、シックハウス対策、ダイオキシン対策、ＮＰＯ法など、さまざまな分野でＮＧＯの参画が目立っている。

ＮＧＯといっても、環境、人権、平和構築、女性の権利など、さまざまな分野がある。日本の場合、緊急援助と地域開発に携わる国際協力分野のＮＧＯだけでも全国で三百七十団体に上っている。

かつて、ボランティアには、自分の世界だけで生きる協調性のないタイプ、政府批判ばかりするタイプなども見られ、ＮＧＯ同士の協働が難しい時代もあったが、ＮＧＯが市民権を得、地力をつけるに応じて、優秀な人材がどんどん専従となっている。最近は元一流企業のサラリーマンや銀行員、防衛庁を含む役人、医師、欧米の大学の博士課程取得者などが多くＮＧＯで活躍している。

しかし、予算規模は、海外のＮＧＯに比べればとても小さく、安い賃金の専従従業員をやっと一人だけ置いているといった規模の団体が多い。いまだに「ＮＧＯはボランティア」と

単純に考える人が多いため、日本のＮＧＯはマネージメントという発想に欠け、「やりたい人がやればいい」「給与をもらうのはおかしい」という声に押し切られ、資金獲得のための活動ができないままに、ボランティアをやり続けているのが、ほとんどの団体の実態であると言えよう。

三年前にＮＰＯ法が成立した。従来の財団法人や社団法人の設立には手続き、時間、資金がかかり過ぎて民間のＮＧＯやＮＰＯがとても育たないので、手続きを簡素化し、寄付控除扱いを受けやすくするのが目的だった。しかし、政府が寄付控除を受けられる条件を厳しくしすぎたために、実際に控除扱いを受けられるＮＰＯは極めて少ない。超党派の働きかけでＮＰＯ法の早急な改正が望まれる。そして社会全体によるＮＧＯ／ＮＰＯの後方支援体制の強化が急務である。

その意味でも、国会議員がＮＧＯを支援するようなさまざまな制度を、率先して作り出してゆくことが急務であろう。

労働組合はＮＧＯ

私は一九七〇年代にゼンセン同盟の矢田彰さんの「インドシナ難民連帯委員会」の活動を支援したことがあるが、最近は地元田端に本部がある、ＪＲ東労組の「中国に学校を作る会」

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ214

や、アフガニスタン難民支援などの「ヒューマン・ネットワーク活動」を支援している。労働組合による人道支援活動は、リストラや不況の中でも着実に続いている。カンボジアや中国、ネパールなどでの学校建設、植林活動、井戸掘り、里親運動などに加えて、アフガニスタン支援にもすでに多くが取り組んでいる。労働組合によるNGO活動は、市民型NGOが持つ上記の足腰の弱さをカバーできる長所を持っている。安定した財政基盤、継続性、専門分野を持った人材の活用などである。

いつも私が強調することだが、そもそも「労働組合はNGOである」。利益追求を目的にする企業そのものはNGOになれないが、社員による労働組合は有資格者である。また、組合員、社員で個人としてボランティア活動を行う人が増えているのも喜ばしい。かつて連合が南アフリカのネルソン・マンデラ前大統領のアフリカ国民会議（ANC）を支援してアパルトヘイト（人種差別政策）廃止による黒人多数派政権樹立に貢献したことも特筆すべきである。世界の潮流に背き、日本政府がマンデラ氏の来日時に完全無視をしたときに、連合が支援をし、後に鷲尾議長がマンデラ大統領の就任式に招かれたほどである。人道援助に限らず、こうした予防外交的活動や選挙監視などもNGOとしての労働組合がより一層取り組むべき課題であり、国際労働財団など労組系シンクタンクの役割も大きい。

アフリカ国民会議のマンデラ議長（後の大統領）と連合山岸議長との通訳を務める

議員外交が存在しない日本

二〇〇二年五月に米国民主主義基金（NED）のカール・ガーシュマン代表が来日した。NEDは「冷戦後の地域紛争の解決や民主化支援にはNGOの関わりが不可欠」と考えたアメリカ連邦議会が、そうしたNGOに資金助成を行う助成財団として、一九八三年に設立したものである。NEDは連邦議会が決済する年間四十億円規模の予算を受け取り、民主党、共和党の二大政党、経済界、労働組合に属する四つのNGOを中心に他国のNGOにも助成を行っている。

こうした財団は一九八九年以前には、ドイツとアメリカにしか存在しな

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ216

かったが、冷戦終結後は、フランス、英国、カナダ、オランダ、スカンジナビア諸国、オーストラリアなどで設立された。

ポーランドのような新しい民主主義国でも設立されたほか、台湾でも、二〇〇二年七月に台湾民主基金会という財団が設立されている。また、韓国、タイおよびインドも民主主義に限定したイニシアティブを始めている。

ドイツの各政党の財団（シュティフトゥング）には、政府から直接資金が供与され、各政党の政策に沿ったプログラムを実施している。

英国のウエストミンスター民主主義財団は、外務省によって設立されたもので、議会と無党派のＮＧＯの事業を援助している。

これらの財団は、南アフリカや東ティモールの独立、旧ユーゴスラビアやミャンマーの民主化支援を各国政府とは異なる立場で、役割分担をしながら関わっている。ＮＥＤは北朝鮮の人権問題を扱う韓国のＮＧＯの支援も行っている。

先進国の中では日本だけにこうした機関が存在せず、外交の機能が硬直して、選択肢の狭い外交になっている。あいかわらずのＯＤＡを中心とする小切手外交は、承認した政府のみが対象となり、上記のような紛争解決には効果的な関わりができていない。

そこで、各国における民主主義支援の財団、シンクタンク、ＮＧＯなどの形態や役割等を

比較研究することによって、日本に最も適したモデルを模索するワークショップを日本で開催することになった。そして、ジャーナリストの菅原秀さんと協力しながら、この計画を推し進めることになった。

国会議員の反応は、予想していたよりもはるかに積極的だった。自民党、公明党、保守新党、自由党（当時）、民主党、社民党、共産党のすべてが、「海外の実例に学ぼう」ということで、快く参加し、このシンポジウムを開くための支援議員の会が結成された。

そして、昨年の十一月には、「議会とＮＧＯの連携による紛争解決、民主主義支援―冷戦後の新しい外交イニシアチブ」というワークショップが憲政記念館で開催された。

シンポジウムには、海外から議会と連携する七つの民主化支援財団が参加してくれた。

海外では、こうした財団が政府とともにＮＧＯを支援し、緊急援助や開発援助とは別に、民主主義醸成に必要な、「公正なメディアの支援」「選挙制度作りの支援」「議会制度作りの支援」「女性が政治に参加するための支援」などを行っているのである。つまり、今まで日本政府が行ってきた、モノの支援から一歩踏み込んで、民主主義がいまだ実現されていない国々に、民主制度を作ってゆくための支援が、世界各地で行われているのである。

シンポジウムでは、議会の予算措置や承認、政党機関の活用の仕方などについても各国の状況が紹介された。日本がこの分野に参画するようになれば、今まで日本のＮＧＯがぶつか

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ218

っていた壁を乗り越えてゆくことができ、さらに大きな国際貢献が可能になるだろう。

世界の紛争解決にとどまらず、国会やＮＧＯが有機的に関与することによって、日本の外交のあり方や手法そのものを一変することができると確信している。

七、カルザイ大統領就任後、日本人として初の会見

二〇〇二年六月二十四日から七月一日まで私は、民主党アフガニスタン調査ミッション団長として、アフガニスタンを訪問した。木俣佳丈参議院議員と民主党前カブール駐在員の青葉博雄さん、ＭＲＡの石田寛さんが同行した。

緊急国民大会議（ロヤ・ジルガ）終了直後でもあり、成立したばかりのカルザイ大統領による移行政権の動向を探るとともに、復興と国づくりに関する支援のあり方を探ることが目的であった。民主党は前年以来鳩山代表、羽田特別代表他九人の国会議員の訪問を通じてアフガニスタン政府要人との信頼関係を培ってきたほか、民主党のカブール駐在員事務所を設けて人道支援を行ってきた。今回、新政権誕生にともない、ひとまずこの駐在員事務所を撤退して、前年十一月以来行ってきた人道援助プロジェクトに区切りをつけるという任務も担っていた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ220

民主党ミッションの団長としてアフガニスタンを訪問。カルザイ大統領と会見する筆者

日本人へのビザ即日発給を即断即決

アブドラ外相との会談で、私はアフガニスタンで活動する日本のＮＧＯの仲間から要請を受けていた、アフガニスタン入国ビザの発給に日数がかかり過ぎるという障害の改善を求めた。日本に大使館のないアフガニスタンへの入国ビザは、パキスタンなどの隣接国にある大使館での申請に限られているため、隣接国で約一週間も待機を余儀なくされ、復興支援を行うＮＧＯ活動の最大の障害となっていたからである。これに対し、アブドラ外相は「これからは、隣接国のパキスタン、イラン、アラブ首長国連邦の大使館で申請する日本人に対しては即日発給を行う」と、間髪入れずに応えてくれた。あまりの即決に、同席していた駒野欽一大使がびっくりして、「しかし、大臣閣下、事務手続きを行うスタッフが大使館に不足しているのではないですか」とたずねると、大臣は、従来必要としていた大使館からカブールの外務省に対する照会を省くことによって即日発給を可能にすると答え、この措置を直ちに実施するよう秘書官に指示した。

カルザイ大統領との会見も実現したが、これは大統領就任後日本人としては初の会見となった。大統領は「もはや北部だ、南部だという地域も、パシュトゥン人だ、タジク人だという区別も、軍閥もない、新しいアフガニスタンの始まりだ」と、かん高い声で熱い思いを語ってくれた。民族衣装をイキにまとったベストドレッサーのカルザイさんからは、一週間以上も続いた 緊急国民大会議（ロヤ・ジルガ）が、難産の末に移行政権の樹立にこぎつけたという興奮が感じられた。大統領はまた、これまでの日本からの支援に感謝するとともに、両国関係のさらなる発展のために在日アフガニスタン大使館を早期に開設すると表明してくれた。

ほかにもガニ財務大臣などとも会見したが、実務家を配したカルザイ政権の閣僚からは、汚職追放や、地域・部族間の対立解消への強い決意とともに、即断即決ができる強いリーダーシップが感じられた。日本の政治家に最も欠けている資質である。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ222

バーミヤンに小学校建設のお手伝い

日本出発前に、北区、豊島区、練馬区、杉並区、中野区の「明るい社会づくりの会」から、同時多発テロ一周年にあたる九月十一日にチャリティー・コンサートを開くので、その募金の受け皿となる学校建設のプロジェクトを探してほしいとの依頼を受けた。

そこで、青葉博雄さんと交流のあるシュハダ・オーガニゼーションというNGOの代表で、女医のシマ・サマルさんを訪ねた。暫定政権の女性大臣を務め、数日前にカルザイ大統領から新設の人権委員会の委員長に任命された彼女の自宅は、トルコ軍の装甲車に守られていた。緊急国民大会議（ロヤ・ジルガ）での彼女の発言が自由すぎるということで、原理主義のグループから脅されているために国際治安支援部隊が派遣されていたのだ。

シュハダ・オーガニゼーションは、一九八九年に設立され、教育と保健衛生分野に特化したNGOで、四十六の初等学校、四の病院、十二のクリニックを運営している。相談の結果、タリバンによる仏像破壊で有名なバーミヤンに小学校を建設することになった。厳しい冬にも耐える構造で、女子生徒が外から見えないように外壁を作り、十の教室からなる石造りの校舎を、冬をまたいで一年がかりで建設することになった。七百万円を超える予算であるが、国連機関や日本のNGOの見積もりの半分から三分の一の予算であった。

「九・一一　愛と希望のコンサート」は、前早稲田大学総長の小山宙丸実行委員長の主催

机も椅子もない「希望スクール」の生徒たち

で池袋の東京芸術劇場で開催された。これに先立ち、この劇場前の池袋西口公園に作られた世界貿易センターの模型の前では実行委員会の青年ボランティアの手で四千本のろうそくがともされ、ニューヨークのテロの犠牲者の追悼が行われ、NHKなど多くのメディアで紹介された。

このチャリティー・コンサートによって「希望スクール」と名づけられた学校は本年八月に完成し、うれしそうな顔の小学生たちが通い始めた。といっても、新一年生の年齢は七歳から二十歳とのこと。タリバン政権時代には教育が許されなかったためにこれだけ年齢差のある一年生が誕生することになった。バーミヤン州のシャヒラ地区はシーア派イスラム教のハザラ人の住む地域で、二十三年続

いた内戦の間、民族的にも宗教的にも少数派として迫害を受け、教育施設がほとんどない。識字率は一桁である。州都から離れた山奥で十一月から四月までは全くの陸の孤島となる。この州の中でも最も貧しく、ビタミンCが少なすぎて皮膚病だらけとのこと。このような地域においては、学校は希望どころか夢であったに違いない。そう思うと、今まで支援したカンボジアや中国の学校以上の深い喜びがわいてきた。

第六章　世界がもし百人の村だったら

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ226

一、ひげをはやした池田さん

北区の慶応大学の同窓会である三田会ボーリング大会の懇親会に参加したときのことだ。不動産会社を経営する池田秀雄先輩がひげをはやしているので、

「どうしたのですか」と聞いたら、

「アメリカのアフガニスタンに対する空爆の日から伸ばし始めました。テロはよくないが、民間人を犠牲にして、軍事的手段で対応するのは間違いだと思い、戦争が終わるまで伸ばし続けるつもりです」

との答えだった。

私は一昨年の冬は、事務所のスタッフや地元の議員の皆さんに協力していただいて、連日のように赤羽駅や王子駅でアフガニスタン難民支援の募金活動を行った。地元からは和田宗春都議、鈴木隆司区議、福田伸樹区議、和田良秋区議、榎本一区議、林千春区議などが快く

参加してくれた。

「内戦と干ばつで飢餓状態にあるアフガニスタン難民一人を一カ月二百円で支えることができます！」

との私たちの呼びかけに、多くの人々が反応してくれた。二百円を募金してくれた王子駅の子供といい、池田さんといい、自分の意思を行動で示す市民が増えることは社会の強さにつながると思い、勇気づけられた。

特に、小学生や中学生が寄付してくれたのには涙が出る思いだった。子供たちのほうが、戦乱で苦しむ難民に対する感性が豊かであり、かつ、思ったら自分の意思で行動できるという柔軟性を持っているのかなと思った。茶髪の若者も快く協力してくれた。

「今時の若い者は！」などと大人が言っていられない、ということを改めて思い知らされたのである。

政治家が行う募金活動であるにもかかわらず、十円玉や百円玉、さらには万札まで入れて下さった方々の温かさが身にしみた。寒い冬の街頭活動にもかかわらず、一日で四万円近くの寄付をいただいた日もあった。感激、感激の連日だった。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ228

二、小学生の夢をかなえるには

「はじめに」で述べたように、地元田端の滝野川第一小学校の卒業式に毎年出席するのが楽しみだ。小学生の考え方がとても健全で、思いやりに満ち、私たち大人の心を洗ってくれるからだ。

この学校では、いつも七十五人位の卒業生が体育館の壇上で卒業証書を受け取る前に、一人ひとり、将来自分は何になりたいかという希望を述べることになっている。明るく微笑みながら父兄や、先生方にお辞儀をするのも微笑ましい。

最初は退屈だなと思ったのだが、卒業生たちの将来の希望を聞くたびに、その夢に引き込まれてしまい、私はなんとすばらしい卒業式に参加できたのだろうと嬉しくなる。こうした感性と洞察をもった子供たちを育てた先生方の指導とご父兄の支援に深い尊敬の念を抱いた。

しかし一方で、この六年生が、これから、いじめや、受験戦争や、さまざまな中学時代の逆風に立ち向かうことを考えると、ぞっとした。

社会の矛盾を最も鋭く感じ、それに対する抵抗を伸びのびと表現できる小学生が、社会のさまざまなひずみが凝縮する中学生活を無事に乗り越えられるかどうかは、二十一世紀の家庭や社会生活にとって極めて重要なことである。小学生が集団生活のしがらみに対する免疫性に乏しいままで中学生活に突入するとき、大人社会の入り口にあり、その誘惑や、打算、不満が充満している中学生活とのギャップに翻弄されてしまうことが多い。

素直な心と、問題対応能力の未熟さや経験不足とのアンバランスを一人の力で超えるのは至難の技である。ここに親、教師、地域コミュニティー、マスコミを含めた大人社会全体の本気の対応が必要である。

それには大人が自己反省に基づいて、生き方を変えていくことに尽きると思う。私は今、十条で電器店を経営する荒井哲夫さんのアイデアを受け入れ、全国の中学二年生全員を毎年海外体験旅行に派遣するという提案をしている。中国での植林ボランティアやカンボジアでの難民支援なども体験させるものだ。感受性の強い時期にこうした体験をすることが人生を変えることになる。いじめやストレスで閉塞し、マイナスのエネルギーでいっぱいの中学生にプラスのエネルギーが生まれるならば、日本全体をプラスの向きに変えることができる。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ230

単なるいじめ対策や家庭崩壊対策以上に、大人を変え、国を変える原動力となる！

そんな金が国にあるわけがない、とお考えと思うが大丈夫！　百二十万人いる中学生に随行の教師をつけて、約二週間を二十万円で派遣したとして約四千億円。無駄な公共事業や税金の無駄使い、銀行に対する三十六兆円の公的資金注入、諫早湾の干拓事業、二千三百億円の在日米軍基地の負担金六千五百億円に比べれば、十分可能で効果的な予算の使い方になるのではなかろうか？

三、飛鳥山の桜と足立区産のワシントンの桜

毎年桜の季節は、飛鳥山公園のすぐそばの私の事務所のまわりは、桜が咲き誇っていて、気持ちがいい。

特に、王子駅からガード下をくぐると続いている親水公園は、桜の並木の下を通ることができて、その美しさを堪能できる。事務所に訪ねてこられる人にとっては近道なので、桜が皆さんを歓迎してくれることになる。

事務所に入ってくる人は必ず、

「桜がきれいですね」

とニコニコして入って来られる。

私もつい嬉しくなり、いつもより話が弾むことになる。

桜を見るといつも思い出すのが、ワシントンのポトマック川沿いのタイダル・ベイスンと

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ232

いうところに植えられている三千本の桜のことだ。

この桜は、相馬雪香さんのお父さんの尾崎行雄氏が、東京市長時代に当時のタフト大統領夫人に寄贈したものだ。

実はこの桜は日露戦争のときに積極的に仲裁活動をしてくれたアメリカへの感謝の印であった。尾崎行雄氏はこの行為に報いるためには、外交上、何らかの働きをしなければならないと考えた。しかし、当時の桂内閣は、戦争で疲弊しており、何かを考えられるという状態ではなかった。

「政府が何もできないのなら、私が行動を起こそう」

そのときアメリカのタフト大統領夫人が、ポトマック川沿いに日本から桜を輸入して植えようと考えていることを知った。

「良い機会なので、先方に買ってもらうのではなく、東京市からワシントン市に寄贈するということで桜を贈ろう」

そう考えた尾崎行雄はさっそく行動を開始し、一九〇九年二千本の桜を船で贈った。ところが、害虫とその卵が付着していたために、検疫にひっかかり、全部の苗木が焼却されてしまった。

これを知った尾崎行雄氏は、

首都高王子線の「五色桜大橋」開通式で

「今度は健全な苗木を贈りましょう」

とアメリカ側に約束し、桜の芽から選び、丁寧に消毒しながら若木に育て、三千本の苗木を出荷した。

一九一〇年三月二十七日、桜の苗木は、タフト大統領夫人の手によって植樹された。これが今でもワシントンを訪れる人々を楽しませているのである。

尾崎行雄氏が贈った桜の苗木は、足立区内で採集された優秀な五色桜の苗木であった。

昨年五月首都高速道路王子線の、荒川にかかる橋の開通式が行われた。この橋は結婚後私たちが住んでいた足立区扇のすぐ近くにあり、荒川の上、二百メートルにかかるアーチ型の壮大な橋である。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ234

この橋は五色桜大橋と命名され、その式典では川の両岸の町会から神輿が出された。毎年神輿担ぎに参加している宮城町会の仲間の皆様のお誘いで、私もこの町会の半纏を着て、しかも花棒をかつがせてもらった。高速道路の橋の上という一世一代の神輿を祝うかのように、この日は雲ひとつない五月晴れであった。私は近年地元の神輿担ぎに精を出していて、浅草の三社で神輿を担いだといったことが自慢の種にはなるが、この五色桜大橋で担いだというほど羨ましがられることはない。

四、国を支える中小企業を支えるために

町の声と国際外交の落差

NGO出身の私に対して、

「藤田さん、外交や防衛も大事ですが、もっと町の発展や中小企業の救済策を考えてくださいよ」

と言われることがある。もっともな話である。最近の私は外国に行くことも少なく、むしろ地元の中小零細企業の支援のために対外関係改善の政策提言を行っている。今や中小企業問題と国際通商関係は表裏一体なのである。

今や、日本の車と電化製品は世界を席巻しているが、こうした巨大産業は、下請けや孫受けまで含めた、広い裾野によって支えられている。ここ北区や足立区などに昔から栄えてきた地場産業の多くが、巨大産業の末端につながっている。北区の場合、四万社ほどある企業

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ236

と商店のうち、上場企業はわずか四社だけ。日本の産業と雇用はまさにこうした中小零細企業が支えているのである。

しかし地場産業にとっての大きな問題は、世界に進出している大手産業のパイが、日本国内の地場産業の裾野に広がらずに、各企業の空洞化政策によって、海外に広がっている点である。

日本製品には確かに「メイド・イン・ジャパン」とは書かれているものの、その実態は中国などの海外生産拠点で作られたものに大きく占められている。農産物の大部分が輸入品にとってかわられるようになったように、日本製品を製造することによる恩恵も、海外に吸い取られるようになって来たのである。

こうした事態を解決するためにこそ、政治の力が必要となってくる。人民元の切り上げに向け、各国との連携による囲い込みを進めるなど、大掛かりな政治力が必要である。しかし、今の政治では、空洞化に悩んでいる中小企業の救済は後手後手になっている。

大手銀行や、大手証券会社の救済が先だというのも、いったん倒産すればその被害が裾野に広がるからという意味では納得ができる。

しかし、昨年度の自殺者が三万二千百四十五人。このうち男性が二万三千八十二人と七割強。六十代一万一千人、五十代八千四百人、四十代四千八百人で、中高年齢者が四分の三を

占める。借金、倒産、就職失敗、生活苦など経済的理由による自殺も増大するばかり。最近北区の花屋さんが自殺をしたり、知人の税理士の顧客の五十代の経営者二人が自殺したとのニュースも耳にした。生涯かかっても銀行返済のメドが立たず、保険に入って家族と従業員を守ったというパターンだ。「貸し渋り」や「貸しはがし」などへの抜本的な対応をしっかりしなければ、日本の経済を支えている九〇％ともいわれる中小企業の未来はない。

倒産は必ず防げる

一昨年十二月、私が主催している第六回政経フォーラムで、岩井義照さん（岩井経営研究所長）が「倒産は必ず防げる！」というテーマで講演した。

「企業を救う医者」というニックネームを持つ岩井さんは、今、日本政府がアメリカに公約した不良債権の強制処理を行うのは、「日本の銀行をつぶすことによって、日本の個人資産をアメリカに引き寄せるためだ」と解説するとともに、この政策では二十五万社の倒産と二百万人の失業者が発生すると警告した。

そして、倒産を防ぐ秘訣を以下のように伝授してくれた。

一、資金をいかに手元に置くかがが重要！　そこで銀行に預けてある預金を借り入れの

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ238

ない銀行に移す。借り入れのある銀行に預けていれば、必ず銀行に取られてしまう！

二、負債を減らす。銀行は預金が事実上担保だと言うが、それは違う。借り入れ時に指定したものだけが担保である。したがって、借入金と預金は連動しない。売掛金も借入金のない銀行に移すべきだ。

三、荒利益を出して、利息を払っていれば〝正常債権〟である。銀行は資本金を貸しているだけである。貸し渋りに対しては〝返し渋り〟で対抗しよう。

四、競売を恐れるな！　競売になれば、一銭も払わずに済む。銀行は一銭も取らない。

五、担保に入れた不動産だけ捨てれば、無借金経営ができる。

六、個人保証は独禁法違反の悪法である。居住地内の担保は、保証人以外の名義に移し、共有にして対抗しよう。

これ以上の詳しい秘訣は、私に直接尋ねていただきたい。

岩井さんのアドバイスは、まさに中小企業が、生きるか死ぬかの戦いにまで追い詰められていることを物語っている。最後に岩井さんは、今の政権を変えなければ日本の中小企業がつぶされると警告してくれた。

民主党は、岩井さんの知恵も生かして、以下のような「銀行等の中小企業者に対する貸付けの適正な運営の確保に関する法律案」を本年の第１５６通常国会に提出した。

① 銀行は貸付ける前に、契約条件を借り手に説明することを義務化する。

② 銀行は契約の内容を書面で借り手に交付することを義務化する。

③ 貸付け条件に、企業の成長性、事業計画なども加える。

④ 担保提供は、借り手の生活基盤を損なわないようにする。

これは銀行貸し付けを規制する最初の法律で、銀行の貸し手責任を明確にし、倒産に際しては最低限の財産を手元に残すなど、再チャレンジの道を残そうとする政策である。ほかにも、担保や個人保証を過剰に求める取引慣行を改める一環として、信用保証協会の保証融資や政府系金融機関から個人保証を廃止する政策を提言している。また、中小企業向けの資本・債権市場を創設して、直接金融に道を開く政策も推進している。さらには、「下請け代金支払等防止法の一部を改正する法律案」を二〇〇一年に提出している。民主党はこうした議員立法を含む多くの政策提言を行っている。これに対して政府、与党は後に、これらに似た、あるいは真似した政策や法案を提出するケースが増大している。野党第一党としては、たとえパクられても国民の立場に立った政策提言を行っていくのが本道であると思う。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ240

中小零細企業向け融資の拡大と、サラリーマン救済

政府は二〇〇三年度は国債依存度四四％、長期債務残高六百八十六兆円という財政破綻の中での緊縮予算を決定した。

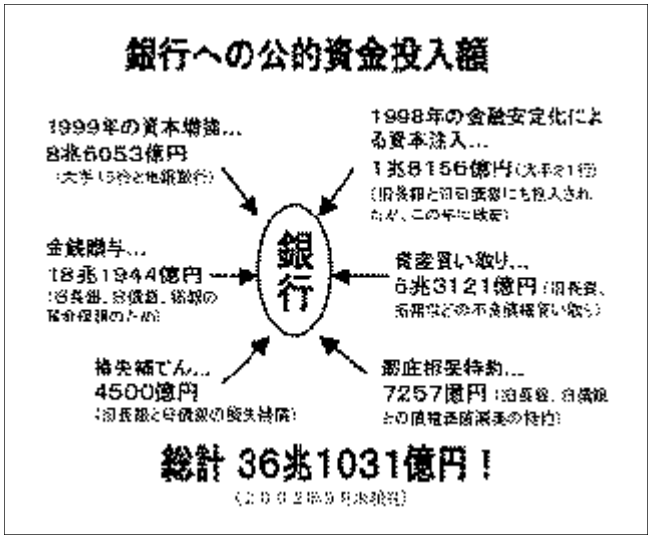
年金支給額や生命保険の受取額のカット、医療費の負担増、発泡酒やワイン、タバコの増税、専業主婦の戦後初めての所得増税など国民負担増だらけだ。

こうした緊縮予算を強いられた背景は、過去五年間、政府は銀行救済の名目で、三十六兆円もの私たちの税金を銀行につぎ込んだ**(左図)**。これは、人口を一億人とすると一人あたり三十六万円だ。これでも土地と株は下落し、私たちの三十六万円の税金はドブに捨てたも同然だ。

しかも、政府は、株価の下落を防ぐ株価維持操作（ＰＫＯ）のために、一日百五十億円余りを株式市場につぎ込んだ。最近は回復したとはいえ、小泉内閣成立以来三割も下落している。

生命保険予定比率の引き下げも銀行救済策であり、私たちの生命の最後の砦を脅かす、憲法違反だという議論すらある。

もはや、りそな銀行に対する三度目の公的資金投入や、ゼネコンの債権放棄のような問題の先送りでは危機を回避することはできない。りそなへの公的資金投入は、国が経営責任を



取るべきところを取らずに、トップの首だけすげ替えて経営責任を問わない、おかしなものである。「不良債権処理と景気回復とを両立させる政策として、銀行の一時国有化」が急がれる。

政府が十年間何もしないことに対して不信感を持った市場は、日本売りと日本買いの揺さぶりをかけている。国際の応札率の低下や国債の長期金利の下落に至れば壊滅的な状況に陥る。

一時国有化の断行によって日本政府が、市場やルールを尊重する政策に転換するというメッセージを発信しない限り市場は納得しまい。

単なる公的資金導入は、税金をドブに捨てると同じだが、一時国有化の後で再生す

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ242

る民間企業は、株価も上がり公的資金（税金）を国民に戻すことができる。
スウェーデンや韓国で再生された銀行は中小企業に対する融資を倍増し、倒産や銀行による貸しはがし、ホームローン破綻による自殺などを防ぐことができる。

この政治不況に拉致されたサラリーマンなどの庶民をデフレから救い出すため、私は消費拡大に向けて次のような緊急提案をしている。

一、食料品、教育費、医療費等生活必需品の消費税をゼロにする。
二、交際費課税をゼロにする。
三、固定資産税を時限立法で三〇％軽減する。
四、中小企業経営者の個人・法人所得を合算してフラットタックス化する。
五、貸しはがし対策として、信用保証協会の保証融資と政府系金融機関から個人保証を廃止し、「特別信用保証」を復活する。
六、中小企業空洞化の元凶である中国人民元の切り上げと、円安を実現する。

私はこうした政策を、商店や中小企業の経営者や税理士などさまざまな方々に提案しているが、ほとんどの方々から賛同をいただいている。

しかし、なかには民主党が中小企業を支援していないと勘違いしている人もいる。
今年のある新年会で、浮間の酒屋さんから、
「民主党は、規制緩和に伴う酒類業界の経営環境を守る特別措置法に反対だと、酒屋の組合で聞きました。岡田克也幹事長がジャスコ（イオン）の会長の息子だからだとも聞きました。これが本当なら民主党は支持できません」
との抗議を受けた。
これは全くのデマである！　民主党は酒販業界の健全な競争環境を確保するという立場から、与党提案の「酒類小売業者の改善等に関する緊急措置法案」をはるかに改良した修正案を提案した。その結果、与党側は民主党による修正を受け入れたのである。もちろん民主党の修正の経緯とその内容を、全国小売酒販組合中央会の幸田昌一会長も了解している。
偶然が幸いした。私はちょうどこの資料を持っていたのである。その場で、この酒屋さんに資料を渡すとビックリして、誤解を解くことができた。
どうも民主党に敵対する人々による悪質なデマのようなので、誤解を解くために地域の酒屋の皆さんにこうした経緯を説明した資料をお送りした。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ244

地域の若返りを目指す経営者

またまた新年会の話になってしまうが、今年もそば組合と理容組合の新年会に出席した。ここ数年毎年百二十くらいの新年会に出席している。町会、商店会、業種組合、労働組合、趣味・スポーツ団体などである。自民党の国会議員や都議会議員の皆さんは三百くらい出席するとのことだが、私はとてもお金が持たない。近年は業種組合の新年会も参加者が激減しているが、この両組合はあいかわらず意気盛んで、私を安心させてくれた。

この両組合に共通するのは、

一、技術やサービスについての勉強会などがあり、組合加入のメリットがある。

二、自前の店舗が比較的多く、まとまった設備投資が必要である。

三、数人規模の従業員が必要で、技術教育や後継者作りに努力している。

などであるが、同時にこの点が他の飲食、サービス業と異なっているとも言える。

しかし、この両組合でも不況は深刻で、特に安売りチェーンの参入が悩みの種とのこと。金利が安いから、多少足が出てもどんどん店を増やして、まず地元の店の客を奪ってしまう、という戦術だ。ゼロ金利の見直しがこの点からも必要だ。

また、経済の荒波に飲み込まれず、自立した経営を維持している企業もある。こうした企

業の知恵を学ぶことも必要なことだ。

そのなかでもひときわ元気な小山酒造の新社屋落成式に出席し、挨拶をさせていただいた。東京二十三区唯一の造り酒屋として、「愛酒報国」と銘を入れた「丸真正宗」は、地方の大手酒造会社を相手に大健闘中である。それ以上の偉業は、小山光三社長の信念による地元岩淵の活性化である。二十三区で最も高齢化が進み、若年年齢が少なく人口流出の続く北区の流れを変えるために、工場敷地内に建設した高層マンションの居住者に年齢制限を設けたのである。

つまり若い人々の街にすることよって地域の活性化に貢献しようという試みである。年齢を限定してもほとんどの物件が埋まり、順調なスタートとのこと。道路部分や緑地も地域に潤沢に提供し、地域の環境改善にも大きく貢献している。本来は政治や行政が行うべきことを、それらがやらないならまず自らできることから努力してみようという小山さんの姿は、「難民を助ける会」を作った相馬雪香さんを思わせる。

小山社長の思いを、政治が実現するためにも、再び国会からこうした民間のイニシアチブを支援していきたい。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ246

「愛酒報国」の鏡割を行う。（右から鈴木恒年足立区長、羽田孜元総理、藤田幸久、菅伸子（菅直人夫人）、花川興惣太北区長、遠藤幸男連合東京事務局長

五、首都高王子線の大気汚染対策を国会で質問

私は二〇〇〇年四月二十六日の衆議院建設委員会において首都高速中央環状王子線について質問した。「首都高速中央環状王子線は、高速五号池袋線と高速川口線を結び、中央環状線の北側を形成します。この新しい環状線により、都心環状線に集中する交通を分散できるため、高速道路網が効率よく運用され、交通渋滞も少なくなります。また、環状方向の一般道路を利用する交通が、高速道路を利用するようになり、一般道路の交通状況が改善されます」。

首都高王子線は約七割が完成しており、平成十四年度の供用が予定されているが、排気ガス対策など環境対策が不十分であるとの指摘が周辺住民からなされていた。

周辺住民が特に心配しているのが、飛鳥山トンネルを抜けて西巣鴨方面に向かう明治通り沿いの登り部分である。自動車の排気ガスは、登り勾配においては平坦走行に比べ格段に増

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ248

加することが知られているが、現在建設中のこの区間は、飛鳥山トンネルを抜けると六％勾配の登りが五百メートル続き、通常の三、四倍もの排気ガスが予想されているからである。

四月二十六日の建設委員会で、私は、①浮遊粒子状物質（ＳＰＭ）は、昭和六十一年の王子線環境評価では評価項目となっていなかったが、現在では評価項目となっており、本年一月の尼崎公害判決では、ＳＰＭと健康被害との因果関係が認められたこと、②六％という急激な勾配に対する環境対策上の基礎資料なしに工事が続けられてきたこと、などを指摘し、大気汚染対策の抜本的な取り組みを求めた。

予防医学・予防外交の例をひきながら、事前対策の必要性を主張する私に対して、中山建設大臣は「病院に入っても死んで出て来る人もいるわけで、病院に入った人がみんな生きて帰って来るのならいいけれども」という問題発言を発し、環境対策に後ろ向きの姿勢を示した。

飛鳥山自治会など四自治会、馬場商店街など二商店会等からなる周辺住民は有効な汚染対策としてシェルターの設置を要請してきた。私はこのシェルターの設置を主張したが、首都高速道路公団の北川理事は換気塔の排気ガス吸引能力不足を理由に設置に反対の立場を取った。もっとも、北川理事はシェルター設置の代案として、当初の計画では三・五メートルであった遮音壁を七メートルの高遮音壁にすることを正式に発表した。高遮音壁には騒音低減

地元町会の皆さんを招き、首都高王子線の大気汚染状況を視察

効果のほか、ＳＰＭ低減効果もあるという。

国会質問の結果、首都高速道路公団は、二〇〇二年の開通に先立ち、明治通り周辺に電気集塵機を取りつけた。

私は「王子に尼崎公害のようなことが決して起こらないように」、今後も建設省に環境対策を求めていくつもりだ。

第七章　「泣く政治」から「笑う政治」に

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ252

一、民主主義といのち

二〇〇三年アメリカによるイラク攻撃が行われた。「イラクの自由作戦」と名づけられ、当初は中東全体の「民主化」が大義名分に使われた。

しかしアメリカ国内では、ニューヨーク市議会など百四十一の地方議会が武力行使反対の決議を行い、イラク攻撃の大義名分は、大量破壊兵器の廃棄やテロ支援国家といった理由に切り替えられた。

実際ニューヨーク市の決議では、

「査察行使のすべての手段を尽くすべきだ。戦争は法と人権を侵害するとともに、戦争負担はアメリカ市民の福祉をも低下させてしまう」

とまでうたっていた。

国連のコフィ・アナン事務総長までもが、「米英が国連決議を無視して武力行動を行うな

らば、国連憲章違反だ。平和的な解決を目指すのが国連本来のあり方だ」と、米英の強行姿勢に強い警告を発していた。

アメリカのイラク攻撃に反対するデモは六十カ国で行われ、一千万人以上の人々が参加した。ブッシュ政権と国際世論とのギャップは大きく広がった。フランス、ドイツ、ロシアばかりか、スカンジナビアやオランダなどの中立国や隣のカナダまでもアメリカの単独軍事行動に反対していた。

こうした世界の潮流が日本に伝わるまで、たいてい半年から数年の時差がある。こうしたギャップを埋めるのは、マスコミの役割であり、政治家の役割だと思う。

英国では、私の旧知であるクレア・ショート国際開発大臣と、ブレア首相の人権外交の立役者のロビン・クック前外相（与党院内総務＝日本の幹事長に匹敵）が、イラク攻撃に反対して辞任した。毎年代わる日本と違い、数年務める英国閣僚の辞任は極めて重いものである。

また、イラクの脅威に対する英国政府報告書の誇張に関する疑惑に関して、イギリス国営放送ＢＢＣの記者が相次いで、議会などで真相を明らかにしている姿勢に勇気づけられる。日本でＮＨＫの記者や一般紙の記者が、国会で総理官邸や外務省の疑惑について堂々と証言する日を一日も早く見たいものだ。

結局日本政府は米英の武力攻撃に賛同するよう関係国に対する多数派工作まで行った。国

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ254

連重視外交と平和憲法はどこに行ったのかと、ヨーロッパやアジアの友人が私に問い詰めてきた。

七月の通常国会末に、自民、公明、新保守の三党は、イラクに自衛隊を送る法案を成立させた。だが、そのイラクでは占領軍として君臨するアメリカ兵が、「サダム・フセインなきイラク国民」の手で、六十人以上が命を落とし、イギリス兵やデンマーク兵、そして外国人ジャーナリストまで犠牲者が増え続けている。イラク全土が実質的な戦闘地域で、自衛隊派遣の時期も内容も決められない状況にある。

株価以上に国の信頼が下落したと言えよう。

「おかしなこと」を感じたら行動するのが世界の市民だが、頭で感じても傍観してしまうのが日本の市民の悪い風習だ。このギャップを埋めることも緊急の課題だ。

そんな思いでいたら、朝日新聞七月二十九日付の「ひと」の欄に、元防衛庁局長で新潟県加茂市長の小池清彦さんに関する次のようなコラムが載った。

イラク特措法案の廃案を求める要望書が先週、全国会議員と閣僚に届いた。「イラクは小規模不正規軍によるゲリラ戦場。自衛隊を送れば明確な海外派兵になり、憲法九条違反だ」。

現地では米英軍への襲撃が続く。なのに小泉首相は「野盗や強盗のたぐい」とし、「殺されるかもしれない。相手を殺す場合もないとは言えない」と発言する。黙ってはいられなくなった。

米国から防衛増強圧力が高まった八〇年には、中枢の防衛局で防衛力整備計画の一年前倒しに取り組んだ。

そんな人が、なぜ？「あれも米国の言いなりだったが、増強の意義は日本にもあった。今回はブッシュ戦争の尻拭いにすぎない。自衛隊が命をかけるのは祖国防衛だけでいい」

要望書を読んだ自民党議員からは「戦争に流れる空気を変えるため、お互い頑張ろう」と電話があった。

「日本中が大東亜戦争に突き進んだ時、風潮を恐れず正しいと信ずることを言うべきだった。今、そんな思いで行動している」

日本にもこんなすばらしい人も少なくない。これからは「市民力」の時代だ。この市民力のネットワークを高め、それで政治や行政を変えていこう。

私の難民支援の仲間たちは、鈴木宗男代議士問題で知られるようになった大西健丞さんの「ジャパン・プラットフォーム」を窓口に、難民支援や復興支援に取り組んでいる。私たち

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ256

が戦場での死体や犠牲者に混じっての活動でいつも実感するのは、「戦争をしないこと」が最大の難民対策であり復興支援であるということだ！

今後、国際社会が真剣に考えなければならないのは、「自由や民主主義」と同等に、あるいはそれ以上に「命」を大事にするということではないだろうか？

人権も、個人の主権も、民主主義も「命」がその原点ではないだろうか？

小泉首相は国会の演説で、

「武力行使なくして、大量破壊兵器の廃棄はできない」

と述べたが、武力攻撃そのものが大量破壊行為である。また、「ひとごとではない」とも述べたが、戦争で犠牲になる多くの「命」はひとごとではないのだろうか？

確かにサダム・フセインは息子のウダイ、クサイとともに、人々を逮捕し、拷問にかけ、殺害するなどの恐怖政治を行っていた。こうした独裁者は、ユーゴのミロシェビッチ大統領のように国際刑事裁判にかけ、綿密な調査に基づき、亡くなった人々や国家に対する賠償責任を明確にし、生涯を費やしての償いを求められなければならない。

しかし、アメリカ政府は国際刑事裁判の機能を確実にするための条約への参加を拒みながら、イラク攻撃に踏み切った。民主主義を守ることを国是としているアメリカは、民主主義の根源である「命」の存在を置き去りにして、独裁者を排除するための効率的な手段として武力攻撃を選んだ。

アメリカはベトナム戦争で敗北した教訓を忘れているようである。人類は過激派によるテロリズムに屈しないとともに、国家テロリズムにも屈しないのである。

なぜなら、その根源には「命」を守るという厳然とした真実があるからである。「命」を守ることができて、初めて民主主義が機能しているといえるのである。

そして、そのことに世界の大多数の人々が気づいているのである。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ258

二、地球、地域、市民が泣いている

今の地球、とりわけ日本の周囲を見回すと、命を始め、地域、そして市民（庶民）が泣いている姿に出っくわすことがあまりにも多い。

一、地球が泣いている

欧州の熱波、地震、集中豪雨、冷夏など世界各地での異常気象が続いている。

二、命が泣いている

イラクで失われた命に限らず、子供が被害者になったり加害者になって失われた命、無実の人々の命、正義感で万引きを止めようとして失われたの命などが泣いている。治安の悪化、被害者救済の不備、外国人犯罪への無策も明らかである。

三、中小零細企業の経営者が泣いている

経済失政の責任を取らずに「庶民泣かせの政策」を連発する政府。

昨年の自殺者は三万二千人。四十歳以上の中高年齢者が四分の三、交通事故死者の三倍も自殺に追い込まれる国は他にない。

四、主婦やサラリーマンが泣いている

専業主婦に対する増税、医療費自己負担率の値上げ、年金や生命保険の受取額の引き下げ、タバコ、ワインや発泡酒の増税など庶民泣かせの政治が続いている。

五、税金が泣いている

三年間で国会議員の逮捕は七人、辞職が九人。知事の辞職が三人。すべてが脱税、賄賂、ピンハネ、高級退職金などによる国民の血税の悪用による。税金が泣かされる「政官業の癒着構造」こそが不景気の最大の原因と言える。

六、区長や市長が泣いている

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ260

霞ヶ関は仕事と人は地域に押し付けたが、それに伴うお金（予算）は付けていない。区長や市長泣かせの政治が地域を支配している。

三、地球、地域、市民に笑顔を取り戻す政治

これまでの政治を逆転させて、地球、地域、市民に笑顔を取り戻す政治を実現したい。

一、中小企業に笑顔を

政府系金融機関による個人保証制度の廃止など担保至上主義や個人保証制度を見直す。「貸し渋り対策」の中小企業・商店街支援予算を七倍に。中小企業融資を倍増させる金融システム改革。下請け代金支払遅延を防ぐ法整備などの政策を総動員する。

二、主婦やサラリーマンに笑顔を

食料品、医療費、教育費の消費税を当面ゼロに。その後に、基礎年金と介護保険料に代わる新型消費税を導入。子供一人につき一％の住宅ローン減税の実施。実質四割の

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ262

医療費の自己負担率を二割に引き下げる。

三、税金泥棒退治

政権交代後に、天下りの廃止と高級官僚の入れ替え、または再任用を断行する。各省に目安箱を設け、不正行為や税金泥棒の内部告発（公益開示）を行う。「口利き情報公開」も推進。同一選挙区からの二世議員には地盤相続税を課税する。

四、区長と市長に笑顔を

霞ヶ関のひもつきの補助金に代わり、区や市が自由に使える一括交付金への税源移譲。もう区長や市長を泣かせない！（国会で、私は税源移譲を伴わない地方分権法案は、片手落ちだと反対した。）

五、若者に笑顔を

若者への住宅費支援や、子供の教育費支援、幼稚園や保育所の民営化を行い、もっと若い人々が増え、住みやすい政策を実現する。成人年齢と投票権を十八歳に引き下げる。中学二年生全員を毎年海外体験旅行に派遣。植林ボランティアや難民支援なども体験させる。いじめ対策や家庭崩壊対策以上に、大人を変え、国を変える原動力となる！

国から区への税源移譲で、“泣く区長”から“笑う区長”へのロゴを抱える。花川興惣太北区長（左端）と鈴木恒年足立区長（右端）

泣く政治

笑う政治

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ264

四、破壊ではなく建設によって作り出す未来

自分が変わることによって生まれる平和

こうした「泣きの政治」から「笑いの政治」への転換をはかるには、破壊ではなく建設の精神が必要だ。そして、一人ひとりが変わることによって、「泣き顔」から「笑い顔」に変えることも必要である。

二〇〇三年の四月、王子の北とぴあで開かれた、東京土建の第五十五回定期大会に出席した。不景気にもかかわらず中小零細の土建業者によるこの組合の北支部は、二〇〇三年一月には、北とぴあの裏に自社ビルを建てている元気なグループで、土建国保の確保や「公契約法」の実現を目指して活発な活動を展開している。

私は次のように挨拶した。

「毎日世界中の人々が、テレビを通してイラクの〝破壊、破壊、破壊〟ばかりを見せつけられています。こうした時にこそ〝建設〟が大切です。民主主義や自由の名のもとに大量破壊兵器のデモンストレーションであるかのように人の命が奪われています。人権や人の尊厳の元は命です。その命を救うためにも戦争の早期終結を訴えたいと思います」

破壊よりも建設に取り組みたいという気持ちを持つ日本人は、他の国より相当多いと私は思う。しかし、社会全体や他の国に対する貢献意識や善意は、戦後ずっと金鉱のように埋もれたままであった。

周辺諸国のことはさて置き、あまり深く考えなくても、日本は平和につかって生きてくることができ。その結果、多くの日本人が「命をかけて守るに値するもの」を忘れてしまったのだと思う。民主主義についても、自由についても、人権についてもそうだった。

紛争だらけの世界の現実とはかけ離れ平和な「台風の目の中にいる」日本人のそうした価値観に衝撃を与えたのが、国連ボランティアとしてカンボジアに派遣された中田厚仁さんの死であった。厚仁さん自身の行動のバックボーン、さらには死後のお父さんの言動を通じて、中田さん親子の価値観は、多くの日本人に新たな価値観として、生き続けることになったと思う。

つまり「世の中には命をかけるに値するものが存在するのだ」ということが自然な形で日本人の心の中に与えられたのではないか。中田さんのような人はそう大勢はいないだろう。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ266

しかし、日本人の中にも埋もれている「善意」や「志」という金鉱が掘り起こされたのは確かであろう。

冷戦が終わり、ボーダレスの世界は互いに違った考え方を持つ者同士が共生できるようにしない限り、平和は実現しないという時代がきている。違った民族、宗教、価値観を持った人間が共存していくためには、互いに違いを受け入れ、相手との関係づけを変えていくしかない。言い換えるなら、自分が変わらなければならない。自分が変わることで相手との関係づけが変化し、信頼関係も生まれる。

そうした土壌があってこそ、戦争をなくすための仲介もできるし、和解し、平和の建設も可能になる。

報復の循環に代わる和解の循環

米国同時多発テロは、人類全体の秩序、文明、人間の尊厳に対する卑劣な挑戦であり、テロとの戦いは国際社会が取り組むべき二十一世紀最大の総力戦となった。日本はただ単に日本人被害者が出た「巻き添え国としてではなく、挑戦を受けた当時国の一つ」のつもりで主体的な行動を取るべきである。

しかしその主体的な行動とは戦争という暴力に頼った行動であってはいけない、国民の英知を絞った、暴力を使わない対決でなければならない。

私のニューヨークの友人の娘が九月十一日の同時多発テロで殺された一方で、アフガニスタンで私の関係する「難民を助ける会」が支援していた地雷除去のＮＧＯのスタッフ四人がアメリカの誤爆で殺された。こうした連鎖を絶たねばならない。

アメリカは、今回の戦いは文明の衝突でも、イスラムとの宗教戦争でもなく、テロに対する「二十一世紀の新しい戦争」と位置づけた。確かに、テロ活動そのものは宗教や文明ではないが、「貧困と宗教やイデオロギーが結びついたところに革命家やテロリストが生まれる」（柳田邦男）という原点に立ち返り、「テロ活動の温床や構造を変える戦い」に挑まなければならない。

日中戦争やベトナム戦争では、農民や行商人の姿をしたゲリラによる奇襲が勝利を収めた。それ以上に今度は、隣の学生や、学者や、ビジネスマンが、国境を越えたテロリストであるという「見えない敵との戦いであり、街の中に前線がある戦い」である。

さらに二十世紀の戦争は軍備に勝る国々が勝利を収めたのに対し、テロ集団は「攻撃する相手の民間航空機、新幹線や生物化学情報などを手に入れ、自らの武器として使用することができる」。

テロリストは、市民に混じり、空港や、テレビ局、原子力発電所といった市民社会の象徴

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ268

を攻撃することができる。しかも、「自らが信じるものに殉教して天国に行く！」と信じる確信犯なので、そうした自爆行動を事前に防止することも極めて難しい。

無差別テロという手段やテロリストが使用する武器を武装解除することは不可能に近い以上、「テロを支える人々の心を武装解除」するしか本質的な解決方法はない。

言い換えれば、テロを支えている多くの民衆の心をつかむ心理戦など、今まで私たちが思っても見なかった総力戦で勝利を収めなければならない。テロの温床と構造を形成する「重層的な格差」を解消するための総力戦だ。

今回の同時多発テロが、報復が報復を呼ぶ憎しみの悪循環に陥らないためには、国際的な英知と連携が不可欠である。テロの温床を絶つには、先進国と低開発国のさまざまな格差を解消すると同時に、日本など先進諸国のこれまでのふるまいに対する謙虚な反省が不可欠である。

「報復の循環に代わる和解の循環」をあちこちで行い、すでに各地で人々が積み上げて着た世界的潮流を強く推し進めるべきである。

「本を忘れず、末を乱さず」という言葉がある。国民が多くのものにとらわれている現状から脱却するには、身近なできることをコツコツと積み上げていくしかないと思う。

それには、憎しみを捨てて、たとえ自分とは違う意見を持つ人とでも一緒にやっていける

よう、自分の心に磨きをかけ、広くすることである。

そして、人類の遺産を破壊することなく、建設によって社会や国と国との関係を、一歩一歩良いものにしてゆく、それが私たちに与えられた知恵である。

憎しみを伝える人、憎しみをいやす人

数年前に会った「日韓合同授業研究会」というグループは、高校の先生が中心になり、日本と韓国で共同で授業をやっている。韓国について、日本の学校で授業をする。韓国でも日本について授業をする。そしてお互いに訪問し合って、韓国の学生たちが日本について感じていることを作文を書かせる。そこに日本の先生が出て行って、日本のことについて教える。韓国のほうも日本を訪問し、一緒に同じテーマについて話し合いをするという、日韓共同授業を行っている。

おそらくこうした地道な交流の積み重ねの成果が、昨年のサッカーのワールドカップだったに違いない。日韓の若者たちは、汗まみれ、涙まみれになりながら、お互いに助け合うというすばらしい経験をした。決勝戦では、日本人の若者たちが韓国人の応援団に加わり、大声で、「韓国がんばれ」の声援を送った。

かつて軍国主義時代に陰惨な差別が行われていたことをすっかり忘れさせるような、さわ

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ270

やかな光景をあちこちで目撃することができた。

ワールドカップで生まれた友情は、「近い国だからこそ、お互いに助け合おう」という純粋なものだった。日韓の国民全員が、そうした気持ちを持っていれば、お互いに戦争を行おうとする気持ちは生まれないだろうし、仮に為政者が戦争を始めようとすれば、日韓の若者たちが手と手を取り合って、総理官邸や青瓦台（大統領府）を包囲し、「私たちはあなたがたの命令には従わない」と声を上げるだろう。

お互いの理解こそが、戦争をなくす唯一の道である。相手を理解しようとせず、相手を悪魔だ、鬼だと決めつけることも後を絶たない。タイで子供が悪さをすると、母親が「クメール（カンボジア人）を呼ぶよ！」と子供をなだめ、旧ユーゴでは「イスラム教徒を呼ぶよ！」と脅かす。クメール帝国やオスマン・トルコ帝国時代の凶暴な隣国のイメージを数世紀も後の今も、母親たちが子供たちに伝えている。憎しみを子供に伝え続ける、恐ろしい歴史である。

逆に、伊藤博文を殺した韓国の安重根の看守であった千葉十七が、安重根の人となりや考え方に大変感激をして、宮城県にある自分のお墓の脇に安重根のお墓を作った。そして、一九九六年秋には、韓国の安重根のご家族が宮城を訪れ、一緒に供養をしたという、いい話がある。こうしたいい話を伝えるということを、どんどんやっていくことこそ、戦争回避への

大きな努力だと思う。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ272

あとがき――日本を変えるトップと国民

日本の総理に必要なのは、日産自動車のゴーン社長より塙会長

政治家は、国の経済の安定と、対外政治の安定の両面を成功させることを求められる。国民の期待を集めて、「変人」といわれながらも長期政権を維持している小泉総理だが、経済の舵取りでも「抵抗勢力」の前に大胆な改革ができず、対外政治でも数多くの難関に直面している。

昨年春、ジャパンタイムズの小笠原敏晶会長が主催した「もう止められない！　社内の英語公用語化」というシンポジウムで、パネリストの日産自動車塙義一会長と昼食を共にした。お二人とは、コー日米欧経済人円卓会議でご一緒して以来、親しくさせていただいている。

かつて塙さんが私に、

「日産は沈み行くタイタニック号の上で、皆でメニューを争っているようだ」と言っていたのを思い出し、

「日産の改革の成功はゴーン社長よりも、（社内の反対を抑え）彼を迎える環境と段取りを

つけた塙さんに拠るとことが大きいのではないですか」

とたずねたところ、日産改革の成功の秘訣について次のように答えてくださった。

「古い体制を取り除く仕事はトップ自身が行うものです。トップがやらなければ他の人にはできません。次に会社の〝はらわた〟にあたる中堅が改革に思い切って取り組める環境を作り、彼らにやらせます。幹部は改革の必要性はわかっていても、自分からリーダーシップは発揮しないものです。中堅は改革しなければと思って幹部に相談するものの、幹部はそれにあまり応えてくれません。そこで中堅は混乱します。若手は上で何が起こっているかわかりません。したがって、今お話したようなやり方が必要になるのです」

この話を現在の特殊法人改革にあてはめてみると、小泉総理自身が、既得権を握る省庁や与党の族議員（抵抗勢力）、つまり古い体制を取り除き、石原伸晃長官に（ゴーン社長のように）具体的な改革のメニューを作成させ、実行させる道を開いてやる、というやり方が必要なのではないだろうか？

お話をうかがって、小泉さん、というより小泉さんであれ菅さんであれ、日本の首相に必要なのは、ゴーン社長の役割以上に塙会長の役割ではないか？と強く感じた。

政治家_0918 22.2.17 0:22 PM ページ274

駿台学園で講演した小沢一郎代議士（中央）、鈴木康史元区議（右）と

利権政治から、国民政治へ

塙さんが言う「中堅」とは、一般サラリーマンや一般国民であろう。国会に関していえば、近年政策形成のプロセスがNGOの出現で大きく変化している。業界などの圧力団体が族議員や関係省庁に働きかけるというのが従来のパターンである。しかし、近年は国会議員が仲立ちをして、NGOが関係省庁と直接政策のやりとりをする場面が増えている。生の情報や経験を持つNGOは、議員以上に政府の不備を指摘し、政策や活動での提言を行うことができる。しかも、こうした政府、国会議員、NGOによる三者協議には関係省庁が同時に出席するので、縦割りの垣根を超えた省庁間の調整も行

われる。たとえば、気候変動枠組み条約・京都議定書（COPⅢ）の際にはテーブルの片方に環境庁、通産省、外務省の役人が並び、その反対側に多くのNGOが並び、両脇に国会議員が行司役のような形で座る。そうしたやりとりの中から議定書の中身がかたまった。

一方日本でも、過去数年間にわたって、NGOと政府の間で様々な直接協議の場が設けられてきた。たとえば、外務省の間では国際協力NGOセンター（JANIC）、関西NGO協議会、名古屋NGOセンターを中心に一九九六年から「NGO外務省定期協議会」が年四回開かれている。ほかにも、財務省、国際協力事業団（JICA）、国際協力銀行（JBIC）とも同じような対話と協議の場が設けられている。かつて、NGOを〝反政府〟と見ていた政府関係者も少なくなく、またそう誤解されるような子供じみた言動をしていたNGOも存在した。それに比べ相互理解と信頼醸成が進んでいることは間違いない。

また、対米追随外交という政治的・戦略的課題を別にすると、小切手外交とも呼ばれるバラまき外交と、公式チャンネル（ファースト・トラック）偏重外交が、他国に比べて日本外務省の特異な外交手法であった。ODAをもじって、ある外国人が、O（お金）D（だけ）A（あげる）と皮肉ったことがある。先ず予算ありき、次にその予算を単年度の中で消化すること。そのための箱物作りの案件をコンサルタントとゼネコンが作文し、受益国側からそれを提案させるという仕組みである。受益国では、フィリピンのマルコス大統領、インドネ

シアのスハルト大統領、マレーシアのマハティール首相、カンボジアのフン・セン首相などの指導者にその援助の多くが渡り、国民にはあまり恩恵は渡っていない。これに、政治家が絡む利権外交が横行し、相手国の国民感情も逆なでし、外交関係を妨げたものも少なくない。〝鈴木宗男代議士のムネオ・ハウス〟はその極端例であろう。

しかし、今、必要なのは、ただ単にＮＧＯの政策参加や、ＮＧＯと政府、国会との協議の整備だけではない。むしろ政治や外交そのものの再構築である。野口悠紀雄教授の言う「一九四〇年体制」と呼ばれる官僚統制、直接税中心の税体系、銀行優位の間接金融システム（金融統制）、地方分権を妨げる中央集権的財政制度、無駄な特殊法人や公共事業、カラ出張なども生み出す単年度制の予算システム、そして、規制緩和や消費者優先社会を妨げる生産優先主義や競争否定の「大政翼賛会的総与党体制」である。外交においては、戦後処理の半世紀近い先送り、賠償に代わる開発援助型の不透明なＯＤＡ、冷戦下でのアメリカ追随の外交（外交の不在）、日米地位協定や思いやり予算に見られるような独立国にはあり得ない不平等性、などの抜本的見直しである。

政権交代なき利権政治にメスを入れ、透明性と説明責任を持った国民主導の政治への政権交代の時である。トップと国民との共同作業による「利権政治から、国民政治への転換」である。

政治家がイヤだった私が、国民と政治の架け橋として政治に取り組む原点がここにある。

二〇〇〇年六月の総選挙で東京十二区において初めて実質的な選挙を体験した私は、六万四千九百十三票を獲得したが、九万二百八票の八代英太郵政大臣に敗れた。突然品川区から移って立候補したタレントの栗本慎一郎候補が二万九百二票を取り、非自民票が分散したことが痛く、惜敗率も七二％で東京の民主党候補者の中での次々点に終わった。

十一月にも予想される総選挙では、私の選挙区では東京で唯一公明党候補（太田明宏代議士）が出馬する全国有数の激戦区となる。このやりがいのある戦いに再度チャレンジし、「国民が泣く政治」から、「国民が笑う政治」の実現を目指したい。

長年、多くの方々からさまざまな経験をいただいてきた私の軌跡を本に著したいと思ってきたが、持ち前の不精と地元での活動に忙殺されてきた。そんななまけものの私に執筆を勧めてくれたのが、ジャーナリストの菅原秀さんである。そして、ただちに、友人でパロディ作家のマッド・アマノさんがカバーデザインを引き受けてくれた。またこの出版を快く引き受けて下さったジャパンタイムズの小笠原敏晶会長と清水実顧問、そして急な出版にもかかわらず懇切な指導をいただいた齋藤純一出版局長に心から感謝を申し上げたい。